

文學博士坪内雄蔵著



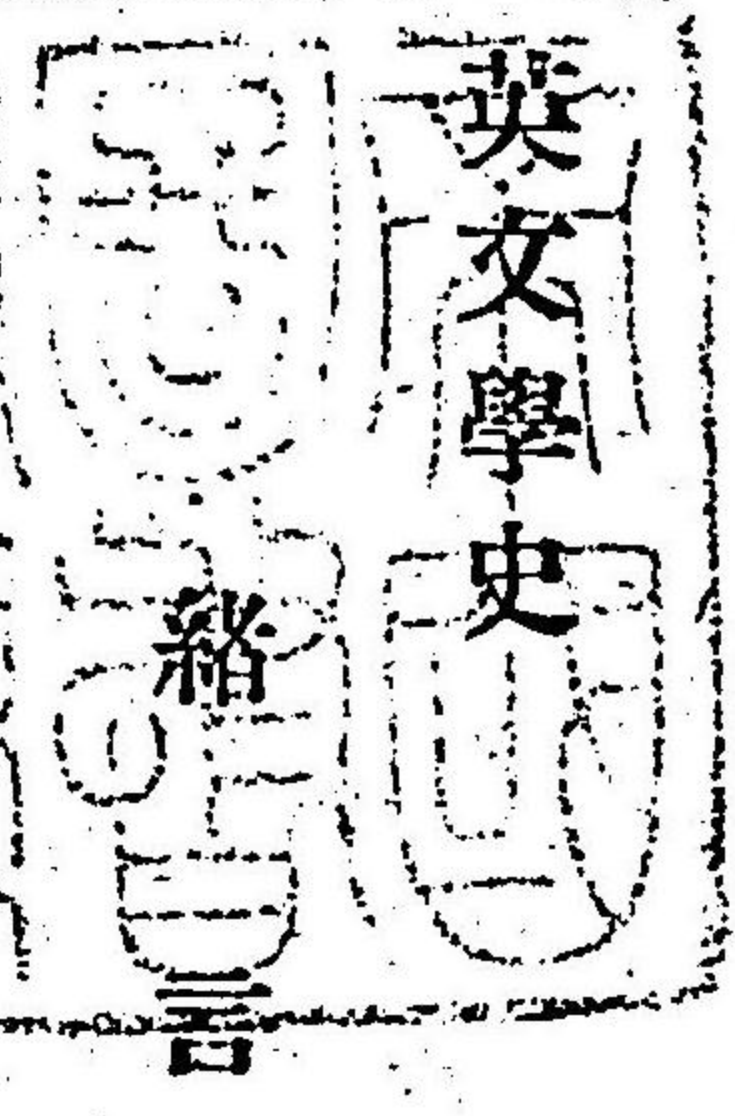
英文學史

東京專門學校出版部蔵版

文學叢書發行の趣意

我校環て歐米に所謂「大學普及事業」の聲に倣ひ或は盛に諸科の講義録を發行し或は講義を各地方に開き以て高等國民教育の擴充を圖ること茲に年あり然るに従來は政治法律經濟外交史學等の著譯を紹介するに忙うして未だ曾て純文學の鼓吹に従事するに及ばざりしが今回漸く幾分の餘力を得たるにより乞うて斯學專門の諸家を起たしめ新に活動の端を發き文壇刻下の沈睡を撥破し兼れて文學の新機運を招致せんと企圖す乃ち其の手段として一面は古きを東洋の古傑作に温れて斬新なる評論註釋に新智開發の道を開くと同時に一面は泰西最新の名著傑篇を翻譯若しくは評論して十九世紀末遺の大思潮を紹介し發露新理想の投影を傳へ以て將に來らんとする人事相の豫測に便ならしめんを期す而して本校の素志は主として世の闕典を補ふにあるがゆゑに所謂東洋の古傑作の如きは既に屢々紹介せられたるもの乃至稍々陳腐に屬せるものを避けて我が未來の文學的活動に關係最も深かるべきものさなくば世間に珍せらるべきたぐひのもののみを選び且つ最も斬新なる方法によりて其の紹介に着手したり但し追々に事業の歩武の進むにつれて餘力の前陳以外に及ぶとあるべきは論を俟たず若し夫れ本叢書の第一篇として刊行する坪内博士講述の『英文學史』は便宜によりて泰西文學紹介の總序に代へたるもの所謂文學叢書の例外たるを了せられよ既に着手せる著譯註釋類は左の如し

果林子撰註	元 錄七部集略集	俳諧七部集略解	有 職 故 實	話 山 評 釋	支 那 史	小 說 史	元 曲 學 偶 史	英 文 學 史	英 文 學 評 釋	英 文 學 評 釋	歐 米 短 篇 集	名 家 短 篇 集	イブセン作社會劇	トルストイ伯著	アレント、カレニナ	フワイタツ著	ソル、ウラド、ハアベン	マロム、ボゾリ	フロム、ボゾリ	ヘーアイ著	テヘーアイ著	ストツダ著	英國小説進化論	ドワデン著	シニウグスピア	ドイツ小説著	オールド、キニオシチー、シヨツ	
嬰庭莖村著	宮崎三味選	尾崎紅葉著	赤堀又次郎著	早稻田國文學會編述	宮崎三味譯	森 桃 南 著	坪内雄藏著	坪内雄藏著	增田藤之助著	島村龍太郎著	高安三郎著	尾崎紅葉瀧沼夏葉譯	登張信一耶譯	上 田 敏 譯	梅 澤 精 一 譯	千葉鐵藏譯	中島茂一譯	内 田 貢 譯										



本書はもと東京専門學校文學科講義録の爲に起稿せしものなるを數改補して再三講義録に掲げ、こたび又修正して此の一卷とはなせるなり。かやうに年を経たるゆゑ、其の間に講者の着眼も移りゆきて、講述の鹽梅前後おのづから一様なる能はず。此のたび一つに纏むるに當りて、及ぶべき限りはかゝる失を除かんとかめたりしも、不調和の痕は所々に残りて、また如何ともしがたし。初學入門の當用ほどには、かくても足りぬべしと思ふものから、或は誤りて識者の眼に觸るゝこともあらんかとして、斷りおく也。

引用参考の書類のうちにて、負ふ所尤も多きは、ブルック、ドーデン、ゴス、セインツベリ、テーヌ等の諸家なり。就中近代に關する分は、主としてセインツベリ氏の『十九世紀英國文學史』に據り、傍ら諸家の見を參酌せり。

凡そ諸家の意見は、之れを援引する毎に、概ね其の姓を掲ぐるを例としたれど、特に標示すべきほどの價值もなく、又去かすべき必要もなしと認めたるは、其のまゝに義譯して本文中に攝取したり、かゝる例近代文學の篇中に多し。

初め講義録の稿を作るに當りて、抄譯又編纂に、杉谷虎藏氏を勞せしと、抄からず、こゝに記して感謝の意を表す。

明治三十四年五月

著者 識

英文學史 目次

第一編 上古期の文學

第一章 英國の原住民及びアングロ、サクソン族……………頁

英文學史と英國原住民—アットン族—アングロ、サクソン族—其の故國及び特質—英國の地理—アングロ、サクソンの宗教觀—『エツダ』の大意—アングロ、サクソン族と英國人

第二章 ノオマン征略以前の文學……………頁

アングロ、サクソンの詩歌—其の律格—『ビオウルフ物語』—古代詩歌の特質—基督教の傳來—アングロ、サクソン族と基督教—ケドモン—『聖書のメトリカル、パラフレーズ』—ケドモン以後—同代の散文—ビード—アルフレッド大王—アーン族の來寇—『サクソン、クロニクル』—アングロ、サクソン語と英吉利語

第三章 ノオマン征略以後の文學……………二六

ノオマン征略と國語及び國文學—外國語の跋扈—國文學再興の端緒—宗言歌—『オレミユラム』—物語歌—『レヤモンス、ブララット』

第四章 新國文學……………三四

エドワード三世の功業—デロン、ウイクリッフ—宗教改革の端緒—新哲約全書の翻譯—國勢の進歩

第五章 デエツフレ、チヨーサー……………三九

經歷—特質—律格—其の傑作—『カンターベリ物語』—バラモン、ア—サイト物語—其の他の梗概

第六章 チヨーサーと同代の詩文人……………五六

デロン、ガウ—ウイリヤム、ラングランド—『ビヤース、ゼ、フローマンス、ドリーム』—デロン、トレンサ—デロン、マンドザル

第七章 チヨーサーの死後一百年……………六〇

模倣時代—詩歌—デロン、リドグート—蘇國詩人—散文—カクストン

欠

MISSING

第十二章 當時の劇壇文學(下)

オレンジ朝派の諸作家—喜劇の流行と進歩—コングリーヴ—其の特質—其の諸作—シッパ—フンアルー—フアイクロー

三五九

第四編 十八世紀の文學

三六五

第一章 概論

三六五

英國十八世紀文學の區域—其の前期—其の後期—英國のオーガス
タス時代—擬古文學時代—當代の諸作家—アラア街の窮才子—社
會の状態—散文文學の興隆—散文詩—小説及び歴史の興隆—劇詩
界

第二章 アダソンとス井フト

三七七

前期の二大文章家—其の異同—アダソン—其の生涯—其の著作—
其の特質—其の文致—ス井フト—其の生涯—其の著作—『桶物語』
—『ガッヴァー巡島記』—其の特質

第三章 前半期の散文家……………三九六

スウィフト、アゼソン以外の作家——ステール——「タトラー」——スベクテ
——「トア」——ステールの功績——シャプツベリ伯——マンドギル——パークレン
——其の他の論作家

第四章 アレクサンダー、ポープ……………四〇六

詩歌の擬古時代——アレクサンダー、ポープ——生涯——著作——「批評論」
——「The Rape of the Lock」——「英譯イリヤド」——「英譯オデュッセー」——「人間
論」——「恐人物語」——ポープの長技

第五章 ポープと同時代の諸詩人……………四二二

ポープと其の前後の詩人との關係——アラックモリア——アラックモリ
ア——フライオア——ゲイ——パルチル——ウインチェルシ伯夫人

第六章 ダンエル、デフォー……………四二六

十八世紀文學の價值——英國小説の濫觴——十八世紀以前の作物語——
小説の興起——其の特徵——「ロビンソン、クルーソー」と上代の小説
類——讀者の傾向——デフォーの傳——其の著作——「ロビンソン、クルーソー

——其の價值

第七章 サミュエル、リチャードソン……………四四〇

リチャードソンの生涯——書信林の小説——著作——「パメラ」——その批評
——「クラリッサ、ハーロー」——その批評——「士爵チャールズ、グラマンソン」
——その批評——總評

第八章 ヘンリ、フィールディング……………四五二

リチャードソンとフィールディング——フィールディングの本領——生涯及び
著作——「パロセフ、アンドロニス」——「サロナサン、ワイルド」——「トム、ゲロン
ス」——「アメリカ」——總評

第九章 スモーレット及びスターン……………四六二

スモーレット——生涯及び著作——「ロテリック、ランドム」——一代記——其の作
の特質——「ナムフレ、グリーンカー」——スモーレットの社會觀——人性研
究——スターン——生涯——爲人——著作の特質——文體

第十章 其の他の小説家……………四七五

小説發達の第一期——四名家の特質——其の他の作家——フィールディング

第十一章 サミュエル・ジョンソン……………四八一

博士ジョンソン—ゴールドスミス—パーチ—瓊—其の他
十八世紀の前半と後半—風尚の平等時代と差別時代—ジョンソンが
一代に覇たりし所以—ジョンソンの傳—其の著作—『英國大辭典』—
『ラセラス物語』—文學會—『詩人傳』—ジョンソンの特質

第十二章 史傳家及び論文家……………四九三

史傳の著者—ヒューム—其の略傳—『大ブリテン史』—『宗教の自然史』
—ロバートソン—其の略傳—其の著述—ギッボン—其の略傳—其
の著述—『羅馬衰亡史』—ホスエル—其の『ジョンソン傳』—論文諸名家
—マーク—其の他—書簡文

第十三章 ヤングよりグレイに至る諸詩人……………五二二

詩風の變移—ヤング—『夜思』—ヤングと同期の第二流詩人—トム
ソン—『四季の歌』—『懶惰城』—コリンズ以下の小詩人—グレイ—
其の諸作—『墓碑吟』

第十四章 グレイ以後の諸作家……………五二五

十八世紀の末葉—詩壇の沈滞—文學上の二大欺騙—チャタートン
のロイヤル詩集—マックファーソンのオッサン翻譯—オッサン然—其の他
の小詩人—ゴールドスミス—其の傳—其の作—劇の作家シニエダ
ン—當代の劇詩界

第十五章 外國文學との關係……………五三七

英國文學と大陸との關係—主客師弟の關係の顛倒—十八世紀の英
國著述の佛國名士に於ける影響—獨逸文學に於ける影響—十八世
紀末葉の風潮—個人と社會との争闘—其の結果

第五編 近代の文學……………五五一

第一章 歐洲近代の革命思潮……………五五一

精神上物質上の變動—英國社會の進歩—佛國の大革命—獨逸の勃
興—思想上の二大潮流—パインズ—其の略傳—其の諸作—文致と
好尚との革新—クーバー—其の特質

第二章 ローマン派

一四

ローマン派の由来—新思想の二大派—史詩派の特質—其の代表者—サウザーの諸作—スコット—其の諸作—韻語—小説—スコットの長短

第三章 哲學派

五七五

哲學詩派の特質—英國の哲學詩人—ウォルヅチオスの傳—其の詩論—其の特質—諸家の批評—『エキスカルシオン』—シェリー—其の閱歷—其の特質—其の革新思想—其の諸作—十九世紀の二大勢力

第四章 バイロン

五九四

バイロンの略傳—其の名編『チャイルドハロルド』—其の他の諸作—其の爲人—其の末路—主觀詩人の標本—シェリーとの比較—バイロンの感化影響

第五章 其の他の詩人

六〇六

變遷期の四作家—アレック—クラップ—コールリッジ—其の略傳—其の諸作—キーツ—其の價值—カムベル—モーア—ハント—ロー

第六章 新代小説家

六一七

バルテール女史の晩作—恐怖物語の流行—リュンギスとマチューリン—其の傑作『メルモス』—オースチン女史とエッヂチオス女史—エッヂチオスが諸作—オースチンが諸作—オースチンが位置—歴史小説—スコット—其の他の歴史小説家

第七章 ザッケンズ及びザッカレ

六三三

ザッケンズ—其の略傳—其の諸作—其の價值及び特質—ザッカレ—其の略傳—其の諸作—其の特質と價值

第八章 其の他の小説家

六四三

マリヤット—レゾー—ダズレーリ—ビーコック—ボオロー—マーチ—ノー女史—ミッドフォード女史—其の他

第九章 定期出版物の發達

六五〇

十八世紀の新聞紙、雜誌—十九世紀の諸雜誌—『マサット』、『ウィークリ、レヴュー』、『ゲニフ』、『エザンズ』、『ラング』、『シドニス』、『ミュー』

「クォールタリー、レポニー」の諸記者—其の他の雑誌—ラム—ハズリ
ト—ウィルソン—ロックハート—デクイン—ハント—エール
リッパ—マジン—スターリング—フィッセル

第十章 歴史家……………六八三

史家と詩人—十九世紀の史家—ハラム—ロスコー—ミトフォード—
ターナー—リンガード—ルクレヴァ—マクリ—アーノルド—
其の他の諸家

第十一章 マユトレ……………六九三

マユトレ—其の傳—其の著述—其の特質—韻語家として—論文
家として—歴史家として—彼れが史筆の特質—マユトレの人格
第十二章 カーライル……………七〇五

其の血統—其の傳—其の諸著—カーライルの品性と功業—文學者
—歴史家—其の特質—其の人生觀—宗教觀—諸家の批評

第十三章 カーライル以後の歴史家……………七一九

キングレーキ及び其の同時の諸史家—フォスター—バックル—フリー

の諸詩人—スバスマヤック派(際物派)—クラップ—ロウカー—リットン—
モオリス—スピンバイン

第十七章 最近小説家……………七九三

時勢と小説—チャーロット、アロンテ女史—其の姉妹—カルレル、ベル
—其の傑作「ジーン、エニス」—チャールス、キングスレー—其の小説及
び其の韻語—アントニオ、トロロープ—チャールス、リード—ヘンリ、キン
スレー—スチブンソン

第十八章 最近評論壇……………八一九

雑誌世界—「ハウスホルド、ウオオズ」—主筆「サッケンズ—ワイルキー、
コリンズ—「サターデー、レポニー」—「コナン、ロル、マガジン」—「イクリ
ラン、マガジン」—「サッカレー及びアーノルド—キングスレー兄弟—
雑誌と評論—「フォオトナイト」—「コンテムポラリー」—「十九世紀」—
評論家—文章家—「バット」—アーノルド—ラスキン

第十九章 哲學壇及び神學壇……………八三九

哲學界の文士—「ゲレンシ、メンサム—ステュアルド、ミル—ミルの諸著

ミルの特質—ウィルヤム、ハミルトン—ヘンリ、マンセル—ホエートリセ
 ホイウエル—法理學經濟學界の文士—オースチン—メーソン—スチー
 ヴン—神學界の文士—ピウジ—キープル—ニニーマン—其の略歴
 —其の諸著—所謂オックスフォード派の運動—文章家としてのニユー
 マン—オックスフォード派の諸文士—其の反對派の文士

第二十章 科學壇の文才……………八六四

古典學乃至古語學界の文士—アライヤント—ウェークフィールド—
 —ホルソン—コニングトン—マンロー—セラ—スミス—理化學
 界の文士—アキ—フエアファックス—ダーキン—チャムマス—ヒュ
 ー、ミルラー—ハツクスレト

第二十一章 脚本……………八七五

十八世紀以前の脚本—十九世紀の脚本—其の相違—インチホールド
 女史の作—ナン、オキーフの作—ペーリー—女史—技巧懸劇—傳奇劇
 復興運動—學者劇—シエダ、ノールズの諸作—リットンの諸作—架
 閣外の作劇家

第二十二章 總收……………八八二

十九世紀文學の價值—詩歌變遷の五期—自然主義—ロマン派—
 詩人の輩出—テニソン—アラウニング—模倣と創作—ブラッフェ
 ル派の運動—詩歌の全盛期—小説界の變遷—文學と生活—定期出
 版物の發達—匿名の流行—歴史文學—劇文學—神學—科學—美學
 家—其の他—未來の概観

英文學史目次終

英
文
學
史

坪内雄藏著

第一篇 古期の文學

第一章 英國の原住民及びアングロ、サクソン族

英文學史と英國原住民—アリドン族—アングロ、サクソン族—其の故國及び特質—英國の地理—アングロ、サクソンの宗教觀—
『エッダ』の大意—アングロ、サクソン族と英國人

一國民の動靜を傳録するもの、之れを國史といふ。動靜に内界的と外界的との別あり。外界に現れたる一國民が動靜、即ち客觀の事變、行爲を傳録するものは、假に之れを客觀史と名づくべし、政治史、實業史などは其の例なり。別に、内界の動靜、即ち一國民が思想、感情、想像、好尚、信仰及び理想等の進化、變遷を叙するものあり、之れを假に主觀史と稱すべし、文學史、哲學史の如きは是れなり。

一個人を知らんとすれば、其の所爲を視、其の所由を觀、其の所安を察せざるべから

ざるが如く、一國民を詳悉せんとすれば、先づ其の所爲の史(客觀史)を精讀し、次に其の所由と所安との史、即ち主觀史に通せざるべからず。就中國文學史は、譬へば、一國民が肺肝の活動を、さながら温きまゝに、露呈せるが如きものにて、客觀史上の種々事變の眞因縁、種々行爲の眞動機は、特に國文學史上にのみ見いださるべきなり。之れを文學史の人間研究の一要件として、重視せらるべき所以なりとす。文學史を上にいへる如き意義に解釋すれば、英國の原住民と英國の文學史との間には殆ど些の關係も無し、英國の原住民は何等の文學をも後の英國國民に遺さざりしが故なり。今の英語、英文及び今の英國人の感想は、殆ど聊かも原住民の言語、感想に負ふ所なし。左に少しく英國上古の史を語りて、此の理を明かにせん。今をさること一千四百餘年前には、今日英國と通稱せる島をブリテン島と稱し、其の住民を**ブリトン族**と呼べりき。ブリトン族は、最も早く亞細亞より歐洲に西漸せしケルト蠻族の一派にして、ゴール、キムフリ等と其の血脈を同うせり。この種族が英國に移住せし年代は詳かならず。只若干の傳説あるによりて、僅に當時の狀況の一斑を髣髴するに足るのみ。彼のリーヤ王の傳説の如きは、其の最も顯

著なるもの一なり。

ブリテン島が南歐の文化に接觸せしは、紀元前五十五年以後の事とす。羅馬の將デリュアス、シーザー、北の方ゴール(今の佛國)を征せし後、兵を率ゐて渡來し、ブリトンを克服すること前後二回に及べり。是れ、英國が羅馬に隸屬せし發端なり。其の後、まばく、背叛せしが、紀元後一世紀の頃に至りて、今の英倫土(イギリス)の地方は、全く羅馬國の版圖となりぬ。爾後、羅馬政府は、此の地に戍兵を置き、内は歸順せる土民を治め、外はウェールズ地方の蠻民、及び北方スコットランドに住めりしピクト族、スコット族の侵掠に備へたりき。此の間四五百年(我が朝、崇神帝より允恭帝に至る年代)羅馬政府は、力めて自國の言語、宗教、法制等を島内に布き、或は道路を修め、或は寺院、學校を建設し、ひたすら力を教化に用ひたり。かくて第五世紀に至り、歸順せるブリトン族、漸く南歐の文化に浴し、殊に宗教の如きは、次第に羅馬のを信するに至り、北方スコットランドの蕃民、さへも其の化に浴せんとせたりし頃、羅馬本國は、ゴッス蠻族の來寇によりて、大に亂れ、國家殆んど危きに及びしかば、此の地に在りし羅馬兵等は、其の急を救はん爲め、急ぎ本國に引返しき。ピクト、スコット等、これらを機として、

りに劫掠を恣にする。島民大に苦めり。ブリトン族が困苦の景況は當時の俗謡によりて想見するに足る。曰はく「蠻人我れを海に逐ふ。海に逃るれば、風濤更に我れを逐ひてまたも蠻手におもむかしむ」と。

其の頃今の日耳曼と丁抹との國界なるシユレスキング、ホルスタイン地方にアングル族といふ強蠻あり、其の同族なるサクソン族と共に海賊を業となして常に北海に横行せりき。始め、ブリトン族のピクト、スコットに苦められしや、後患を慮るに迫なく、援を此れら蠻族に乞へり。彼れ之れを奇貨として陸續渡來し、先づピクト、スコットを撃退し、やがて更にブリトン人と戦端を開き、闘争二百年の後、竟に全國を克服し、殆ど原住民と其の文化とを全滅し了りぬ。所謂サクソンの七王國の樹立するに至りしは此の時なり。かくて紀元後八百二十七年には、エグバートといふ英主出で、此の七王國を一統し、始めて英吉利王國の基を開きたり。これより先き、アングル族の名に因みて、此の國をアングラランド(アングル人の邦土といふ義)と呼びたりしが、やがて轉訛して英蘭土と稱するに至りたり。ブリトン族の生存せりしものは、殆ど悉く國外に離散し、婦女若干のみは克服者の婢妾となりて殘

りぬ。勢ひかくの如くなりしかば、政治上に於ても、國語上に於ても、ブリトンは全く跡を絶ち、僅かにその片影を今のウェールズ地方に留めたるのみ。彼等の後の英國人に於ける關係は、ほゞ我がアイヌ、コロボックル等の大和民族に於けるが如し。眞の英國史は政治上よりいふも、文學上よりいふも、アングロ、サクソン移住以後にはしまるなり。

アングロ、サクソンの故國は彼の風濤險惡なる北海に枕みたる、林深く、沼多き濕地なり。空曇り、霧深く、雨雪時を定めずして降れるがゆゑ、其の地の住民は多く室内に整伏するの必要を感ず、若しくは、平素整伏せる反動の爲に、たま／＼天晴るゝや、野に、山に、河に、海に、縦横に奔馳して、荒やしき遊獵をなすを好む。アングロ、サクソンは、其の境遇の結果として、自然を友とする能はざりしがゆゑに、之れを敵としてよく戦ひ、早くより勁敵たる海を克服し、海を家となし、海を活動場となし、竟には海賊を其の業となすに至りき。

彼等は争闘と掠奪と冒險とを以て男兒の事となし、天少しく霽るれば、劍斧を双帆船に積み、近海を潜行し、若しくは遠方の地上陸して、強奪殺傷を縦にし、捕虜を

斬りて祖神を祭り、火を四隣に放ちて歸る、是れ彼等が常習なりき。凛烈たる寒氣と此の激烈なる職業とは、彼等をして強き飲料と多量の食物とを要せしめ、且つ其の娛樂を耳目に取らで口舌に取るに至らしめき。牛飲馬食は、其が尤も嗜む所に於て、沈鬱と嚴格とは、其が外貌の通具性なりき。彼等は筋骨逞しく、忍耐強く、最も冒險の勇に富みて、卑怯懦弱を卑めり。其の弊をいへば、殘忍苛酷なりしと也、其の美德をいへば、嚴格にして勇敢なりしと、特行獨立の氣象に富めりしと、義務を重する念の厚かりしと也。蓋し、彼等は戸内に黙居する日多かりし故に、肉體の美よりも精神の美を重するの念、即ち、君に忠、夫に貞、朋友に信、親に孝、などいふ義務の念割合に早く發達したりしなり。殊に、其の婦女輩の貞烈なりしは、間々彼のスバルタの婦女をも凌ぎきといふ。

此の人種が移り住みしブリテンの島は、其の地勢も、其の氣候も、頗る本國のに類したれば、彼等が生活の習慣は、敢て改むるの必要もなく、隨つて其の固有の性癖は依然として移住後まで繼續せりしが、流石に新國土の地勢、氣候の、幾分か温和なりし爲めの故にや、其の惡徳は、年と共に、幾分か其の甚しきを減じ、文化のやゝ進むにつ

れて、其の美德はやゝ發達せり。殘忍殺伐なる本具性は容易に減するに至らざりきと雖も、其の粗暴なる習癖は、次第に善化し、同時に虛文に泥まずして實行を重んずるの性を養成し、其の殘害を悦ぶ心も、往々にして勇敢の徳を生み、義烈廉恥の眞風を長じぬ。彼等は常に浮きたる情交を卑みし故に、サクソンの上代には、所謂戀の歌殆ど無し。

かゝる人種なれば、**宗教思想**の如きも、尋常の蕃族と同じからず。上代にこそ若干の軍神などもありしが、本來有形物に重きを置かざる性なれば、強ひて神像を作ることをなさず、以爲へらく、命運を主る無形の神靈は、肉眼には入らざるも、暗に義人の魂に感應すと。彼等は義勇任俠などの行の神明を感ぜしむべきを信じ、之れを以て其の行爲の理想とせりき。要するに、肉體上の快樂は、彼等が究竟目的となさざりし所、彼等は義を磐石に比し、命を鴻毛に喩へ、人生を戦闘と解し、人間最上の美德は身を殺して仁を成すにありと信じたり。所謂北蠻族の創世紀『エッダ』及びサクソン族が最古の韻語『ヒョウルフ物語』の如きは、最もよく此の情想を代表せるものなり。こゝに『エッダ』の**大旨**を抄録して、其の特殊の想を示さん。『ヒョ

天地のはじめ氷寒、熱の二界あり。その時不可思議と呼ぶ一靈、颯風を起して氷寒界よりあまたの雪片を飛ばしけるに、この雪片化して巨大の怪物となりぬ、名づけてイミルといふ。イミルの時未だ天地なく、混沌として晝夜の別を知らず。既にして氷寒界の融雪又一巨牛を生じぬ、これをアンドラムラといふ。乳河を以てイミルを養ひ、さて巖石を砕めけるに、巖石の中に巨人あり、三日にして其の全形を現はしぬ。これ神人なり、ブルといふ。ブルの孫、オーテン、其の二弟、ギイル、ギンと共に、巨魔イミルを殺し、これを無底の空際にて投下、以て天地を定む。イミルの肉は平野となり、其の骨は山嶽となり、毛髪は森林となり、齒牙は岩石となり、血液は大海となり、頭蓋は穹窿となりぬ。穹窿の四極大地に接する處、四個の矮魔、これを支ふ。さて、イミルの頭蓋は溶散して雲となり、中有に彷徨して永く怨憤の色を帯ぶ。萬里の北極に幽界あり、妖鳥これを主る。怒りて飛べば颯風、坤輿を震ひ、大海の鯨波砕けて煙さなる。神人乃ち南方熱界の火片を招き、祝して世界の光となしぬ、日月是れなり。かくて乾坤定まりける時、神人の二子、海邊を巡行しけるに、とある清に二本の樹あり、一は遅しく、一は優美なり。二子すなはち之れを以て男女を造り、名づけてアスグ、エムアラといふ。オーテン之れに精神を興へ、神人これに心智と血液と體色とを興ふ。是れ人祖なり。而して巨魔イミルの體中より出でたる無數の矮鬼は、皆神人の命を俟ちて人間に化すべきものにして、今や遠近の山間に棲り、人聲に答ふる谷間のこだまはこの矮鬼なり、云々。

かくて三才始めて定まりけるが、彼のイミルの遺孽にフロストといふものあり、山海の惡靈と旋風とをかつらひてオーテンに仇す。是に於て天地共に戦亂の巻さなる。ポールドル(仁和の神なり)、トル(雷神なり、氣界を掃蕩して萬物を生育す)及び人間は神人を助け、オートンス、海狼、毒蛇、妖靈等の靈は、魔軍を助け、激戦百回にして決せず。神人時に敗るゝときは、魔靈天日を封じ、風は叫び、樹は鳴り、河海の水は逆流し、幽界の眷屬は氷洋を渡りて南漸す。是の時に方り、人間は神人の爲めに此の惡靈の衝に當らざるべからざるもの、乃ち死地に突進して百折不撓の勇を現し、奮戦奮闘、滿身に血を塗りて介るれば、則ちオーテンの朝に迎へらる。かくて、死後オーテンの朝に列すれば、更らに神通力と不朽の生命とを賦與せられて、再び惡靈と戦ふ。是れ人間の天職にして人間最大の名譽なり。若し夫れ敵者を怒れて逃避するの怯者は、忽ち彼の妖鳥の嘴に啄まれて永く幽界に呻吟せざるべからず。而して神人と魔界との戦は永切を期して終るべきもの、其の最後の勝敗は人間の努力に俟つこと大なり、云々。

按ふに、此の如き慘酷激越の世界觀と人生觀とは、彼の幽玄跌宕を以て誇る印度、若しくは波斯の古鬼神譚以外に於ては到底見る能はざる所なり。和風麗日の希臘乃至古羅馬の人生觀と何等の相違ぞ。而してこは正に今の英國民の遠祖が抱きし思想情念にして、彼等はこれを根柢の情念、思想として、進化し、發達し、竟にスペイン、サーを出だし、マローロ、シークス、ピヤを出だし、ミルトンを出だし、バイロン、カーラ

イルを出だしなり。

アングロ族とサクソン族とは、もと分れたる種族なれども、中ごろ合稱してアングロ、サクソンといひ、其の國語をもアングロ、サクソン語と呼べり。是れ實に今の英語の根源也。後年種々の外國語入り來りて之れと混淆したるゆゑ、純粹のアングロ、サクソン語の後の英語と異なるは、我が今日の俗言の、奈良朝時代の俗言に異なるが如く、字形も、語格も、同じからねど、アングロ、サクソンの語脈はなほ依然として保存し、今日に至りても渝はるとなし。但し、外圍境遇及び時勢が、甚からず人種の性格に影響したれば、外部の變遷は頗る著きものあり、殊にノオマン征服前の英國民と今日の英國民とを對照すれば、全く別人種の觀あれども、尙仔細に檢すれば、今の英人の性格中にも古代アングロ、サクソンが性脈は隱然たり。文學に現れたる所も亦同様なり。今日の英文學も、其の外形こそは異なりたれ、其の精髓に至りては古代のアングロ、サクソン文學の精神と相呼應する所甚からずとす。純粹のアングロ、サクソン語の詩文をアングロ、サクソン文學とも、ノオマン征服前の文學とも稱す。此の間約六百五十年、我が朝にては允恭天皇御宇の末よ

り冷泉天皇の御宇の末頼義在世に至り、『記』『紀』『萬葉』『古今』『源語』等の文學を出だし、年代に當る。先づ當時の詩文につきて、其の如何ばかり後世の詩文と異なるかを略説すべし。

第二章 ノオマン 征略以前の文學

アングロサクソンの詩歌——其の律格——『ビオウナルフ物語』——古代詩歌の特質——基督教の傳來——アングロ、サクソン族と基督教——ケドモン——『聖書』のメトリカル、パラフレーズ——ケドモン以後——同じく散文——ビード——アルフレッド大王——アーン族の來寇——サクソン、クロニクル——アングロサクソン語と英吉利語

アングロ、サクソンの詩歌は、希臘羅馬の詩歌の如く、音の長短によりて調を整へたるものにあらず、また近代の詩歌の如く、脚韻の法によりて律格を定めたるものにもあらず。其の詩形に普通せる特質の主なるものは、一定の規律によりて語の頭に韻を置くとなり、之れを頭韻と呼びぬ、即ち、毎句を二分して、其の前半(上の句)の主なる語二箇の頭文字を同一にし、且つ其の後半(下の句)の最初の強音(昂音)の頭字をも同じ文字とする法なり。尙、此の外に一種の句拍子の法とも思はるゝは、

昂音二度と低音二度とを句毎に設けて、聲調に抑揚あるとなり。而して件の律格（句拍子の法）に二種あり、一は長く、一は短し、其の長き者は物語歌に用ひ、其の短きは稍々氣高く尊げに見えんと作者が期望せる場合に用ひたり、たゞし、大概は二者を混用せること多し。其の頃の寫本を見るに、當時の詩歌は、行を分かつたで散文のやうに書流したるが例なれども、概して句讀點を施して句の別目を明にせり。

ストッフホード、ブルック氏曰はく「今の詩歌は一定の格によりて音の數を限り、且つ句脚に韻を踏むを通例とすれども、サクソンの古詩歌は然らず、其の詩歌たる所以は主に音の昂低と頭韻とを用ふるにあり。總じて、長き句は句讀によりて二分し、上句、下句、おの／＼昂音二個を具ふ。低音の數には定限無し、而して上の句と下の句とを維ぐに頭韻の法を以てす。上の句の昂音二個と下の句の昂音一個とは概して母音（概して異母音）を以てはじまるか、否らざれば、同じ子音を以てはじまるを例とせり。例へば、左の如し。（ケドモンが夢想せし詩章の一句、括弧の中なるは其の譯）。

Heofon to hrofo, (Heaven for roof.)
Hilig Seipend. (Holy Creator.)

然れども、時として、上の句に頭韻僅に一個のみなることもあり、又時として、四個以上の昂音あることもあり、但し、いと長き句にても五個以上には及ばず。さてまた、莊嚴若しくは激越の情感を表せんが爲には別に一種の律格を用ふ、かかる場合には昂音の

數を増加し、且つ一定の規律によりて其の間に低音を挿入せり。又稀には脚韻をも用ひたる例あり。案するに、當時の律格は一二にのみ止まらざりしなり、只常に四昂音三頭韻の法を以て根本の定格となせるのみと。

之れを要するに、當時の詩歌には後世の詩歌に於けるが如き嚴密なる律格はなかりしなり、こゝに原作を掲げて之れを證明せんも煩しければ省きつ。さて、當時の詩歌には古風なる語と語格との多かるべきはいふまでも無きとながら、問々用ひられたる、隱喻も、熟語も、異やうなり、譬へば、矢の^{フア、フア}とを戦^{フア、フア}と、海^{ホエー、ハツス}の^{ホエー、ハツス}とを鯨路といひ、國王の^{アンカイン、フイ、レンド}とを人間の金^{フイ、レンド}とを友といへるなど、是れなり。其の他、古詩歌にありがちな聯句並びに同じことを語を換へて繰返していふことなど、屢々あり、「萬葉」の例又はヒブリウの古歌などの例に同じ。然れども詞句は皆簡潔にして素樸なり、蓋し、形よりも意を重んじ、風姿よりも風情を主とせるなり、當時は何事もいと簡短なる言葉をもて言はれたり。總じて、直喻はいと稀にして、隱喻風に打いでたるも少し、ざるは英國人の特性の然らしめし所なるべし。

此の古代の詩形、律格は、ノオマン族來襲して此の國を略せし後、おひ／＼に廢れたり。ノオマン人は佛蘭西人なれば、人と共に佛蘭西風の韻法、律格の此の國に渡來

せしが故なり。後に叙説するチャーサーの作の如きは、此等新原素の和熟せる形によりて作られたるものなり。但し、無脚韻の頭韻法も、チャン王の朝(土御門帝の御宇頼家の頃まで)遺存し、加之、エドワード三世及びリチャード二世の頃に再興せられ、十六世紀(元龜、天正)までは兩様の韻法併用せられたりきといふ。近代の詩歌にも頭韻法間々利用せられたれど、そは古代のとは頗る趣を異にしたるものなり。今尙は傳はれる最も古き詩歌の一枚、『ビオウルフ』と題したる物語、歌なり。こは三百八十三行より成れる長篇にして、或は一人の作といひ、或は數代に亘りて成りしものともいふ。上下二篇に分れたり。其の大要左の如し。

ビオウルフは彼の北野の神人オーテンの血統をひきたる皇族にして、日耳曼地方の未だ封建の形をなまじりし頃の英雄なり。其の頃アーン國にグレンデルといふ怪物あり、あやしき湖澤の中に棲み、夜毎に王宮に來りて眠れる武士をさり食らふ。こは十二年に及べり。これが爲に此の國の勇士大方盡き果てなん有様なりと聞きて、ビオウルフはアーン王(Haethgar)とは同族の縁もありければ、赴き救はんとして、十五人の同志と共に劍を提げて北海に乗り出でけるに、時しも酷寒の極月にして風浪こまに甚しく船はみるく、浪に卷かれて覆り、水中の妖怪變化は、群り來りてビオウルフを海底に引き入れ、帆網をもて固くこれを縛めけり。然れどもビオウルフは勇を奮ひて縛を断ち、水底の陰

鬼を闘うて九個までもうち誅し、遂に圍みを破りてアーン國に到着す。かくてビオウルフは王に面會して直ちに妖怪退治の命を受け死を決して單身にして宿所の中にうち眠りぬ。さる程に、いつもの時刻となりて、彼の沼澤の方角より朦々たる狹霧一面に被ひ來りて稀代の變化グレンデル暗中より宮門を蹴破りて押し入る。見るまに、一人の衛士を捕へて寸々に食ひ裂き、血を吸り、やがて其の手もてビオウルフの肩をつかみぬ。ビオウルフ少しもおそれず變化を提へて蹴倒す。グレンデル大にたけりて躍りかゝる、此の奮闘王宮を揺かし、しばしは勝敗なかりしが、妖怪竟に敵し得ず、腕と臂とを折られて湖澤の窟へいげゆく。この窟にはグレンデルが母なる怪物あり、次の夜王宮を襲うて王の近親をさり食らふ。ビオウルフ再びこれを退治せんとして、翌日窟に探り入る。こゝは沼底の洞穴にして、水流これに穿入するが故に、暗澹たる泥波一面に氾濫して毒氣當るべからず、夜に入れば濁浪の上に妖光あり、惡龍、蟒蛇のこの中に勞午たるを見る。ビオウルフは四人の従者と共に此の窟窟に突きて入り、老女怪を襲ひ、苦闘の後竟にこれを斃し、グレンデルをも併せ屠りて首を王宮に携へ歸る。

これを第一巻となす。第二巻もまたは、同様の冒險譚なり。

かくてビオウルフはこの國の王となりて政を執ること五十年に及びしが、こゝに北方の山中に不思議の火龍あり。性貪婪にして飽くこまを知らず、時々良民を襲ひ、金銀珠玉を奪ひ歸りてこれを洞穴に貯ふ。然るにビオウルフの近臣某、火龍の不在に乗じて其の金蓋を奪ひ歸りしかば、火龍大に怒りて王の城下を襲ひ、人を焼き、人家を焼く、其の

弱測るべからず。ビオウルフ乃ち七十歳の老齢ながら之れを退治せんを欲し鋼鐵の船を作らしめ一隊の兵を率ゐて荒野を巡狩す。然るに火龍は深く草中に埋伏し突然現はれて王を襲ひ、王主従を焼く。従卒皆王をすて、のがれ、王は重傷を負ひて危かりしが、其の臣にウイグラーフ Wiglaf をいふ者一人ふみ止まりて王に力を添へ、焔々たる火氣を毒煙を嘗して遂に火龍を切斷す。されどもビオウルフの火傷は遂に癒えず、毒煙心を焼きて悪血湧くが如し。扶けられて石上に臥しながら、自ら萬人に代りて斯の如き死を遂ぐるは本懐なりと述べ、我れはこれより古英雄の後を追ふてオーデンの朝廷列すべし。汝 *Wiglaf* 我が志を嗣ぎて生民に媽せ。」と遺言して瞑目す、云々。

按ふに、この物語歌はサクソン族が英島を攻畧せし以前、即ち第五世紀の間に成りしものならんか。或は第八世紀ごろの作ともいふ。其の筆に錄せられて讀みものとなりしは彼等が英島に移りて後のことならめど、瑞典、丁馬などにては尙かに其の前よりも唱傳せられたりきといふ。或は編中に謂ふグレンデルの窟は今の英國のヨオクシヤの海岸なりとなすものあり、いかにや。

『ビオウルフ』の作者は詳ならず。ブルック氏は、其の叙事の文辭の一致せること、結構の首尾照應して完結せることなどより推測して、必ずや一人の作ならんと斷じたり。要するに、件の歌の價值はサクソン族が太古の習俗を瞥見するに足るところ

にあり、例へば我が『古事記』の我が神代の風俗を窺ふの料となるが如し。叙事のうち、詩的思想も乏しからず。就中、グレンデルが巢窟を叙せる筆は精妙の名あり、又其の結末、ビオウルフが最期の一節の如きは、サクソン思想の醇乎たるもの見えて悲涼なり。總じて、其の辭意の卒直と撲茂と明晰とは頗るホーマルにも似たりといふべし。もとより詩歌として『イリヤッド』の雄大渾成なるには及ばざれど、當年のアングロサクソン族が、林間篝火の周邊に強烈なる酒を啜めて、一日の武功を語りあへりし時、蠻樂の聲と相俟ちて此の物語を聽きたらん感慨は、平家琵琶に數行の涙を催し、我が戰國時代の勇士のに過ぐるものありしならん。

『ビオウルフ物語』の他に『フインズバグの合戦』と題せる物語歌あり。丁抹人^{フィン}が其の敵に圍まれて奮闘血戦せし時の物語を歌へるものなり。

總じてサクソンの古詩歌には尙武の氣むしる慘愴たる殺伐の意氣みちりたり。羅馬人嘗て彼等を評して海狼といひけるが、彼等の詩歌を讀めば、げに海狼の氣稟の躍々たるを見る。さるは其の本來の業が攻掠戰鬥にありし故なり。後年、基督敎の此の國に入るに及びて、サクソン族の性習の上に多少の變化を生じ、甚しき殘

忍刻薄の氣風は減じたりしが、凛々たる尙武の精神は尙聊かも衰へざりき。例へば、當代の名家ケドモン若しくはキチウルフの作を見るに、其の主題としたる事柄の基督教の主旨に基けるにも係らず、尙武勇猛の氣脈歴々たり。

アングロサクソン族は、英島に入りて百五十年間、全く文字を用ひざりき。長篇の物語とても、例の暗誦して後代に傳へしものにて、『ビオウルフ物語』の如きも紀元九百年代に至りて始めて筆録せられたり、文字を以てアングロサクソン文學のものせられしは基督教と共に羅馬字の渡來せし後にあり。こゝに少しく**基督教**の傳來に就いて述べんに、

アングロサクソン民族の始めて基督教に接せしは第七世紀の始めにして羅馬法王の使節の渡來せし時にあり。而してアングロサクソン族は久しからずして其の固有の宗教を棄て、基督教に歸依したり。これを基督教の諸史に見るに、傳教のかばかり容易にして迅速なりしは多く其の比を見ず。按ずるに、アングロサクソン人は、夙に無形の神靈に對して敬虔の念を傾けたりし種族にして、其の宗教上の感想は頗る猶太人に類せる所あり、是れ其の容易く基督教の主旨を會得するを

得し所以ならんか。加ふるに、當時はアングロサクソンの社會組織の漸く成らんとせる時代にして、もはや人生を舊時の如く戰闘視する能はざるの事情もあり、隨うて、未來の靜安を傳ふるを主とする基督教の福音は、恰も渴者に於ける水の如くに、時の民心に應合せしや疑ふべからず。由來、彼等が信仰の動機は、單に未來の快樂のみを目的とする彼の南歐民族の信仰とは同じからずして、むしろ信仰に賴り絶りて現世目前の火宅を逃れ出でんとせし趣あり。されば彼等の基督教に接せしや、雲漢々たる修羅の巷より天日昭々たる淨樂土を望むの感ありしならん。彼等は昭々たる天日に對して只管に崇敬嘆美し、羅馬教の甚しく繁縟なる教儀をすらも尊奉し、朴訥なる歌調をもて専念、基督教の徳を稱しき。彼等が讚美歌は、到底南歐諸國の讚美歌の如く典麗なるを得ず、而も宣教僅かに二三十年にしてダンテ、ミルトン等のごとく同様なる大題目を歌へる詩人出でしは、豈酷だ驚くべきにあらずや。以下、當時の詩人ケドモンに因りて當時の詩歌を略説せん。

傳によれば、ケドモンは紀元六百年代(本朝藤原鎌足と同代)の人なり、始めは在家の僧なりしが、一夜夢に神人にあうて、眠りながら天帝及び世界の開闢に關する詩

題を感得し、加之夢の中に其の緒數句を作りて歌ひき。醒めて後も明に其の句を記憶したりければ、深く感じ、人の勸にまがひて出家し、夢中感得の歌を完成しき、是れ有名なる『聖書の律語解』即ち『舊約全書』と『新約全書』とを材料にして長篇の物語歌となせるものなり。

有名なる夢想の句は左の如し

「いでや、吾れ天國の主造化の御力に、其の御心さ、光榮ある父の御いさを讀せん。さこしへに命ある御神が此の驚嘆にたへたる世界を創めたまひし狀はいかに。あやに畏き造化の御神は人の子等の屋根にきて先づ芥天を造りたまひ、さこしへに命ある神、上しなき大君はやがてまた人の子の爲めに大地を定め給ひき。」

ケドモンは『舊約書の』『創世記』より、天地の開闢と人類の創造の事とを取り來りてこれを歌ひ、さて、イズラエル人の事蹟、聖靈出現の事、使徒の教誡の語、最終審判の事、地獄の苛責、天國の幸福と、つゞ／＼に且つ叙し、且つ詠じて、其の長篇を畢へたり。辭章はすこぶる雄勁にして情思率直、想像富麗、兎も角も、古代文學の珍什たり。さればデスレリはケドモンをたゞへて「我が祖先代のミルトン」といへり。或は謂ふ、ジョン・ミルトンが『失樂園』の詩は此の『律語解』に負ふ所ありきと、さばれそはたゞ臆測の

説たるのみ。この書騰寫のまゝにて大に一世にもてはやされしが、始めて印刷に附せられしは、それよりも一千年の後なり。(英國にて書籍印刷の始は)

ケドモン以後となりては、基督教いよ／＼廣く行はるゝやうになりしかば、宗教の旨を歌ふもの大に増加し、前に擧げたるキチウルフ(一千八百八年歿)の如きも此の種の詩歌に盛名あり。但し、その頃に至りても、軍歌、俗歌はた相并びて行はれたりき。

現にアルフレッド大王の御宇には、『マルドンの歌』(作者不詳)をはじめとして二三の長篇の軍歌あり、其の以前にも尙わまたありしならんが、其の頃はすべて口傳へに歌ひ傳へしのみなれば、後世には傳はらざりしなり。學問の十分に開けざる世のならひとて、筆把りて物かき得る者は寺院の僧侶ばかりなるに、僧侶は其の職柄よりいふも、軍歌を好まざるは勿論のことなるべし。

古代英文の最も古きものを求むれば、エドモンド・バークが英國の學問の祖と稱したるビードの著作を推さざるべからず、固よりビード以前にも幾多の散文のありしことは明なれど、尙も文章と稱するに足るべきものはビードの作れるを嚆矢とすべし。

ビードは又ビードとも稱す、紀元後六百七十三年ダルフハムといふ處に生まれ、七歳にてセント、ビーターの聖院に入り、十歳の時、セント、ポールの聖院に移り、身を終るまで勤行怠ることなく、博識の高僧として一世に知られたりき。六百七十三年は恰も我が天武帝御即位の年に當たれり。ビードの著作、およそ四十五部、當時行はれたりし諸學藝、音樂、修辭、醫學、數學、星學、物理學等は、一として其の材料となりざりしものなし。ビードは、其のはじめ、専ら羅甸文をもて著作したりしが、晩年デーン尊者が**經典**(約翰傳)を翻譯するに及びて、始めて此の國の國文をもてものしき。最古の英文をいふものは、皆此の翻譯文を英國々文の基礎となす。文章、簡明素朴にして温藉の情思に富む。羅甸文にてものしたる彼れが傑作は『**英國民之宗教史**』なり。同七百三十五年にみまかりき(我が舍人親王と同年)。

ビードがみまかりし頃には、其の生國なるノオサムブリヤ州は、西歐文學の本地となりて、羅甸文をよくするもの輩出せりき。加ふるに、該地には寺院毎に養舎の設ありて、文庫なごも處々にありき。ビードの門に遊びて學問を修めし彼のデアロー學林の學生ばかりにても、外國より來れる學生を除く六百人に及び、中にもアル

キユインの如きは、佛王シャールマンに聘せられて其の大なる帝國の教育を主幹し、ビードの著書は到る處の教科書となりて、西歐學藝の光明と仰がるゝに至りき。然るに、紀元後第九世紀我が仁明帝、文德帝の御宇のころに至りて、北方の強蠻デーン族來り寇し、屢々國內を侵掠す、こゝに於てか、學問の事一時全く地に墜ちしが、英主アルフレッド位に即くに及びて、數々デーン族と戦ひて、遂に之れを外國に退け、又もや文藝學術の講習を再興す。ノオサムブリヤの文學は此の時はおもはや凋枯して、舊日の榮觀無く、南方なるエッセックス州之れに代りて學問の本地となれりき。

アルフレッド大王は紀元八百四十九年に生れ、同九百一年に崩す、我が菅原道真と同年代なり。文武兼備の君にて、中興の明主として政事史の上に彰傳せられたるのみならず、文學の史上にも大功ありし人なり。王はデーン族の來寇を卻けて、後、銳意、内國の教育に盡瘁し、みづから物せし良書も一二のみならず。歴史、修德等に關する譯述多き中に、『*Boethius on the Consolations of Philosophy*』、『*Gregory, on the Cure of Soul*』、『*Proverbs*』等は、其の重なるものにて、文章はいづれも森嚴にして質實なり。アルフレッドの文は、すべて當時の國文なりき、されば、此の國に於ける散文學の發達

を促がし、功賃にビードにも優りぬべし。王は處々に豊舎を設立し、海外より博識の學者を招聘し、大に教育を奨励しき。史家、王を以て英國散文の祖とす、當を得たりといふべし。

アルフレッド崩じて後、デーン族又襲來し、大に此の國を蹂躪す、これによりて學問藝術の花再び凋みて、第十世紀の中を(村上天皇の御宇)にエドガー平和王が國を治むるに至りしまでは、根幹共に、全く枯れ果てたるが如くなりき。王の御宇にウィンチェスターの僧正エサルワルドといふもの、盛んに羅甸書の翻譯に従事し、學校擴張の策を講じければ、文學又蘇り、次いで名高きダンスタンといふ高位の僧が時の大臣となるに及びて、文學また漸く榮えたりき。されど、當時の傑作といふは、エフリックが物せし聖書の翻譯なりしを見て、學問の主に宗旨上の翻譯の業に傾けりしを察するに足れり。されば、後の史家、或は此の時代を**翻譯の時代**ともいへり。

以上畧説せるが如く、アングロサクソン時代に於ける著譯はくさくさなれど、其の中最も重大なるものは『サクソン、クロニクル』なり。『サクソン、クロニクル』とは『サクソン紀』の義なり。こはいと古き時代よりの事蹟を、編年體の綴りかたにて、紀元後

一千五十四年まで、頗る詳密に叙したるものなり。固より作者は一人にあらざ、年々歳々相繼ぎて記録しゆきて、竟に一大編となりしものなり。傳説によれば、紀元後八百九十一年までの記録はカンターベリー院の大僧正、ブレグマンドといふが編輯に係るといふ、而してそれより後の分は、處々の寺院の僧が相承けてものせしなれば、文章といひ、記事の體裁といひ、いとさまざまなり。いはゞ、今の新聞紙上の時報、時評等を合綴せるが如きものたるに近し。されど、其の記録の大方は、記者の目撃又は傳聞によれるなれば、歴史としてはまづ精確に近きものなり。サクソンの舊史を探るものは必ず此の書を憑據とす、是れ其の世に名高く且つ重視せらるゝ所以なり。全篇中、アルフレッドの自記に係る分は最も卓越せりといふ。其の文章は、文脈、語格に於ては、近世の英文とさまでに大なる差なければ、綴字の法、字形、發音等は、著く近代のと異なりたれば、到底、殊なる講習を経ざるものには讀み得がたし。

蓋し、今日の英吉利語は純粹なるアングロサクソン語にケルト語、羅甸語、デンマルク語、佛蘭西語、希臘語等の加はりて成りたるものにして、近年、其の混合の量を調査

せるものに據るに、今日の標準語(學術語と地方語とを除く)中、アングロサクソン語は八分の五を占め、残る八分の三は他國語なりといふ。若し一國の言語に存する異分子の量は、やがて其の國民の血族の變化の量なりといふ説にして大過なからんか、アングロサクソンの血液は、今の英國國民の血液の、約八分の五を占むるものといふべし。

第三章 ノオマン征略以後の文學

ノオマン征略と國語及び國文學——外國語の跋扈——國文學再興の
端緒——宗旨歌——『オルミニラム』——物語歌——『レヤモンズ、プラット』

紀元後一千〇六十六年(後冷泉帝の御宇、源賴義在世のころ)佛蘭西なるノルマンデーの公爵ウィルヤム大軍をひきゐて此の國に襲來し、サッセックス州なるヘスチングスが原の一戦にて、時の國王ハロルドをはるぼし、やがて此の國の君となりぬ。之れを史にてはノオマン征略の變と稱す。當時、ウィルヤムに従ひて渡來せし者の多數は、其の原名ノルスマン(Norman)といふ名稱にても知らるべきが如く、元は北方丁抹諾威、瑞典等に居住したりじ蠻民なりしが、紀元後九百五十年、故あり

て佛蘭西に移り、ノルマンデーといふ地方に定住し、多年佛人と交はるうちに、いつしか佛蘭西の風俗に化せられしものなり。されば當時のノオマン族の國語、文學制度などは、殆ど佛蘭西の異なるどころなく、抄くとも、彼等の上流なるものは、常に佛語、羅句語を語り、加之、件の兩國語をもて、自在に文を作ることを得たりき。

夫のアングロサクソン族の、嘗て此の國(ブリテン)を攻奪せしや、元の文物は悉く彼等が爲に化せられて、殆ど原住民の印跡を留めざりき。アングロサクソンは實に英國をして豹變せしめきといひつべし。然るに、デーン族とノオマン族とは、其の此の國を攻略せしことはサクソンに異なることなく、就中、ノオマン族の如きは、政治と文學との上に未曾有の變動を生せしに似たれど、其の感化の實際は、此れ彼れ大に異なるものあり。(デーン族の如きも一時はサクソン皇室を顛覆して全國に君臨せりき、有名なるカニート王はデーン朝の君なりき。)

案するに、後の二者は、其の皮相に於てこそ痛くサクソン族と相異なる所あるに似たれど、其の本來の性質に至りては、三者共にチュートン族の血統にて、其の祖を同じうし、大に相背く所無かりし也。すなはち、ノオマンとサクソンとは相化すべき

者といはんよりは、むしろ相和すべき質ありしなり。要するに、ノオマン征略の結果は、只外面に於て此の國を變化せしのみにとゞまり、内部を一變するには至らざりき。こは政事史の上にも著明なる事實なり。隨うて文學の如きも、其の皮相のみを觀れば、第十一世紀、即ち、一千百五十年以後著大なる變遷を經しが如く見ゆれど、其の實は文脈、發音、綴字法等の變遷たるに過ぎず。此の期、第二小期の末に出でしチーサーの作すらも、單に其の風調の外面に、即ち詞藻格調等の上に佛蘭西、以太利の時尚を現じたりしのみ、其の根本の着想と觀念とはあくまでも依然たるアングロサクソンの特質なり。

固より、かくの如く鎮定したる結果に達せしまでには、サクソン風とノオマン風との間に、政治上にも、文學上にも、多年に亘る烈しき衝突あり、軋轢ありて、一時は外國の文學のかた勢力を逞うし、之れがために往來の國文は殆ど滅びんとせしとすらもありしが、政治上に於てサクソン原素の勝を制せしころは、ひ文學上に於てもサクソンの原素凱歌を奏し、後の英文學の基礎固められき。

但し、こは二百年餘り後のことなり、ノオマン戰勝の當時に在りては、サクソンの文

學は一時悉く地に墮ちたり。サクソン語はもはや主治者の用ひざる語となりて到る處に侮蔑せらるゝと、之れを用ふる庶民(サクソン人)の侮蔑せらるゝが如くにて、何人も之れを著作上の用に供せんとするものなく、すなはち文章語としては、一時全く棄却せらるゝに至りき。第十一世紀の末より一千三百六十二年に至るまで(具にいへば、殆ど三百年間)は、ひとり佛蘭西語のみを教會、法庭、並びに政治上にては用ひたり。大學校の學生の如きは、日常の會話にさへ佛蘭西語若しくは羅旬語を用ひざるべからずと嚴命せられ、小學校の幼童すら、其の學ぶ所の羅旬語を譯するに佛蘭西語も用ひざるべからずと命せられて、從來の國語は全く棄舍よりも退けられき。所詮、一千〇六十六年(征略の當年)より一千二百年に至るまでは、英人は或は其の自由を恢復せんと力むることに全力を傾け、或は默從して其の數奇を悲しむことに心を奪はれたりしかば、アングロサクソンの國文學は、一時全く跡を絶てりき。

按ずるに、當時此の國に佛蘭西文物の跋扈せりし有様は、其の渡來の因縁こそ大に異なりたれど、我が朝に支那の文物の渡來せし當時の状態と稍々似たり。ノ

オマン朝の公用文が、悉く羅旬語若しくはノオマン語によりてものせられしのみにあらず、公卿、貴紳の用語と庶民(サクソン人)の用語とは、其のはじめは外國語の如く異なり、稍々後に至りても、物の名の如きは、上下其の稱を異にせし程なれば、當時の所謂アンゴロ、ハオマン文學の如きは、質も形も純然たる佛蘭西の文學にして、第十三世紀のはじめまでは、史上に記すべき國文學の著譯殆ど無し。

ノオマン朝となりて、後新に盛になりたりし者は、宗旨の歌と物語の歌となり。兩者共に詩歌としての價值には乏ければ、國文學再興の端緒は蓋しこの時より開けしなり。**宗旨の歌**は、ノオマン族が深く基督教を信奉せしに基きて起りたるなり。其のはじめ主治者たるノオマン族は、強ひてサクソンの文物を排斥し、羅旬佛蘭西の文學をして在來の國文學に代はらしめんと力めたりしにも係らず、被治者の大多數は依然としてサクソン人なりし爲に、教化上の自然の必要は、先づサクソン文學の蘇生を促し、更に翻譯文學の流行を招きぬ。一千二百十五年(大憲章の時代)に成りし僧オルム又の名オルミンが作『オルミラム』といふ宗旨の歌は、新式の聲律によりてものしたるサクソン律語にて、こは經文及び祈禱文を律語に翻

*Orm.

譯して作者の述懐を加へたるが如きものなり。オルムは、頭韻の法をも用ひずして、ひとり音の低昂のみを律格とせり。尙、此の外にも翻譯せられたる書類夥多ありしが、サクソン國粹の復興煥發すると共に國文學の氣焰漸く盛になり、終には形式のみを外國に取ることもなりぬ。例へば、一千三百六十二年に成りし有名なる『ビヤトス、ゼ、プロトマンの夢』、『ウィルヤム、ラングランド』といふ僧の作といふ物語歌の如きも、同じく宗旨上の寓意談なれど、其の精神と着眼とは、全くサクソンの特質より成れるものなり。サクソンの特質とは、庶人的文學主義なり、彼の佛蘭西、伊太利等の文學の主(若しくは専ら)朝廷及び縉紳のもてあそび脚にとてもものせられたるとはおなじからず。

物語の歌は、ノオマン縉紳の深く史談小説を愛好せしに由來す。彼等は山獵、野獵の後に荒唐なる物語を聴くとを好みしなり。物語歌の泉源は、正史及び野乘にて、所謂物語歌の行はるゝに至りし前に、羅旬語をもてものせられたる夥多の史談ありき。まかれども、そは皆國文學に密接せざるものなれば、今爰に語るに及ばず。さるはどに、ヘンリ一世王の朝に至りて、此の史談のうちより所謂物語歌生

三三
 まれ出でたり、例へば、モンマスのデヴィッドと稱せられたる僧の、戯に正史物語と題してものしたる英國古代史の如き、是れなり。これは一千百四十七年のころにウェールス地方の傳説を元として羅甸文もて綴りたるものなりしが、叙する所大かた荒唐無稽の甚しきものにて、殆ど小説にひとしかりしかば、當時の史家はいづれも史の名を濫用せられたりとして怒り罵りきといふ。然るに此の書痛く上流の人々にもてはやされ、ゲーマーといふもの、或貴婦人の爲に之れを佛蘭西の律語に翻譯せしが、其の翻譯いつしか佛蘭西に流行し、やがて彼處にて種々の修飾を被り、名題も變はり、外形も變はり、年経て、ノオマン詩人リチャルド、ワースといふものゝ名作といふ名義にて、故國英吉利へ歸り來たりぬ。此の時、ウーストルンシャー州に「イヤモン」と別號せる僧ありしが、はじめて此の詩を英語に譯して「レヤモンのブラット」と命題しき。實に此の物語歌は、ノオマン征服以後はじめて世にいでし英詩とも稱すべし。蓋し當時に謂ふ翻譯は最も自由放埒なる意譯なれば、翻譯といへば翻譯なれど、或は翻案といはんも差支なかるべし。現に此の「ブラット」の如きハワースのは全篇一万五千行(句)より成れ、レアマモンのは三万二千五百行(句)より

成れり。レヤモンの律語は嚴格なる律格にしたがひたるものにはあらず、されど概して三昂音と六又は七音とを以て律とし、専ら頭韻を用ひたり、脚韻の如きは殆ど無し。且つ、此の長篇の律語中、佛蘭西語を挿用したる數、僅に五十に過ぎずといふ。

此の「ブラット」に叙したる事柄は、概して架空の談たる、勿論なり。按ふに、歐州列國民の由來をトロイ國の滅亡に歸せんとするは、當時史家の間に行はれたる一種の流行なりしが、此の物語の如きもブリテン國の開祖ブラット(ブルータス)をトロイの英傑エニヤスの曾孫なりと做し、其の本國トロイ城陥落の後、其曾祖父エニヤスが落行きし處(伊太利)よりも一層西方へ船にて落ち行き、遂にブリテンの島に着し、こゝに新國を開ききとせり。譬へば、我が朝の戯作者が義經爲朝の後談を作り設くると同じ趣なり。

件の翻譯の成りしは、一千二百五年なりと聞こえたれば、彼の政治上一大革命の緒となりし、大憲章承認の時代よりは、おほよそ十年ばかり以前の事なり、されば又、純粹の英語にてものせられたる、オルムが宗旨の歌に先つとも十年あまり也。

此の二大篇の成りし時をもて英、佛、二文學調和の期とす。さすれば英の國文學は其國憲と生誕の期を同じうせりともいふべく、又英佛兩原素の混同融和せしは、政治上も文學上も、其の機會を一にせりともいふべし。さりながら「英詩の曉星」と稱せらるゝデニッフレ、ジョーサーが出世以前には眞の國英學といふべきもの尙成立せざりきといふが、更に精確なる評也、何となれば當時の文學は總じて翻譯、譌案にあらざれば、佛、伊の諸作を模倣したるものに外ならざればなり。

第四章 新國文學

エドワード三世の功業——デモン、ウィックリフ——宗教改革の端緒——新
 聖約全書の翻譯——國勢の進歩

以上叙説したるは英國新文學の端緒たるに過ぎず、此の國の二大要素たるサクソンとノオマンとが眞に融會混淆して相固着し、一國の英吉利民族となりしは、第十四世紀の間なり、隨うて眞に英國新文學の地盤を固め、十九世紀の今日に至るまでも英國文を修むるものゝ爲に推重景仰せらるゝ價值を具へたる新國文學の開祖は、詩歌に於てはデニッフレ、ジョーサー、散文に於てはデモン、ウィックリフなり。而し

て件の二名家は、共に十四世紀以後にいでたり。

サクソン、ノオマン二要素を調和するに與りて力ありし事件、一二のみならざれども、其のやゝ近因とも見做すべきはエドワード三世の佛蘭西征討なるべし。此の役に於て、サクソン族とノオマン族とは、互に相敬重すべき所以を覺りき。例へば、サクソンの歩卒と射手とは、此の時初めて其のノオマン將校の老功と勇武とを知り、ノオマン將校もまた其のサクソン兵の不撓不屈なる勇氣を知りて、一致協同の重要を感じ、漸く互に相依らんとするの念を生じき。之れと同時に、社交、政治等の必要はノオマン族を驅りて自然にサクソンの情感言語を用ひしむるに至りしかば、サクソン語次第に勢力を得、一千三百六十二年に至りては、政府新に令を發して、法庭、將校等の公なる場處に用ふる國語をすら、ノオマン語を廢してサクソン語たらしめき。加ふるに、一千三百八十年に及びては、下に語るデモン、ウィックリフの翻譯せるサクソン語の聖書行はるゝに至り、ますますサクソン國文學興隆の運を促じぬ。其の以前教會にて用ひられたりし聖書は、すべて羅甸文にて成れりしなり。

三六
 ジョン、ウィックリフは紀元一千三百二十四年(後醍醐の御宇)ヨオクシヤ州なる
 ナース河畔に生まれ、齡十六歳の時オックスフォードに入りて、修學多年の後、一千三百
 七十二年同大學より神學大博士の學位を得て、**英國宗教革新の曉星**たるの
 基を立てき。當時宗教は、すべて羅馬法王の教會制度の下にありて、教法、教政、日を
 逐うて繁縷に流れ、宗教の眞旨は求むるに由なき有様なりき。ウィックリフ憤慨措
 く能はず、挺身して羅馬教會の積弊を指摘し、其の制度、教義を攻撃して、基督敎革新
 の必要を唱道し、信仰の自由を痛論せり。會、ランカスター公爵ガントのジョン、僧
 侶の跋扈を怒るの餘り、之れを官より退けて官權と法權との別を立てんと欲す。
 公爵の政界上の意見とウィックリフの宗教上の意見と、期せずして相投する所あ
 り、よりてウィックリフは常にジョンの後援を得、ますます盛んに教政を攻撃しき。
 さはれ、當時は羅馬法王の威力の廣大無邊なりし時勢なれば、百事ウィックリフに
 利あらずして、其の説容れられざるのみならず、其の命また屢、危かりき。彼れは事
 の成るべからざるを悟りて退隱し、**經典の新譯**に着手しき。按ふに、**經典**
 の譯述は、前章にいへる『**律語解**』の他にも、一二これなきにあらざりしかど、未だ翻譯

の躰をなさず、且ついづれも斷片にして十分の用をなし難く、随つて普通國民は未
 だ救世の眞福音に親炙せざりきといふも可なり。於是、ウィックリフは、先づ聖典の
 全部を翻譯して普く國內に頒布し、以て自由信仰の實効を收めんと欲したりき。
 蓋し、獨力にして新舊約の全部を譯了するが如きは、當時に在りては、頗る艱難なる
 一大事業なりき。されどウィックリフの熱誠と精勵とは、多くの助筆をだに借るこ
 ともなくて、一千三百八十三年(我が朝後龜山天皇の御宇、『**新葉集**』の選定後二年)遂
 に其の業を完成しき。ウィックリフが永眠せしは齡六十一の時にして、其の在世時
 は我が吉田兼好、源親房等と同年代に當る。
 ウィックリフが企圖せし宗教改革の精神は、後年マルテン、ルーテルの獨逸に出づる
 に至りしまでは其の成就の日を見ざりきと雖も、彼れが翻譯せし兩經は直ちに全
 國に流通して、上下貴賤争ひ讀みき、是れ譯者が圖らずも其の國文學の興隆に裨益
 貢獻せし所以なり。

彼れがものせし著述は、右の翻譯の外は概して皆羅甸文なり、就中、『**Trilogus**』と題し
 たる書、最も名あり。眞理、知慧、及び虚偽を人に擬して説を吐かしめたる問答録に

して、最もよく其の持説を表はせり。總じてウィックリフが文牀は遒勁を欲する餘り硬厲に流れたる嫌はあれど、概して明瞭にして達意の文たるを失はず。聖典の譯文中には名文と稱すべきもの少からず、其のうち馬可傳第一章の譯文の如きは、永く後世に傳唱せられて後の改譯の模範となりき。

ウィックリフが國文學上の他の功勞は國語を加殖せし點にあり、即ち羅馬語、羅匈語等を取りて之れを英語に鑄造し、國語の不足を補ひしこと、是れなり。シェークスピアの使用せし語のうちウィックリフが鑄造になりし語尠なからずといふ。ウィックリフが新國文學の再興と弘布とに與りて力ありしこと大なりと稱すべし。

さて、此の時に當りて、英國の威武西歐に冠たり、時の國王エドワード三世は、方に佛蘭西と戦ひ勝ちて、其の國王ジョンを虜にし、又北のかた蘇格蘭を征して、其の王ダギット、ブルースをも生擒し、之れを國都ロンドンに拘致し、加之、勢威日輪の如き羅馬法皇に抗論して、貢を拒み、嚴然として四海を睥睨せり。こゝに於てや、上の行ふところ下之れに倣ひ國內到る處に、**新しき英氣、新しき思想、鬱勃として磅礴**し、恰も之れを表白するをつかさどるべき新詩人の世に出でんことを待てるも

の、如くなりき。此の機運に乗じて現れしものを、英國の詩祖、**ヂェッフレ、チョーサー**とす。

第五章 **ヂェッフレ、チョーサー**

經歷—特質—律格—其の傑作—『カンターベリ物語』—バラモン、ア
ーサイト—物語—其の他の梗概

ヂェッフレ、チョーサーは、英軍か佛蘭西なるクレシーの平原にて佛軍と戦ひて名高き大勝利を得たりし前六年、即ち、一千三百四十年にロンドンに生まれ、といひ傳ふ。其の精確周密なる**經歷**は、之れを知るに由なけれど、按ずるに、其の父はロンドンなる葡萄製造商ジョン、チョーサーといふものなりしならん。史家の推定によれば、チョーサーはケムブリッジ、オックスフォード等の諸大學に歴遊せしもの、如し、又はじめは狀師たらんの念ありて法學中院の一員たりしともありしが如し。一千三百五十九年、齡十九歳のとき、エドワード三世の外征の役に從ひて佛蘭西に赴き、レナエーの攻圍の際、敵の爲に虜とせられしが、一千三百六十年、兩國の和議成るに及びて、本國に歸るを得たり。さて、二十七歳の時、所謂**グレット(扈從)**に擧げら

れ、終身二十マーカーの扶持を賜はり、又時の權家ランカスター公ガントのデーンに知遇せられ、其の後、皇后の宮に仕へたりし官女フィリップといふを娶りき。此の女の同胞カサリンといふはランカスター公が後妻なりしかば、チヨースーは此の内縁によりていよく公が扶助を得たり。さて齡三十歳のとき、外交官に任せられ、其れより十年間は七たび以上こゝかしこへ公使として派遣せられき。此の官遊の間に、伊太利の諸市を遍歴し、有名なるベトラルク伊太利に會ひて、そが作中の傑作と稱せらるゝ『ペーシエント、グリゼルダ』(『カンターベリ』の原話を聴きぬ、といふ傳説あり、おかれども其の實は、ボカチオの『十日物語』若しくはベトラルクの、ボカチオを羅旬文に翻譯したるものがチヨースーの種本なるべしといふ。さて又、一千三百七十四年には、ロンドンの港に於ける羊毛、獸皮、皮革及び葡萄酒の輸稅調査の官に任せられ、自ら帳簿に記入するをつかさどれりしが、エドワード三世王崩じてリチャード二世位に即くに及びて、王の侍士エスクワイヤの一員となりぬ。後再び小輸稅の調査官に任せられて、前の羊毛葡萄酒の調査官をも兼ねたりしが、此たびは代役を使ふことを許されければ、十分の餘暇を得て、此の時其の傑作『カンターベリ物語』の粗

稿(?)を作りきといふ。一千三百八十六年、選ばれてケント州の代議士となりて國會に出づ、其のころは代議士といはで某州の士爵と呼びにき。此の歳は實にチヨースーが其の青雲の頂點に達して盛えたりし時なり。彼れは、ガントのデーン公爵より給せられたる一年十磅終身の扶持の外に、尙種々の扶持及び俸給あり、加ふるに、特に皇室より賜はれる諸種の恩給ありしかば、其の家頗る富み榮えたりき。一千三百八十七年或は謂ふ此のあたり異説ありに彼れはウッドストックの里に退き、こゝにて『カンターベリ物語』の著作に着手し、閑日月を樂しまんとせし間もなく、不慮の變動チヨースーが身上に起り來たりぬ。其のころ國王リチャードは尙いとけなく、チヨースーが無二の保護者、ガントのデーン公爵は權力衰へて國外にありしかば、政權は悉く時の攝政グロースター公爵の掌裡にありき、まかるに、此のグロースター公爵はチヨースーと不和なりしかば、從來チヨースーがつかさどれりし官は突然に免せられて、收入俄に減少せしに、其の同じ年にチヨースーが妻みまかりぬ。或は謂ふ、此の際國事犯の嫌疑を受けてロンドン獄に投せられきと。いづれにもせよ、是れ彼れが最不幸の期なりき。さりながら、後幾ばくもなく、リチャード王が政を親するに

至りてチョーサー又殊遇を蒙り、一千三百九十四年には一年二十磅の終身扶持を賜ひ、同じ九十九年には嗣王ヘンリ四世より之れを倍にすといふ恩命を得たりき。一千四百年十月廿五日ウエストミンスターの家にて死す、齡六十歳、後小松帝御宇金閣寺落成後三年。

チョーサーは英國文學の紫式部とも稱すべし。彼れが傑作『カンターベリー物語』の長篇は、其の古文の軌範たると同時に、萬古不易の價值を有して、後人に推重せらるゝところ、其の質の甚しく我が『源語』と異なるにも拘らず、又彼れは律語に成り、此れは散文に成れるにも係らず、將作者の性の相同じからざるにも關らず、其の國文に於ける地位は、二者頗る相似たり。按ふに、世に謂ふ四大英詩人のうち、叙事詩、劇詩の作家としてシェイクスピアに次ぐものはチョーサーなるべし。

チョーサーは、十四世紀中の何人よりも、最も廣く、又最も雜駁に、人世を経験せし者なるべし。彼れは狀師たり、武人たり、廷臣たり、外交官たり、國會議員たり、實務家たり、又詩人たりき。此等の諸點に於ては、其の境遇、或はスペンサーに比すべく、或はミルトンに比すべく、或はシェイクスピアに比すべし。かゝる豊富なる經見と事業と

は、彼れをして上は王侯の尊きより、下は最下等の勞力者の賤しきに至るまでの諸階級の諸種の人々に親接することを得しめ、大僧正、僧正等の風采、性癖をも、法廷の吏員若しくは市井の賤民が諸の特質にも通ぜしめき。而して、此等泰平、戦亂、教會、武事、政事、社交、國內、國外、富貴、貧賤、榮達、落魄の諸種の境遇に於ける其が實驗は、凡て溶解せる黄金白金の流と化して、其の傑作『カンターベリー物語』に注入せられたり。彼れは人生の快活晴朗なる方面も、幽鬱暗澹たる方面も、双つながら備さに觀破して公平周到に描きたり。其の觀察の陂險ならずして普遍圓滿なるところ、頗るシェイクスピアの無私無偏なるに似たり。就中、その從容、優美、溫厚、端雅なるところ、古今能く及ぶもの鮮し。只彼のシェイクスピアは、且つ廣く、且つ邃きに、チョーサーはひとり其の前者を繼にして後者を自在にする能はざりしのみ。予は此の略史に於て、此の大詩人の明細なる月旦を試むべき餘地なければ、爰には一二の批評家の言を引抄して讀者の参照に供し、且つ其の文致の大要を評し、やがて彼れが諸著の談に移るべし。

ハズリットはチョーサーを評して曰はく、チョーサーは諸大詩人中、最も實際の事に長じ

たる者なりき。最も實務に老い、世故に通じたる者なりき。そが詩を讀めば正史を讀む心地す。米國の詩人ローエルもまた曰はく

「チヨースーは猶陽春のごとし、新鮮しき氣と背々としたる句ごが其の全篇に溢れり。彼れの固る、や物皆忽焉として満開の花となる。彼れの悦樂と諷諷と悲哀とは、皆へば一の噴水泉の如く、抑へこむべからざるの概あり。チヨースーが作を讀むは、旭のまだ上らざるに、露深き千艸を分けて行くらん如し、物皆新しく、随々しく、かぐはし。彼れが第一の長所は、美術の最も重なる誠實なり、彼れは強ちに旨意の深からんをば寫し、だまんと力めざれど、本來明瞭なる旨意其の心にあるがゆゑに、寫しださるゝ所の物皆ちのづから明瞭なる象を具ふ。彼れは最も虚式を脱したる公明實直の詩人なり。」

と。按ふに、チヨースーの文致は善く其想念と符合せるなり。其の文致は質樸平易なり、すなはち其特質は誠實なり。チヨースーは一物一物を寫さん爲に強ひて詞句を作らんと力めたる跡なし。否、さながらに直ちに狀寫す。其の辭は皆最も單純なるものなり、而して其の狀寫の精緻にして其の細微の眞實をすら誤らざる、殆ど寫眞術其物にも似たり。其の文談諧に宜しく、又感慨によろしく、其の律調もまたいと妙なり。加ふるに、彼れは當代に於ける最も廣大なる語林を領したり、思ふに、其の豊富なる詞藻は、一は内外の書籍に起源し、一は其の現生活の經驗に由來せ

Cambridge
pentameter

るなり。さて、チヨースーが最も多く用ひたる律格は、五歩の行脚韻、低昂格にして作詩法に謂ふ昂起五步格なり。

昂起五步格、又五歩の低昂格といへるは、低音と高音との一聯を以て一組となすこと、猶ほ平聲と仄聲とを以て一組となすがごとくして、之れを五組作りて一句とする格なり。されば、一句のうちに昂音五つと低音五つとあるを定格とすれど、低音は増加するも妨なきものとす。我が國歌にア行の聲の字餘を許すと同理なり。其の詳細は作詩法の大要を説かざれば解しがたかるべければ、今説明するに由なげれど、大略をいへば

低昂二低昂二低昂二低昂

とやうに十音相連りて一句をなすを、低昂五步格といふ。支那の詩の平平仄仄仄平平を以て不起格の正式の起句とするがごとし。英語にては此の格を句毎に用ふるを通例とす。さて、脚韻ある時は之れを英雄律格Heroic Measureといへるは、勇ましき物語歌に屢々用ひられたるに由る、二つにはさるたぐひの詩に用ひて宜しきが故なり。又脚韻無き時は、没韻律格Blank Verseといふ。

此の律格は、我が五七又は五七調に相當し、最も多く彼の國の詩人に用ひられたる格なれど、古來チヨースーは、此の格を自在に用ひたるはなかるべし。同じ五七又は七五の調にても、用ふる人の技術次第にて、千句一律の單調ともなり、波瀾多き句拍子ともなる如く、所詮は用ひかたの巧拙にて調の妙を現するなり。

チーサーが壯年の諸作は主に羅句并びに佛蘭西の諸名作の翻譯たるに過ぎず。こはチーサー又は英國の詩人に限りたることにあらず、總て此のころには創作といふといと稀にて、佛、伊、英等の作家等は常に互に其の思想と文章とを相貸借したりき。チーサーの如きも、はじめは佛蘭西の物語を祖として著譯し、中頃、伊太利に官遊して、多く彼の地の名著(就中、ボカチオの作)を讀むに及びて、深く其の旨の微妙なるに感じ、翻然伊太利風の詩人となりしが、千三百八十四年以後に至りては、また大に悟る所ありてにや、斷然伊太利風の詩歌をも抛擲して、純粹の英國詩人となりぬ。これ即ち其の傑作『カンターベリー物語』の成りし時なり。此の作の梗概は下に説くべきが、まづ第二等以下の作のあらましをいへば、長篇のものゝうち、八篇は純粹なる外國の傳奇歌を翻譯又は翻案せるものにて、三篇は伊太利風の物語歌を模範として作りたるものなり。所謂八篇とは『薔薇花物語』、『戀の廳』、『禽の議會』、『呼子鳥』、『ナイチンゲール』、『花と葉』、『チーサーの夢』、『公爵夫人の書』、『魯の殿』をいひ、三篇とは『善女物語』、『トロイラスとクレシイド』、『アチライダとアーサイト』をいふ。皆物語歌なり。但し、最近の精査は、此の八篇のうち、『戀の廳』、『呼子鳥』、『花と葉』、『チー

サーの夢』等は後人の作に係り、之れをチーサーの作とせるは甚しき謬傳なることを發見せり。總じて、このころは、寓意の物語いたく行はれたり。而して全體を作者又は人物の夢に、取做したるは、曲亭前後の作にありがちなる夢物語の趣向と同一なり。憎怨、貪吝、悲哀、貧窮、懶惰などいふ特質も、各々或表章を得て篇中に活動せり。例へば、『薔薇花物語』の如きは、もと佛蘭西に行はれたりし比喩の物語歌なるが、其の主人公が夢のうちに得んと力むる魔力をもてる薔薇花は、正しく情人に比したるにて、花園は即ち世間なり。『禽の議會』、『花と葉』、『魯の殿』なども、多少相似たる筋立なり。例へば、『花と葉』にては、花は色々のものに擬せられたれど、概していへば、假美、又は浮きたる快樂を代表し、葉は眞實の美、即ち淑徳、及び精勵になぞらへたり、とおぼし。爰には、此等物語歌のあらましの筋をだに擧ぐる能はず。

チーサーの最大傑作は『カンターベリー物語』なり。此の作は十四世紀に於ける英吉利の國民的敘事詩とも稱すべき者にて、其の意匠の根柢は伊太利の詩人ボカチオが『十日物語』に胚胎したると明なれど、其の精神は大に異なれり。『十日物語』は伊太利のフロレンスに惡疫の流行しける時、そを市外に避けたる七人の宮女と

三人の紳士とが徒然を慰めんとて、かたみ代りに物したるを集めたるやうに取做したる趣向なれど、チヨースーのは、英京ロンドンよりカンターベリの聖院に参詣せんとする都合三十五人の香客が、旅途の無聊を慰めんとて、馬上にて物語りたる面白き小話を集めたるやうに作り做せり。さて、此等の物語は一つづつに引離して見るも、江島屋、八文字屋、又は西鶴、又は『今昔物語』、『宇治拾遺』などの最も面白き小話を讀むが如き興趣あるのみにあらず、其の物語る人物の人品と物語の筋どがいとよく調和して、さながら個々の特質ある人々の直話を聞くらんやうの趣あれば、旨味ひとしほに深し。加ふるに、旅行の途次に種々の出来事あり、且つまた香客が種々の物語に就きての種々の批評さへ巧に綴りあはせられたれば、一種の複雑なる旅行記としても見せこゝろあり。

此の作の發端の卷を『プロ、ীগ』といふ。プロ、ীগとは序の卷の義なり。卷のはじめに、春景色の簡淨靈活なる叙狀あり、さて、作者が其のころの習慣にまたがひてカンターベリなるトマス、ア、ベケット尊者の廟に参詣せんとして英京ロンドンの一區サウスワークなるタバードといふ旅館に投宿したるに、其の夜そこに同じ目的

にて投宿したるもの殆ど二十九人あるよしを叙し、微細に其の身分、風采、特質、服装等を狀說せり。其の中には、士爵の武士あり、侍士あり、從卒あり、僧あり、尼あり、商賈、學者、法官、豪農、小農、水夫、諸種の職工、醫師等あり、彼等相會して晚餐を喫しけるとき、人々道路の物騒なる由を語りあひ、そを安全ならしめんには、皆一團となりて旅行するに如かじと相談一決したる折、此の家の主人のベリーといふがいで來たりて、拙者も客人達の道案内かたづつ同伴すべし、といひ、且つ長途の徒然をまぎらさん爲に、人々おのづから馬上ながらおのが見聞したる奇話、珍説を、二種づつ語らんはよからずやと發案す。人々此の議に賛同し、團を以て話説者の先後を定む。

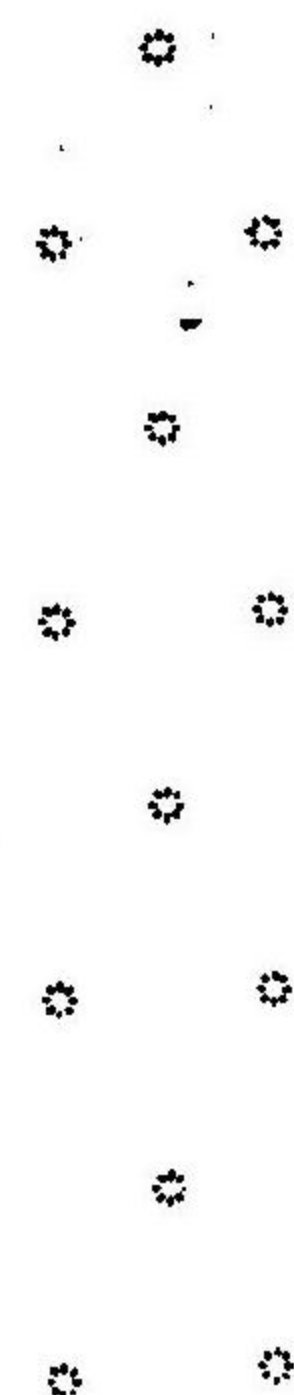
Anon to drinnen every wight bigun.

And shortly for to tellen, as it was.

Werc it by aventure, or sort, or cas.

The sothe is this, the cut fil to th' knight

Of which full byllie and gled wos every wight.



He seyde: 'sin I shall bigme the game,
 What, what, welcome be th' ent, a Goddes name:
 Now lat us ryde, and herkneth what I feye.'
 And with that word we riden forth our weye;
 And ha bigun with right a mery chere
 His tale anon and seyde in this manere.

やがておのがし、鬨を引きはじめけるが、奇運か偶中か知らず、鬨はつひに士爵にあたりぬ、かりければ人々皆浮きたちてよるこびぬ……彼れ(士爵)いへらく「あはれ、神明も照覽あれ、我れは此の當たり鬨を甘んじて受けて、いでや、まづ遊戯の緒を發くべければ、人々は馬を進めながら我がいふ所を聴きたまへ」。その言葉の下より一同馬を進むれば、彼れはやがていきたのしげに物語をはじめ、下の如くにぞ語りける。

後の方の句は、實に序の卷、第八百六十行目の句にて、本編の緒なり。(文字の綴りかたの如何ばかり近世の英語のと異なるかは、こゝに擧げたる一節によりても察せらるべし)。士爵の語れる『バラモン、アーサイト物語』の梗概は左の如し。

程經し昔希臘シーアスの部にバラモン、アーサイトと呼ぶ二人の勇士ありしが、アゼンスの英主シシッス大王が希臘の諸邦を斬り靡けし時、作の二勇士は手痛く防戦して遂

に大王の虜となり雅典の王宮に送られて、幽囚の身となりぬ。此のシシッス大王の後にヒッポリタさいふあり、又其の妹にエミリさいふがありしが、此の媛の姿の美はしきこと、譬へば五月の朝に咲きいでたる百合の如くにて、清く優しく麗はしきこと、また世にあるべうも思はれず。或朝、媛は後園の露を踏みて五月の神に祈念を行ひ、やがて讃歌を唱へけるに、其の聲さながら天上の鳥の如く、木々の樹枝を渡りて、つひに彼方の囚獄の中にきこえき。二人の勇士、そゝるにも立ち上りて、鐵窓より透し見るに、頭には華莖を戴きて、新装の姿雅かに、蓮歩を遅す媛が風情春花秋月を望むが如き心地して、猛き武士が心も、媛を戀ふる爲、物狂はしくなりて「我れこそは媛を得ぬ」、「否、我れこそ」多年の交りをも忘れて、直ちに一場の争を起しぬ。つひに決闘せんとして、腰間に手をかくれれば、素より身には寸鐵もなし、心づきて淺ましき幽囚の身をかこち、争ひは止めしが、及ばぬ戀の念はなかく、にきえやらす。さる程に、シシッス大王の親交の友某さいふはアーサイトも親しき間なりき、されば、王にさりなしてアーサイトが幽囚は免されてけり。かくてアーサイトは再び雅典の地を履まじと誓うて、離たれば、バラモンは痛くアーサイトが自由の身を羨みけるが、アーサイトはなかく、に再び媛にあはん由なしとて、殘されしバラモンを羨みけり。さて、アーサイトはアゼンスを去り、快々として二年を経けるが、或る夜の夢に、年來信仰のマーズ尊神、アーサイトが枕上に現はれて、媛戀しくば姿を變へ、ひそかに王宮に仕へて時を待てとありければ、アーサイト大に悦び、やがて扮装を改め、方便を求めてシシッ

スの庭に宮奴となりて入込みしが、器量あれば次第に累進して、やがて王が第一の寵臣、
さもなりのぼりぬ。

かくて、五年を経るまいに、折々媛を仄見るのみにて、尙如何をもせんすべなし。思ひは
同じきパラモンは、長き苦しみ堪へられて、遂に獄舎を破りて出奔し、ある林の中に
身を潜めつゝ、夜に入るを待ちて、一たびシープスに歸らんと企てたり。其の日恰もア
ーサイトは、節會に用ふべき花籃の料を得んとて、作の林にわけ入り、忍冬、山楂子などを
折取りながら、五月の讃歌高らかにうちすせしが、憶ひ起すは七年前のかゝる朝、媛が
後園の清容清歌、それを憶ひこれを思ひて感慨に堪へず、天を仰いで長歎せり。パラモ
ン其の聲をきき、つけて樹間より跳り出で、ちのれ、不實の腰拔武士と、劍を舞はして斬り
かゝりければ、止むを得ず、抜き合はせて斬り結びしが、勝負つかざりければ、次の日の同
時刻を約して立ち別れ、さて翌日、再び會うて決戦なりし時、大王シックスは后ヒツボ
リタ、及びエミリ媛、其の他近侍あまたを率ゐて、遊獵の途次こゝに來かゝり、これを見る
や、馬を馳せて割りて入り、しばし留めて仔細を訊す。パラモンは思慮の遠なく、一什
一伍を語り、后妹エミリ媛を奪ひての決闘と告ぐるや、大王大に怒り、即坐に二人を誅せ
んとす。媛を始め、近侍の面々、詞を盡して之れを宥む。大王曰ふ、さらばアーサイト、パ
ラモン二人共こゝを去り、明年五月、各々一百の武士を率ゐて來るべし、その時仕合の勝
負によりて媛をさらすべし、と固く約束して、各々三方に別れけり。
シックス大王は、ちれより命を下して、宏大なる比武場を作らしむ。周囲凡そ一哩、石を

積みて、周壁をなし、諸門は悉く大理石を以て作り、ギナス、マーズ、グイヤナ等の諸尊神の
神龕を處々に安置し、周壁の内面には古英雄の功業を畫き、又は彫刻したるなど、其の莊
麗古今に比ひなし。さる程に仕合の當日近ければ、邸へ聞きたる遠近諸國の王侯、武將、我
れもくさ雲の如くに集りたるが、中にもパラモンを後見して來りたるシープス王は、
金冠を戴き、金車に乗り、四頭の白牛にこれを牽かせ、二十頭の白狗を隨へて、場内にぬり
入れば、車に垂れし海珠、山玉の翫々たる聲は、あたりの鳴りをも靜むるばかりなり。ア
ーサイトの後見はリデア王にして、金鎖つけたる肥馬に跨り、頭には桂冠を戴き、馴れた
る純白の巨鷲を押し立て、獅、豹等の猛獸を前後左右に從へたる威儀、シープス王にも譲
らざりき。さてシックス大王は盛宴を張りて、一々貴賓を接待し、應禮朝夕を徹したり。
かくていよいよその日となりければ、パラモンは黎明ギナスの神殿に参拜し、祈念をこ
らして勝利を願ひけるに、神像の不思議にも震動しければ、正しく感應の靈徴と密跡し
て場内に馳せゆきぬ。さてまたアーサイトも、早朝彼のマーズ神に参りて勝利を祈り
けるに、神像の鍛鑿術として鳴り響きければ、これも勇みて場内につけたり。やが
て時刻になれば、喇叭、角笛、笛、太鼓、さまゝの軍樂の響を合圖として、双方各、百名の勇士、
ギナスの白旗とマーズの赤旗とをふりかざして、劍戟の光り白日にまばゆく、咄を知り、
義を重んじて、奮撃亂戦の壯烈たへんに物なく、少刻勝負は見えざりしが、やゝありて
マーズ神の御影、アーサイトが頭上に現るゝと見るや否や、味方の勇氣百倍して支ふ間
あらせす雪崩の如く押し進めば、パラモンが隊はこゝろく敗北し、勝利はアーサイト

と定まりて、滿場の喊聲は天地を動かさんばかりなりき。
 さるほごにギナスの女神は、神カマーズに及ばずして、空しくパラモンを敗れしめたる
 なかち歎き、其の聲オリムバスの靈山を動かし、且つ其の涙は時ならぬ洪水と大地に
 溢れければ、サタルン神見そはなし、媛神の悲歎を止めんと、即ちフエーリーズを下す。恰
 も真しアーサイトがエミリ媛の手より柱冠を受けて歸る途上フエーリーズ烈風となり
 て俄然陣馬の足もさに落ち、狂塵風を舞ひ立てば、馬は驚き人立してアーサイトは落馬
 しけり。乃ち扶けて宮中に歸り醫療に手を盡しけれど、神意なれば其の効なくて、遂に
 眠せんとするに臨み、エミリ媛に遺言してパラモンと婚を結ばしむ。かくてアーサイ
 ト最後を遂げければ、大王はいと鄭重なる國葬を行ひ、エミリ媛は妻の禮を以て葬事に
 關り、墓頭には更らに桂樹を植ゑてこれが標となし、さて忌服はて、後ち媛は遺言によ
 りてパラモンとめでたく婚し、雅典の武威はこれより益々宣揚せり、云々。

序の巻にいへる所によれば、往く路にておのゝ二種、歸り路にても、おのゝ二種
 の物語りする約束なりしかば、都合三十二人の香客宿を出で、後更に三人の叢詣
 者加はりたりが、悉く物語せば、百二十八種の物語となるべき筋なるが、本篇は、諸香
 客が未ださして行くカンターペリの聖院に着せざるうちに中絶したれば、その物
 語は合せて二十四種だけにて終りたり。されども一種の物語毎に序の巻添はり

て、前後の聯絡を整へたれば、當代には珍しき長篇の歌となれり。さて、寺領僧のと
 チョーサーの第二の物語とを除くの外は、ことごとく律語にて物せられたるが、この
 律語には一つゝに調べの變化あるが故に、絶えて一律單調の弊に流れたるどこ
 ろはなし、こは其の道の學者の定評なり。按ふに、幸ひにかくの如くなるを得たる
 は、一つは其の物語の旨趣の千變萬化なるにも由れるならんか。

チョーサーは優美なる詞藻に富みたるのみにあらず、諧談の才にも、悲哀を寫す筆力
 にも長じたり。二十四種の物語のうち、パラモン、アーサイト物語の他に、カスタン
 ス物語「カナセ物語」「グリゼルダ堪忍物語」の如きは、そのみを引き離して見るも
 尙ほ十二分の興味ある作なり。

「カスタンス物語」は、法律家の語れるいと美しく且つ哀れなる物語にして、「カナセ物
 語」は、侍士の語れる物すこく勇ましく美しき物語なり。又、有名なる「グリゼルダ堪
 忍物語」は、オックスフォードの一學人が語れるものにて、其の源はボッカチオより出
 でたれども、チョーサーの想像添はりて一段の光彩を増し、貞女の神貌躍如たり。評
 者或は此の篇を以て「カンターペリ物語」中の壓巻と稱す。總じて、此等の物語の作

風は、前に語せる「バラモン、アーサイト物語」によりて其の大概を想像するを得べし。所詮、チーサーが作の美妙なる所以は、もとより物語の筋立にあるにあらず、さればその梗概を叙すればとて甲斐なかるべし。且つや、此等物語の筋は、概してチーサーが創案にはあらず。例へば、士爵の物語の如きも、明にボカチオのシセイダ物語に基き、法律家の物語の如きも、作者の友たりし同代の詩人デモン、ガワラの作を元となせり。かゝるたぐひ數ふるに遑あらず。後世の詩人まばく、チーサーの此の物語の或部分を、近世律語に翻譯せんと試みつれど、ドライデンの堪能を以てすらも失敗し、大オウワーゾオスの如きすらも、原作の妙に及ぶこと能はざりき。以てこの物語の美妙の、専らチーサーが特殊の天才に因せることを知るべし。チーサーの物せる散文の作も若干あれど、取りいで、いふべきほどにあらねば茲には省きつ。

第六章 チーサーと同代の詩文人

チオン、ガワラ、ウィルヤム、ラングランド、ビヤース、プローマンス、
ドリーム、チオン、デ、トレギサ、チオン、マンドギル

チーサーと同時に名を著はし、詩文人少からず。散文にてはウィックリフの他にデ、ン、トレギサと士爵チオン、マンドギル一三〇〇—一三七三とあり。詩歌にはチオン、ガワラ(一三二〇?)—一四〇二とチオン、バーボア(一三一六?)—一三九五とウィルヤム、ラングランドとあり。ガワラは其の傑作「コンフレーション、アマンチス」をもて名を知られ、ラングランドは其の作「ビヤース、ゼ、プローマンの夢」物語にて、バーボアは一、二の史詩によりて其の名を傳へたれど、ラングランドを除くの外は、別に創才の認むべきものなく、其の詩文上の位置はチーサーに比して尙かに下れり。ガワラが作「コンフレーション、アマンチス」の趣向は懺悔をつかさどる僧が、一情郎を訓誨せんが爲に、くさくさの物語をす、といふにありて、大體は「カンターベリ」物語にひとしき物語集たるに外ならぬを、作者の手腕も、想像も、いたくチーサーに劣りたれば、物語しばしば、平板に流れ、剩へ、純然たる箇々別々の小話となりたり。

ラングランドの傑作「ビヤース、ゼ、プローマンス、ドリーム」は、例の夢物語の趣向なり。「ビヤース」は近世語に謂ふピーターの義にて、人名なり。「プローマン」は農夫の義なり、即ち作者が此の假名を戴きて此の篇の主人公となれる

なり。此の作の筋立は、はゞ『夢想兵衛蝴蝶物語』などにひとし。作者が五月のあるあした、マルブーンが岡にてうたゝねしたる間に、二十種の夢を見る、といふが發端なり。其の着想はパンヤンの『天路歷程』に似たり、即ち本幹は宗旨上の隱喻物語にして、其の裏面には作者か貧富の不平均、教會の陋習等に對する憤懣の念を漏せるものにして、作者の意はウイックリフにひとしく宗教政治の改善にありしこと明かり。其の詩としての價値は兎も角も、其の人心に於ける影響は頗る大なるものありき。件の詩篇は、未だ脱稿せざるうちに、各處に傳唱せられ、且つ十六世紀の始まで棄てられずして讀まれたれば、其の實際に世間に向ひて宗教改革を鼓吹せし力は、或はウイックリフにも劣らざりしならんか。

この物語は全篇に通じて句數七千餘あり。サクソンぶりの二昂音と頭韻とを用ひて作れるは、此の作を以て名残とす、而も其の最も整頓せるものと稱すべし。尤も頭韻の法は十六世紀頃までも傳はり、尙それより後の代にも、上流婦人の言語には、一種の修辭上の遊戯のやうになりて行はれき。

ラングランドの傳は詳かならず。紀元後一千三百三十二年にシユロップンヤ

ヤ州に生れて、同一千四百年に歿したりといふ説や、確實なるが如し。(我が頼阿法師、二條良基などよりも二三十年の後なり。かの夢物語の、初めて世に出でしは、一千三百六十二年頃にして、未完のまゝにて處々に傳寫せられしを、ラングランド後に追加して同九十年に至りて完結しきといふ。總じて詩的想像の妙味は、チーサーが作に比ぶべくもあらねど、當代の暗黒面を髣髴せしむるに足る其の内容は、彼のチーサーが作の樂天的、光明的なると相對照して倫理史、風俗史上の價値あり。加ふるに其の頗る複雑なる隱喻體は、後のスペンサーが『神女王』の先驅とも見えて興味あり。

さて、この歌の體に倣ひて『ピヤース、ゼ、ブローマンズ、シリード』『ピヤース、ゼ、ブローマンズ、テール』など同様の名を冠したるもの、二三種續き出でしかど、いづれも靡筆俗想、取りいで、いふに足らず。

ジョン、デ、ト、レ、ギ、サは、チエヌスターの僧にして、ラルフ、ヒグデンが著せる羅甸文の『列國史』を翻譯して譽を一世に得、またジョン、マンド、ギ、ルは、三十四年間海外に漫遊し、歸國の後、羅甸文をもて一大紀行を綴り、更にそを佛文と英文とに翻譯して世

に示しき。

此の書は主に基督が靈跡ヂエルサレムに到る道路の案内を明にしたるものなれど、作者が漫遊中に見聞せる事物をも悉く併せ録したれば、極東は支那地方のことにまで及び、信すべからざる荒唐なる怪談奇話をも錯綜して叙説せり。按ふに、當時にありては極めて珍しき著述なりしなるべし。マンドギルは、往々英國散文家の祖として、ウイックリッフと併稱せらる。彼れが英文の特質は多く佛語フランス語の素を交へたる所にあり、概して一百語につきて十二箇の佛語を用ひたり。學者の説によれば、佛蘭西語の英國に入りたるは第十四世紀を以て最とし、千四百個の佛語は此の作者のみによりて英文の通用語となりきとぞ。これによりてもマンドギルが紀行の當代に勢力ありしことを見るべし。

第七章 ナーサーの死後一百年

模倣時代—詩歌—ヤン、リドゲート—蘇國詩人—散文—カックス
トン—印刷術の輸入—古文學研究熱—圖書館の設立

ナーサーの物語歌、ラングランドの宗旨歌いで、のち凡そ一百五十一年間は、英國文學の最も振はざりし時代なり、語を換へていへば、一千四百年に斯道の曉星ナーサーが消滅してより、一千五百五十二年に第二の大詞宗、エドマンド、スペンサーが生まれ出づるに至るまでは、此の國の詞壇寂寥として一人の創才をも生ぜざりき。就中、ナーサーの死後一百年間、我が朝後花園、後土御門、兩帝の間、一條兼良の生誕より宗祇法師の入寂に至るは、大禪宗出世の後にありがちなる**專念模倣の時代**なりき。

ナーサーが擧に倣ひて物語歌を作りしものは夥多ありしが、能く彼れに及べるものは絶無なりき。其のうちや、名を録するに足るは、ナーサーが友たりしトマス、オックリーヴとヤン、リドゲートの二人ならん、二人ともに一千三百七十一年に生まれき。リドゲートは『カンターベリ物語』の補遺として『Story of Thebes』といふ物語歌をもつて、多少其の詩才を顯はしたれど、もとより續貂に過ぎず。此のころ蘇國スコットランドには却りて二三の名家ありき、蘇王、デームス一世の如き、ウイリヤム、ダンバーの如きは、多少創才ありし詩人なり。中にもデームス一世(一三九四—一四三七)

*James I.

*Lydgate.

に示しき。

此の書は主に基督が靈跡ヂエルサレムに到る道路の案内を明にしたるものなれど、作者が漫遊中に見聞せる事物をも悉く併せ録したれば、極東は支那地方のことにまで及び、信すべからざる荒唐なる怪談奇話をも錯綜して叙説せり。按ふに、當時にありては極めて珍しき著述なりしなるべし。マンドギルは、往々英國散文家の祖として、ウイックリッフと併稱せらる。彼れが英文の特質は多く佛語ボカリスの素を交へたる所にあり、概して一百語につきて十二箇の佛語を用ひたり。學者の説によれば、佛蘭西語の英國に入りたるは第十四世紀を以て最とし、千四百個の佛語は此の作者のみによりて英文の通用語となりきとぞ。これによりてもマンドギルが紀行の當代に勢力ありしことを見るべし。

第七章 ナーサーの死後一百年

模倣時代—詩歌—ヤン、リドゲート—蘇國詩人—散文—カックス
トン—印刷術の輸入—古文學研究熱—圖書館の設立

ナーサーの物語歌、ラングランドの宗旨歌いで、のち凡そ一百五十一年間は英國文學の最も振はざりし時代なり、語を換へていへば、一千四百年に斯道の曉星ナーサーが消滅してより、一千五百五十二年に第二の大詞宗、エドマンド、スペンサーが生まれ出づるに至るまでは、此の國の詞壇寂寥として一人の創才をも生ぜざりき。就中、ナーサーの死後一百年間、我が朝後花園後土御門兩帝の間、一條兼良の生誕より宗祇法師の入寂に至るは、大禪宗出世の後にありがちなる **專念模倣の時代** なりき。

ナーサーが盤に倣ひて物語歌を作りしものは夥多ありしが、能く彼れに及べるものは絶無なりき。其のうちや、名を録するに足るは、ナーサーが友たりしトマス、オックリーヴとジョン、リドゲートとの二人ならん、二人とも一千三百七十一年に生まれき。リドゲートは『カンターベリ物語』の補遺として『Story of Thebus』といふ物語歌をもつて、多少其の詩才を顯はしたれど、もとより續貂に過ぎず。此のころ蘇國スコットランドには却りて二三の名家ありき、蘇王ジェームス一世の如き、ウィルヤム、ダンパーの如きは、多少創才ありし詩人なり。中にもジェームス一世(一三九四—一四三七)

*James I. *Lydgate.

は十五世紀中第一に位する詩才の人にして、其の傑作『King's Quhair』(King's Book)に用ひたる七行體の詩格の如きは『王家調』^{ライノイナ}と稱せられて永く後世に傳はりぬ。

さて散文界にて記憶すべきは、國文にて『專制君主政治と有限君主政治との別』^スと云ふ書を著し、士爵ジョン・フォンテスキュー(一四三一—七一)デニンソンが『Idylls of the King』と云ふ歌の種本となりし『Le Morte d'Arthur』(アーサーの死)といふ物語集を綴りし士爵トマス・マロリ並びにウィルヤム・カックストンなどなり。

此の三人のうち、カックストンは、はじめて此の國に活字印刷の術を輸入し、文運復興の端を發さしものにて、一千四百二十二年に生まれき、ロンドンの商賈なり。カックストン、中年屢々海外に遊び、日耳曼國にてはじめて印刷術を學び、深く其の利便なるに感じ、大に此の術を應用せんと企て、最初はベルジヤムなるブルーズの地に、後には、コーロンの地に印刷所を設けて、漸次に出版の業に着手せり。されど此の業の英國に行はるゝに至りしは、一千四百七十四年をはじめとす、即ち日耳曼人が活字を用ふることを發明せし後凡そ三十一年なり。(我が應仁亂平定の後一年、即ち文明六年に當たる)。

*Caxton.

英國にての最初の印刷所は、今のウェストミンスター院の近傍にありき。はじめて印刷せられしは、我が象棋に類したる遊戲の指南書なりしが、おひ／＼に有用なる書類をも刊行するにいたりき。されど、一方に於ては、宗旨上の議論かしましく、一方に於ては、荒唐なる傳奇小説を喜ぶの念いまだ衰へざりしかば、當時印刷せられしは、概して宗旨の書と傳記類となり。チョーサー、ガワール、リドゲート等の傑作も、此の際多く印刷せられて後世に傳はりたり。一千四百七十一年より同九十一年までに印刷せられし書は、六十三種以上なりきといふ。而して此等の書の多數は佛蘭西又は羅甸の書の翻譯にて、カックストンがみづから物せしもの多かり。一千四百八十二年に彼れが再譯して出版せし『列國史』は、例のヒグデンの『ポリクロニコン』にて、嘗てトレギサが翻譯せしものゝ再譯なり。トレギサが彼の書を譯せしは、一千三百五十年にて、此の時をさること僅に百三十年ほどに過ぎざりけれど、國語の變遷の頻りなりしが爲に此の舉ありき。言文二途の國にては、かゝる必要をおぼゆること稀なれど、他の國の文章は、言文一致なるだけに、百餘年を経れば、殆ど解すべからざることを問ふあるなり。

要するに、印刷術の輸入は、後のエリザベス文學を誘致すべき一大遠因なりしと疑ひなし。チャーサー死後の百餘年は、實に名高き薔薇亂の起りし時代にて、さうぬだに民心一日も安ぜざりしに、一方にては、宗教改革の氣焔漸く盛になりて、物情騷然たりしかば、皮相より觀れば學問の道は地を拂ふべかりし筈なれど、實際はさもなくして、却りて古文學の研究盛に行はれき。是れ、一は印刷術の便宜に由り、一は當代の大勢の然らしめし所なり。もとより第十五世紀の末三分の二の間には、創作と稱すべき詩文の寥々として晨星の微なるにも似たりしとは事實なれど、文學研究の熱度はなかくに舊に倍し、ヨオク家とランカスター家との間に起りし系統の争は、前にいへる薔薇亂の慘劇を讓し、我が南北朝の争亂にひとしく、此の國の全局を騷擾せしことも事實なれど、書を讀み文をもてあそぶの心は、毫もこれが爲に減ぜざりき。現にヘンリ六世王、エドワード四世王をはじめとして、當代の諸侯のうち、深く書を好み文を愛せしもの夥多あり、例へば、グロースターの公爵ハムフレードのときは、領内處々に圖書館を設立し、わさ／＼伊太利より博學の士を招聘し、盛に希臘の古書を譯せしめき。又ウトスター伯ヂェン、ランコンの

僧ロバート、フレミングなどは、頗る傑出せる宏學の士にて、みづから希臘羅馬の古書を翻譯し、若しくは世に稀なる謄寫本を蒐集して、英國の圖書を増加せしこと尠少ならず。而して、此の古學熱の漸く此の國に盛ならんとせし時に當たりて、所謂學藝復興の大勢、伊太利地方に發源して、不學蒙昧の堤防を破り、英國の文壇に傾瀉し來り、浸潤すること五十年にして、遂にエリザベス朝の盛大なる文學を生むに至りぬ。

第八章 文運興隆の遠因

歐洲の暗黒時代——當代の社會——其の反動——宗教革新——ルチッサン
ス(學藝復興)——英國の狀態

按ふに、英國文運の興起せし近縁は主として内國の狀態に存じきと雖も、其の遠因は歐洲大陸の大勢にありきといはざるべからず。所謂大陸の大勢とは何ぞ。絶望厭世の色を帯べりし中世的想念の反動と、宗教革新と、學藝復興と、此の三大勢の結合是れなり。

之れより先き一千年間、即ち古羅馬帝國瓦解して列邦競起し、骨肉相嚼み、君臣相殘

ひ、虎視狼貪、ひとへに武力のみをもて最大の権理としたりし中古時代は、基督教が其の間に希望の教を説きて人間の墮落を救はんと力めたりしにも拘らず、慙くとも現世間、即ち現在の生活に關する限りの世界は、漠々濛々たる絶望の雲霧に掩はれたりし時なり。「人間は日を透うて墮落し、社會は年と共に澆季となりゆく」といふ感想は、この一千年間の諸國民の脱せんと欲して脱する能はざりし所なりき。當時の哲學者は論ずらく、人寰は穢土、苦海、救ふべからざる魔國なり、之れに處するの方は、冷然として無頓着なるか、幽玄なる神秘説に安立するか、まからざれば未見の天上生活を頼みとして現在の穢界を脱離せん日を俟つにあるのみと。かゝる淺ましき社會の有様なりしかば、彼の希望をもて生命とせる基督教會の識者すらも、現在の世間には希望の影を求めかねて、只管に他界の生活を推薦せしかば、現に紀元後第一千年の如きは、當世の俗衆皆妄信すらく、全世界ごとく壞滅して、宇内の組織は根柢より革新せらるべしと。我が源平盛衰後の闇澹にも彌増したり。詢に中古時代の大半は、恐怖、悲愁の時代にて、人間の悅樂は悉く頼むべからずとして抛擲し、未來の靈界の來らん日を、惴々として懊惱惆悵の中に追求せし時代なり。

然らざる者は徒らに懷疑し、妄に天、人を嘲侮し、或は肉昧の樂欲に是れ耽りて空しく醉生夢死したりし時代なり。其の先覺と稱すべきものだけ、人生をもて假の宿となし、人類をもて穢土の旅客となし、人間の悲喜哀歎に對して何等の温き同感を抱かざりしものゝ如し。其の最も重んぜしは、ひとへに未來の靈界なりき。彼等のまかすがに人生を棄つる能はざりしは、靈界に到るべき唯一の通路の、ひとりにのみ存したるを信せざるを得ざりしに因るのみ。

思想界の紛亂既に是の如し。第四世期の末に及びては、基督教の如きも生命なき信仰となり、其の弊風年を透うて増長し、道教の柱石たるべき教會は、虚儀空文の叢窟となりて、法權の毀斷、聖書の禁讀、宗教裁判、贖罪書など、あらゆる腐敗の行はるゝ世となりければ、人心こゝに萎縮し、神氣こゝに昏睡し、煩瑣なる註疏の外に哲學といふものなく、拙劣なる摸倣の外に詩文といふものなく、人類の多數は殆んど自動器械たるに他ならざらんとせり。

まかるに、十五世紀の末に至りて、天下の大勢俄然として一變し、基督教會の腐敗は、其の反動を呼び起こし、コンスタンチノールの滅亡は古學の伏魔洞を裂開し、亞

米利加新大陸の発見は全歐の視聽を震駭し、印刷術の發明は思想の弘速を速にし、見聞を擴張し、希望を増加し、世間の愛すべきを感せしめ、生活の悦ばしきを覺えしめ、肉體の樂みの限りなきを示し、人生の必しも穢土にあらざるを證し、地獄、極樂のひとり他界にのみ存せざるを暗示せしかば、數百年來の絶望の反動は未曾有の勢力をもて全歐洲を震蕩しき。

蓋し、マルチン・ルーテルが九十五ヶ條の告文をキッテンベルヒの門に貼付して**宗教革新**の端を發きしは紀元一千五百十七年にして、英のウヰックリフがロンドンにて宗教上の裁判をうけし時よりは百四十年の後なり。ルーテルが反抗の強大なるを得しは、畢竟社會の同感の強大なりし證據にして、時機はこゝに成熟し、革新の素願はこゝに達せられき。さて、其の影響の多様なりしや、實に驚くべきものあり。例へば(一)法王の直轄ならぬ限りは、各國ともに、政治と宗教との分離を生じたる(二)靈界俗界の分界生じ、隨うて人々幾分の自由を心身上に感ずるに至りたる(三)神學が繁擗なる儀典を離れて世道人心の本義に直接するに至りたる(四)教祖の福音が下級細民にまでも傳へらるゝに至りたる(五)新舊兩教徒が幾度か實際問題

に觸れて論争し、こゝに頭腦の頭腦を一洗するの機を得たる(六)就中、舊教派を刺激して大に其の内部を改善せしめたる等、一々枚擧すべからず。而して此等の事情が更に社會萬般の發達の上に影響せし度合は實に量り知るべからず。要するに、人心こゝに生氣を得、社會はこゝに流動の氣運に入り、天下を舉りて自覺の境に向はしめき。たゞそれ自覺せり、故に先づ人間行爲の歸趨を討究し、個人對上帝の依信を定め、こゝに安立の地と善行の標準とを得たりしなり。然り、情界の満足は既に得たり、彼等は更らに知界の満足をも得んと欲し、冷く外界に向ひて研究の歩武を進めんとせり。

恰も好し、學藝復興の潮流は以太利より發源して西北に漸進せり。佛蘭西、西班牙、英吉利等の諸國は、印刷術の便を借りて、悉くこれを收容し、かくて豊かなる新知識と豊かなる新好尚とを全歐洲に瀰漫せしむるに至りぬ。所謂**學藝復興**とは佛語「ルネッサンス」(new birth)の謂にして、其の由來は、土耳其蠻族が屢々東羅馬帝國を侵し、其の領域を蠶食し、竟に其の首都コンスタンチノープルを陥れたるにあり。東羅馬帝國又の名希臘帝國とも稱す、當時學問藝術の淵藪たりき。さるから

にコンスタンチノープルのおちいりしや、希臘帝國の治下にありし多數の學者、詞客等は、皆急に亂を避けて、伊太利に走り、さて其の生計を維持せん爲に、競うてフロレンスの諸賢にて専ら古文學を講じたりき、而して此の事ゆくりなくも蒙昧不學の雲霧を拂ふ學問の曙光となりしなり。此れは是れ千四百五十三年、足利義政治世、應仁の亂より十四年前以後のことなり。

是に於て、ブレト、アリストートル等の哲學、科學、能辨の諸書よりホーマー、ゾージル等の詩歌に至るまで、いづれも温古知新の材料とならざるはなかりき。恰も是れ長夜の困夢俄かに破れて、眼こゝに豁然たるが如く、或者は新學によりて萬象の品々然たるを觀、或者は新教によりて天地の長へに安きを察し、或者は古詩歌によりて宇宙の限りなく美なるを觀じき。

而して、英國に於ては、前にも述べし如く、薔薇亂正に終りて、國內漸く昌平、人心治に安んじて業に力め、漸く文藝に近づきし時なりしかば、學者は争ひて古學の研鑽に従事し、或は遠く伊太利に學遊して、親しく古文學を學習し得て歸るなど、其の結果年を経て次第に現はれ、希臘、羅馬の名著は陸續として英文に翻譯せられ、後の諸

創作の好標本を作りき。皆是れ新思想、新想念の開發となりたるものなれば、エリザベス盛朝の文學の如きも、畢竟は此の標本製作時代に胚胎せしものなりといふべきなり。

第九章 ヘンリ八世の朝

ヘンリ八世と國文學——古文學研鑽——當代の散文——トマス、モリアー
——「ユートロピヤ」——ウイリアム、ナンテール——聖書の翻譯——當代
の詩歌——スケルトン——蘇國の詩歌——リンドセイ——トマス、ワイヤ
ットミサリ伯——新詩體——無韻律語

ヘンリ八世 王はスチュワート系統第二の君にて、エリザベス女王の父なり、千五百〇九年位に即きぬ。我が後柏原天皇の御宇足利義植復任の第二年に當たり。王は學を好み文を善くせり。ルーテルが宗教改革論の強盛なりしや、王一篇の辯難文を作りて大に新教を破す、羅馬法皇其の功德を稱美して王に贈るに「教會の干城」といふ榮號をもてしき。王の朝は獨逸なる宗教改革の潮流の、漸く英國に注入せんとしたりし時期なるが、此の際、文學もまた一百年間の懶眠を破りて、大に興起せんとせる姿ありき。現に、一千五百年より次第に宗教革新の機運の盛になりし、一千

五百十七八年の頃までに、高等學校の新設せられしもの、二十個所に及びしをもても、教育講學の盛大なりしを見るべし。此のころ、有名なる和蘭の碩學、デシデリヤス、エラスマスの、佛のバリーより、此の國に來遊して學問を奨勵するあり、且つ宰相ウルジの、大に公財を擲ちて、講學の便宜を補くるなどのことありて、**古文學**研鑽の道次第に弘通し、ケムブリッジの大學の如きも、チーク并びにスミスといふ兩學者の盡力によりて、此のころ大に發達し、甚くとも希臘文學の講習に於ては、オックスフォード大學をすら凌ぐに至りき。さて、此の新學問の太氣のうち、最初に發育せしものは**散文の文學**にして、其の最も卓越せる代表者を士爵トマス、モリアとす。

士爵トマス、モリアは、チーサーの生誕後一百四十一年に、英京ロンドンにて生まれたり。十五歳の時、カンターベリの監督たりしジョン、モルトンの侍童となり、其の庇によりて、オックスフォードの大學に入り、此の國にて始めて希臘語を教へし學者、グローシンといふに従ひて、古文學を修め、彼の碩學、エラスマスとも屢々交遊し、其の後大學を去るに及びては、在家僧となり、法律家となり、狀師となり、法學講師と

なり、ロンドンの判官代となり、衆議院議官となり、竟には衆議院の議長となりき。かくて、ヘンリ八世の御宇に至りては、次第に登用せられ、終に最高法官の榮職にまでも經登りけるが、史に有名なるアーン、ブーリン女に關する結婚上の紛議起るに及びて、ヘンリ王の忌諱に觸れて、辭職し、後更に王の爲に憎まれて、咎を得、罪なうして、斬に處せられき。時に千五百三十五年六月なりき。(我が後、奈良帝の天文四年、西三條實隆の薨去の前二年に當る。)モリア爲人、廉正高潔、學博く、才秀で、而して胸懷頗る洒落頓才に名ありき。傳へていふ、彼れの將に斬首せられんとするや、莞爾として刑吏を顧みて曰はく、此の髻何等の罪もなきに、主と共に斬られんと、憫れむべし、しばらく猶豫を與へよとて、徐に長髻を搔きのけて、やがて從容として、斷頭臺に其の頭を横へきと。以て其の死に臨めるまでも、酒々磊々たりしを見るべし。

モリアが著作の中最も重立ちたるは、千五百十三年に物しきと傳へたる『エドワード五世紀』と『リチャード三世紀』となり。件の二紀の材料は、監督長モルトンが供せしにて、原史とも稱するに足るものなれば、にや、多少の甚しき政治上の偏見の爲め

に事實の謬寫せられたるにも係らず、學者大抵此の二紀を稱美して、眞の英語もて綴られたる最初の正史なりとせり。ハラムの如きも、此の二紀の文章を評して、善良なる英語の最初の模範なりとし、純正明晰、精選なる文字、卑野の嫌なく、術學の弊無しとたゞへたり。蓋し、當代は古學流行の初期なりし故に、世に出づる著述、動もすれば羅甸文學の要なき引抄を以て充塞せられ、さなきだに幼稚なりし國文、國語は爲めに其の發達を遲滯せられんとせし時なりしに、ひとりモーアの作のみはこれら浮誇術學の醜をまぬがれて、純粹の國文を發揮したるが故なるべし。シェークスピアの史劇「リチャード三世」は、全くモーアの「リチャード三世紀」を基礎とせるなり。千五百十六年に至り、モーア更に一書を著し、「ユートーピア」と題し、モーアの最も善く後世に知られたるは、此の「ユートーピア」によりてなり。此の書はもと羅甸文にて物したりしが、千五百五十一年に至りてラルフ、ロビンソンといふ者之れを英文に譯して流布せしめ、今廣くもてはやさるるは、此の譯書なり。そも「ユートーピア」とは希臘語にて「あらぬ處」といふ義なり、蓋し、作者は此の無何有郷をもて一種の理想的共和國を代表せしめ、やゝ小説めく筆法をもて、仔細に理想

的制度、文物、風俗、人情を狀寫せるなり。

ユートーピアといへるは、半月形をなせる孤島にて、長さは二百英里、市の數は五十有四、家はいづれも大きさを同うし、いづれの家にも廣き庭園あり、住むこと十年にして總更替を行ふ。島中いづこにゆくも酒樓といふものなく、狀師といふもの無し。又流行の變易といふこと無く、虚飾の行はるること無し。粧飾用の珠玉又は浮靡華麗なる綺羅を着するとは、ひさり幼少の間のみ行はれたり。又人々皆寡欲にて、敢て奢侈贅澤を願はざれば、島民が一日の勞働時間六時に超ゆるの必要なし。富豪は狼をみづからせて之れを屠丁に一任す。戰爭は流石に絶えたるにあらねど、將軍は人を殺すことの恐くて勝利を得るをば最も大なる譽とせり。金銀珠玉に心を牽かるゝもの絶えて無し。罪人も死刑に處せらるゝこと曾て無し、彼等は皆奴とせられて傭役に従事す。彼等は或特殊なる衣服を着す、其の耳の端を切り取られたるが罪人の證なり。されどほしいまゝに逃走する時には刑せらるゝことあり。宗教は總じて自由なり、云々

以上は大略の大略たるに過ぎざれど、はのかに作者が理想をば察するに足るべし。要するに、此の作は、ブレントーが「國家論」に思想の骨子を傳來りたるものにて、兼ねて十六世紀の時勢を消極、積極、兩面に反映せるものといふべし。按ふに、當代の著書尠からずと雖も、モーアが「ユートーピア」は、とに當代社會の弊習を諷示せるものは

なく、モリアが『ユードーピヤ』ほどに當時の新學問が喚起せりし生活、社交、政治、宗教、等に關する諸種の新聞題と新想念とを著く反射し得たるものは殆ど無し。又理想國を想像して狀寫せるものは、東西古今に其の例あまたあれど、英國にてはモリアのを最も古しとす。されば、この作は、文學者以外、社會學者などの頗る注意する所となれり。所詮『ユードーピヤ』は英國に於ける政治的傳奇の濫觴にして、後年ス・井フトは其の諷刺體の作に於て多くモリアが故智を學びたり。モリアが作は、以上の外に、小品文數篇あり、多くはルーテルが新神學を批難せるものなれど、ここには擧げず。

モリアが散文に於ける功業は以上の如し。併しながら英國散文のかく俄かに進歩せしは、一は國王ヘンリ八世の保護獎勵の餘澤なりといふべし。佛の史家フルワザールの有名なる封建期の歴史をバーナーズ卿をして譯せしめしも、王なり、又教育制度の改善に就きて士爵トマス、エリオットを扶助し、且つ不學蒙昧なる國俗を樂しません爲めにとて、専ら俗語をもて著述することを同じ人に勧めしも、王なり。或は古學家リランドを獎勵し、或はロージャ、アスカムを外國に遣はして新

知識を英國に輸入せしめしも、また王の意より出でたり。アスカムは當代屈指の古文學者にて、後に有名なる『學師』といふ書を著し、者なり。ヘンリ八世の朝に至りて、新學問の氣焰上にいへる如く盛なりしが、新舊兩教の軋轢の漸く酷しきに至りしや、學問の進歩又まばらく停滯せり。されど、又一方より見れば、彼のウイラム、チンダルが『新約全書』を翻譯して、千五百二十五年、英語の確然たる基礎と標準とを定むるに至りしは、其の實此の軋轢の結果なれば、伴の宗教上の鬭争も強ち文學の發暢を妨害せしものとはいふべからず。

チンダル（一四八四—一五三六）は當時の散文家中に錚々の譽ありしものなり。嘗て日耳曼に遊びてルーテルと會見せし時、話次聖書のこと及びて聖書は教會の專有すべきものにあらざる由を感じ、やがてかなたにて筆を執りて『新約書の翻譯』に着手し、さて十餘年にして成功し、はじめはキッテンベルヒにて上梓せしが、ヘンリ八世王が羅馬法王と隙を生ずるに及びて、始めて英國にて出版しき。マールシは彼れが著を評して曰はく、チンダルが『新約書』の翻譯は第十六世紀の初半に於ける最も重要な言語學上の紀念碑なり、否、或ひは、チーサーとシエーンスピヤ

との間に現はれたる最も大切な紀念碑なりといふを得べし。第一に、歴史的遺物として大切な第二には英語もて神聖なる『バイブル』を翻譯するの格式を定めたるが故に大切な第一。一千六百十一年に成りし『聖書』の翻譯の最良なる形質は總じてチンダルの翻譯に由来したり。云々と。チンダルの用語はいづれも皆通俗平易なる英國語なり、羅旬語をも、佛蘭語をも力めて避けたり。彼れの文章と近世の英文とを對照するに、其の相異なる所は殆ど綴字法にのみ限られたりといふを得べし。左に其の例一二章を掲ぐ。

A certayne man descended from Jerusalne into Jericho and fell into the hondes of theves whych robbed him off his reyment wonded hym and departed levyng him halfe deed.
And yt chanced that there cam a certayne preste that same waye and hym passét by.

按ふに綴字の相違は、猶我が假名遣の相違のごとし、外面のみを見ればチンダルの文と近文との間にはいと著き相違あるが如くなれど、文脈、語格の上より見れば二者殆ど相異なる所なからんとす。而して件の翻譯は廣く當世に行はれたりしものなれば、其の直接并びに間接に、英語、英文の上に及ぼし、影響の甚少なざりしこと想見するに堪へたり。

さて、此の時に當たりて、**詩歌**世界の模様はいかなりしか、といふに、韻語は尙依然として不振の姿なりき。己に前にもいへる如く、大詩人チャーサー去りて後はまた彼れに及ぶべき俊豪のいづると無く、偶々英才のあらはるゝとありしも、彼等は皆徒に舊套を襲ひて只管にチャーサーの驥尾を追へりき。ヘンリ七世王の朝に名聲ありしスチーヴン、ハウエス、并びにジョン、スケルトンの如きも總じてチャーサーの摸倣者なり。

ジョン、スケルトン(一四六〇——一五二九)は、中ごろ宗教改革の風潮に鼓吹せられ、飄然覺悟する所ありて、更らに一家の機軸を出だし、専ら宗旨上の自由を歌ひしが、其の作漸く諷刺に傾きて、詩歌の本領に遠きかりしかば、竟に眞詩人たる能はずして止みき。其の作のやゝ見るべきは『Colin Cloute』一篇のみなり。

此の際**蘇國の詩歌**は日々發達の運に向へり。蘇國はもと英國に同じくケルト種族の棲める國なりしが、サクソン族の英に入りし後は、英蘇の差別やうやく著くなりゆき、隨うて彼等の作る所の詩歌と英國のとは頗る相異なる質を具ふるに至りき。其の一因は人情習俗の相同じからぬに在ること勿論ならぬ、一は彼の

國民の愛國心のいちじるく強かりしゆゑなるべし。接ふに蘇國も英國も元は共に獨立の王國なりしが蘇は動もすれば英の爲に凌虐せられて自由を失ひしことも間々ありしかば彼れが自由獨立を重ずるの念はおのづから一層深かりしなり。是れ或は幾多有爲なる詞傑を此の國よりいだし、所以ならんか。其のはじめは蘇の詩人も大抵はチャーサーの模倣者たるに過ぎざりしが有名なる士爵ダグド、リンドセイのいつるに及びて、詩歌の新天地にはかに開かれ、それよりこのかたますます進歩の運に向かひき。

リンドセイ(一四九〇—一五五七)には種々の作あり。リンドセイは英のスケルトンと同じく、宗教上の自由の爲めに唱歌せしものなり。其の作にて優れたるは『The Dream』、『Three Estates』、『Monarchy』等なり。リンドセイとスケルトンとは、只管宗教上の事に熱心なりしあまり、兎角に詩歌を教化の機關の如くになし、それが爲に詩歌の本領をそこなひし趣あり、これ蓋し此の二人が秀でたる詩才ありながら、竟に大名を成し得ざりし所以なるべし。二人共に『生活を質素にして思念を高上にすべし』といふ旨を歌ひしなり。

さるはどに、ヘンリ八世の御宇の末に至りて、時機漸く熟して二人の新詞傑世にいたり。士爵トマスワイヤットと、伯爵サリ伯と、是れなり。

ワイヤットとサリ伯とは、二人ながら當代の縉紳にて、共に久しく伊太利に遊びて、かしこの新詩風に薰染し、其の本國に歸り來しや、大に新體の詩の興さるべきを唱へ、詞壇の革新に従事し、みづから其の率先者となりしものなり。近世に行はるゝ律格は、概して此の二人の創始せし所なりとも言ふを得べし。二人共に抒情詩風の作に秀でたり、ワイヤットの作は深沈にして嚴格、サリのは快活にして優婉なり。彼等の創唱せし詩歌の新體は所謂 Amourist Poetry (戀の歌)なり、即ち、其の主題は男女の相思、其の中に含まれたる觀念はプラトンの哲理、其の師表は伊太利の詞宗ペトラルクなり。彼等が一たび此の戀歌の緒を發さしや、此の體一般に流行し、其の響に倣ふもの輩出せり。ワトソン、シドニ、シェークスピア、スペンサー等の十四行體は、總じてサリ等のと同旨同格のものなり。さて、ワイヤットとサリとの功績はたゞ上にいへるのみにはあらず、就中、サリの如きは伊のブーシルの『エニヤス物語』を翻譯するに當たりて、其の第二篇と第四篇とに於て十音の無韻律語を創用

して律語の自由を擴張するの緒を發きき。たゞし、サリの用ひたる無韻律語は甚だ亂雜なる者なりしと勿論なり、されど其の後、彼のガスコインが之れを其の諷刺詩に應用し、マローが其の傑作『タムバレーン』の劇に利用し、又シェークスピア、ポームント並びにマッシュジャーが之れを其の脚本に於て如意自在に使用するに及びて、驚くべく便宜なる一種の格式となりぬ。さりながら、其の正當の敘事詩、抒情詩に於て巧妙自在に利用せらるゝに至りしは、ジョン・ミルトンいで、後のとなり。之れを要するに、サリとワイヤットとは剣才の詩人としては大に重するに足らざるべけれども、其の殆ど一定の詩律の無かりし時に生れて、ほゞ調律の格式を整頓し、且つ詩人の着想を一變せし功は没すべからざるなり。蓋し、此の二人以前の詞壇に於ては、寓意、比喩の詩歌のみ盛に行はれ、偶々男女の戀愛を歌へる者なきにあらねど、彼等は皆中古時代に行はれたりし通有の人情をほのめかしたるものにて、活きたる感慨といはんよりは、むしろ抽象的人情、抽象的戀愛に種々の彩色を施して表現せる者ともいふべし。換言すれば、活ける個性パーソナリティなきいふもの殆ど感興の詞句の中に見えざりしなり。酷評すれば、彼等が作の多數は我が衷心の誠を表白せず

してむしろ在り來りの人情を歌ひたる趣あり。サリとワイヤットとの相思歌は然らず、直に我が衷心の苦惱を吐き、思はぬを思ふ哀れを歌ひ、聴く者をして、何々言々悉く血肉かと思はしむるの概あり。すなはち、サリ、ワイヤット以後の英國の詩歌はやゝ寫實の傾向を帯び來れり、妙くとも、個性を表示するを旨とするに至れり。ワイヤットは紀元一千五百三年に生れて同四十二年に没し、サリ伯(姓名Henry Howard)は一千五百十六年に生れて同四十六年に没しき。我が室町時代の末葉、守武、宗鑑等と同年代に當る。

サリ、ワイヤット以後、チャーサーを模倣する弊やうやく滅びて、こゝに詩歌の氣運一變するに至りしが、エドワード六世の朝とメリ女王の朝とは、宗教上の紛擾甚しく、且つ之れに對する政府の處置殘酷を極めしかば、詞壇の進歩はた之れが爲に障礙せられ、再び停滯の姿ありき。さはれ、そは只一時の妨害たるにとゞまりたり、一千五百五十九年にエリザベス女王の位に即くや、恰も陽氣の來復を待てりし春林の百花の如く、詩歌文章一時に煥發し、こゝに古今無比の偉觀を現じき。次々に説く所を見よ。

第二篇 エリザベス朝の文學

第一章 緒論

女王エリザベスの治世——國力の膨張——當代の國俗——大自由の時
代——美醜の混淆——演劇的社會

エリザベス朝新文學興隆の大因の、遠く全歐の社會的大變動にありしことは、既に前篇に述べたるが如し。而も此の歐洲的大變動の影響は、國々の状態によりて其の量と質とを異にせしが故に、以太利にてはアリオスト、タッソーを出だし、佛蘭西にてはマローとラブレールを出だし、葡萄牙にてはカモエンスを出だし、西班牙にてはエルシラを出だしき。さて、英國にては、これら諸名家に後るゝこと數十年にして、スペンサー、シークスピアをはじめシドニ、ローリ、マロー、ベーコン等の大文豪を出だし、一躍して世界文學の頂點に立つに至りき。この文學上の偉現象は明かに英國に於ける當代の大勢に淵源せりといひて可なり。

案ずるに、女王エリザベスの治世の間は、英吉利の國運が暴かに興隆せし時なり。

エドワード三世、ヘンリ八世の御宇の頃より漸次に膨張し來りし國力、今や大亂後の昌平に遭うて更に一段の充實を加へたり。大海嘯の勢を以て奔瀉し來りたる古學復興の潮勢は、貴族の保護推奨と國民の苛求熱需とに助けられて益々學者の研鑽を促し、刻々時々新思念、新想像を注入し、以て國民の精神を富ましめ、加ふるに大陸にて成就せられし宗教革新の結果は、彼等が安立の所依を定むると共に大に彼等が勇猛精進の志氣を鼓吹したり。これと同時に政治上に於ては、國皇エリザベス陛下に對する三回の逆謀は大事に至らずして挫敗し、國皇の敵、蘇國のメリは脆くも刑場の露と消えにき。英國々教の大敵たりし西班牙フィリッパが無敵必勝の大艦隊は、神風の不可思議なる助によりて、英國の灣頭に粉碎となりにき。英國の威武はさながら大陽の天に沖するが加くなりき。加ふるに、幾多の冒險家者流は、千萬里の海外に航遊して、異を探り、奇を齎らし、遂には西班牙人に代りて、亞細亞に、亞米利加に、海上の覇權を握るに至りぬ。こゝに於いてや、貿易交商の道大に開けて、國富み、個人榮え、知識暢達し、意氣昂揚し、幾万頃の森林沼地は着々開墾せられて良田となり、農夫は半世紀間に二倍の收穫を得て、鼓腹擊壤し、下院議員の資産はやが

て上院のに三倍するの奇なる現象を呈するに至りぬ。諸侯伯、縉紳は、封建の餘夢の尙残りて、確執軋轢の未だ熄止せざりしにも係らず、國君エリザベス陛下を愛敬するの念は、家族の家長に於けるが如き者ありて、常に女皇を國家の中心として崇尊し、一致團結の實を維持せり。

英國十六世紀の後半は、**進歩擴張の時代**なりき。文明の利器の未だ具はらざりし大不便の十五世紀より一躍して、大便利、大自由の社會に立出でし時代なり。下民の家々にまでも煖爐ストーブを裝設せしはこの半世紀なり。市街の大通りに敷石を布設せしも此の半世紀なり。公卿貴族の別墅の多く設けられしも此の半世紀なり。大小數百の劇場の倫敦に興りしも此の半世紀なり。人々はかくして現世間の頼もしきを感じ、此の國の威力の強大なるを意識し、人生の快樂の日々に長ずるを見聞し、又之れを獲るの道の必しも得がたからざるを知覺し、人間の行爲想欲の驚くべく、重すべく、且つ旨味深きを覺りたりき。彼等は、中古時代の知者の如くに、偏に靈界のみを景慕して現世の生活を厭離せんとはせず、又彼の後の十八世紀の士人の如くに、偏に中央の市府にのみ重きを置きて、其の他を遺却せんと欲するに

も至らず。エリザベス朝の國俗は、たしなべて人間の行爲と想欲とに深き旨味あるを感じ、其の美しきをも、其の醜きをも、其の高きをも、其の卑しきをも、其の悲しきをも、其のをかしきをも、悉く之れを歓迎せりき。さればまた、一方より觀れば當時は、醜徳にも、弊風にも、富みたり、或意味より言へば、紛亂を極め、甚しき不秩序に陥りたりし時なり。是れ大革新時代の哀しむべき、えかしながら、止む能はざりし伴弊なり。

此の時に當たりて、從來成立てりし各種の格式の、苟も世道人倫を律すべきものは、殆ど皆其の効力を失ひ、基督教の如きも、其の舊教は已に虚儀の如く、新教はいまだ確立するに至らざりき。要するに、教界も、俗界も、共に確定せる制規を失ひ果たる、なほ我が明治維新後の情勢に髣髴たりき。一言もて蔽へば、**隨意放埒の時代**にして、何事を行ふにも一定の模範なく、人は皆摸倣せんとせずして創作せんと欲せしがゆゑに、尠くとも其の當初は、風俗も、好尚も、人の行も、人の説も、其の面の如く多様なりき。宮廷の公人すらも、其の服装をば、或時は佛蘭西にし、或時は西班牙にし、又以太利、希臘にして異ます。當時流行の亂雜と激變とは、婦人よりも却りて男

子に甚しかりきといへり。按ふに、かくの如き不秩序と放埒とは、絶對に稱美すべからざる勿論なれども、エリザベス王朝の民衆をして未曾有の發達を成就せしめしものは、畢竟するに、此の大自由の力に由る、所謂一利一弊也。

凡そ人間の想欲は外より來る刺戟の強弱に依りて増減す、而してエリザベス朝の英國は、前に叙説せる大變動によりて、其の局面俄然として變せしかば、聞く物、觀る物として新奇ならざるはなく、官感に於ける刺戟も、情緒に於ける刺戟も、知力に於ける刺戟も、到る處に具はりたり。例へば、諸工藝の勃興と有無交易の繁昌とは、殷富なる大英國の市場に宇内の實用と奢侈とを網羅し、印度、亞米利加の珍寶、奇品皆こゝもとに輻湊したりしかば、上下之れが爲に眼眩み、雅俗之れが爲に動顛せりき。加ふるに、古學藝復興の餘波は、雜然として外國美術を此の國に打寄せ、雲に冲る臺榭樓閣の輪奐、諸名工が畫きたる繪畫の美、奢侈を極めたる時様装の絢爛、内外人の心目を駭かし、果はロンドン全街を擧げて活きたる、劇壇の光景と化せしめ、其の織るが如き往來の雅俗、上下、男女、老弱をしてさながらに無數の優人たらしめき。風流の心なき徒たりども、常に此の間に棲息して、さばく、想像を鼓吹せられなば、

竟には雅化して詩人たらざるを得ざりしなるべし。況や別に古希臘、古羅馬の哲學、詩歌、雄辯のたぐひが、或は譯せられ、或は釋せられて、冷く思想界に流布せしむや。知力、想像力はた大に活動せざるを得ざりし也。此に於てや、人間が身心の機能は八面に發暢し、其の結果は竟に古今空絶の駭くべきエリザベス朝の文學となりて現はれたる。

然れども、人の身心のかく縦に發暢せしや、其の結果の毎に善且つ美ならざりしこととは勿論なり。蓋し、美と善との大に暢びしや、醜と惡とまた大に暢び、高と雅との大に發達せしや、俗と卑と亦大に發達し、或部分は甚だ愛すべく、敬すべく、慕ふべく、貴むべきが如く、或部分は甚だ嫌ふべく、厭ふべく、惡むべく、卑しむべきが如くに見えたり。失儀、猥陋、慘酷、殘忍等の諸惡徳は、優美、嫺雅、慈仁、任俠等の諸淑徳と共に紛錯混交して雜然たりき。而して此の奇怪なる特質は、當代社會の全分の上にも、又一個人の上にも貫透し、ヘンリッ八世の如き、エリザベス女皇の如き、エッセックスの如き、ロリーリ（以上皆シエリクス）の如き、正史的人物の上にも顯れ、フォールスタフ、クレオパトラ、アントニイ（以上皆シエリクス）の如き假設的人物の上にも見えたり。

要するに、エリザベス朝の社會は演劇的社會なり、祭日、祝日に於ける當時の英國は、さながら絶大の畫圖の如く、若しくは絶大の演劇壇の如くなりき。其の貴賤の晴衣裳の如何に我が元祿、享保期の扮装のはでやかなりしよりもはでやかにして、其の看覽（まじり）を好み、盛觀を好み、歌舞を好み、摸寫を好むの念、詮するに、演劇的顯象を愛好するの念の如何に偏狂（マヤ）の度に達したりしかを知らば、此の時に當たりて詩客、吟人の輩出し、劇の大に勃興せしと、また異しむに足らざるべし。エリザベス朝の機運と、大勢とは、はゞ我が明治維新後の機運と大勢とに比すべく、其の繪畫的社會の狀況は、むしろ我が享保前後の社會に比すべし。享保前後徳川全盛期の扮装の如何に演劇的なりしかを想へ、男達のモサことばの如何に詩歌的なりしかを想へ。我が時代物の劇に用ふる錦織羅綾の如何に一たびは現實の盛服なりしかを憶へ、頼兼の駒下駄、岩永左衛門の社祢の骨て現實に見られたりしを憶へ。此の比較の中らずといふとも遠からざるを察るに足るべし。

以上をエリザベス文學の勃興に關する簡單なる解説とす、尙劇壇の詩人并びに其の作に關して叙説せん折にこゝに説き洩らしたるを補ふことあるべし。今は假

むかばかりをもて足れりとして、直に當代文學の叙説に移らん。

第一章 第一期エリザベス文學

本篇の粗分—詩歌—サククギルト—ガスコイン—其の他の詩人—

翻譯熱の時代—物語類、パナツドの流行—試験時代—修史家—フ

アビヤン—ホール—ハリソン—シエンド—海外の奇談—小冊子の出版

ナリ、ワイヤントの二人は、エリザベス女王即位の年に少しく先ちて、其の諸作を公になせりしかど、所謂エリザベス文學の先導は彼等二人なると明なれば、史家或は彼等をもエリザベス朝の詞傑中に列せんとす。されど、叙事の順序を明瞭にせんには、エリザベス女王即位の年をもて、エリザベス文學の第一年とせんかた穩なるべく、さて此の區分に據る時は、即位の當年、即ち一千五百五十九年より同七十九年まで(我が正親町天皇の永録二年より天正七年まで、細川幽齋、小野通女在世)はエリザベス文學の第一期にて、七十九年より一千六百二十五年まで(天正七年より後水尾天皇の寛永二年に至る藤原惺窩、松永貞徳等在世)は其の第二期なり、第二期はスベジサー、シエークスピア、ジョンソン等の盛えし時代なり。通例、世人が「エリザベス文

學」と特稱しては、やせる諸傑作は、總じて此の第二期中の作物なり。さて第二期の文運の興隆は、一は英國の政治上、社會上の情勢、二には天下の大勢、即ち全歐に於ける學藝復興に原因すると明かなれど、尙子細に看察すれば、其の興隆に至れる國文學上の次第、因縁もまた鑿々として指示するを得べし。されば、第二期エリザベス文學の情勢を知悉せんと欲するものは、先づ豫め第二期の騷壇に注意すべきものとす。第一期、即ち第二期に先てる二十年間の諸著作は、スベジサー、シエークスピア、ジョンソン等を生ずるに至りし最近の因縁なること明なればなり。さて、此の旨意にて叙説するに當たりては、此の朝の文學を第一期と第二期とに分かつの外に、梨園及ハ劇の詩(脚本)に關する事を別にして叙説するを便宜とす。蓋し、當朝の文學は其の品類いと豊富にて、律語も、散文も、こちたきたぐひの文學も、洒落なるたぐひの文學も、殆ど皆備はりたれど、秀で、豊なりしは、劇壇の諸作なり、現に劇の詩の作家は十をもて數へ、其の傑作のみを擧ぐるも四十餘篇に越えたれば、他の詩文と混じて叙説せんは徒に紛雜を醸さん^{おこ}の恐あり。此の故に此の朝の叙説を分ちて三段とすること左の如し。

第一期エリザベス文學

一千五百五十九年より同七十九年まで

第二期エリザベス文學

一千五百七十九年より同一千六百廿五年まで

劇壇並びに脚本家

英國劇の起原より一旦劇場の閉ざるに至りしまで

上に説ける如く、第一期の諸作物は第二期の業因なり、第二期の傑作は偶然に生ぜしにあらざる。第一期に於ける文學は、總て當代の新想念を種子とし、上古期の末に注入せられし諸種の豊なる肥料に育成せられしものなり、而して第二期の文學は、エリザベス時代の文學を一箇の有機體として見るときは、この種子の次第に發生暢達して、花を着け、實を結びしに外ならず。まづ第一期中にあらはれし主なる著譯を列擧して、文學の如何に進歩しつゝありしかを示すべし。

第一期の詩人 即ち韻語家中の録々たるものは、バクハルスト卿トマス、サックギルとジョージ、ガス、コインとなり。

サックギル は『治者の鏡』と題したる長篇の物語歌を著して名あり。一千五百三十六年サセックス州バクハルストにて生まれたり、名族の出なり。はじめオックスフォ

ードに修學し、後にケムブリッジに移り、又法學内院に入り、壯うして結婚し、外國に歴遊し、文壇に名を知られ、三十一歳の時にバクハルスト卿となり、多年の間エリザベス女王の重立ちたる顧問となりて政治の樞要に當たり、女玉崩じ、チームス王即位するに及びては、ドオセットの伯爵に叙せられ、一千六百〇八年に逝りき。其の傑作『治者の鏡』は専ら榮華名譽の浮雲の如く頼み難き由を、英國の史に見えたる多數の悲しむべき實例によりて、證明し、君長の淑徳を奨誘せんとしたる作にて、明かに教誨を旨としたる物語歌の一種なり。この書の價値は文學上よりは寧ろ古記録といふとにあり。はじめポッカチオの『Fall of Princes』(リチャード譯)の増補となさん積りにて千五百五十五年の頃より著作に着手し、ウィルヤム、ボルドウィンといふものゝ手にて編輯出版せしが、其の後五十年間に此足の作を添ふるものあまたいで來て、近世に傳はれるは甚しき玉石の混淆にて、ふと見ればいづれをサックギルの作とも分きかねれど、學者の定説によれば Induction(緒言)と題したる篇と『バッキンガムの述懐』とは、たしかにサックギルの筆なるべしとす。最近の出版に係る『エリザベス文學史』の著者セイントツペリ氏の如きは、『治者の鏡』に載せたるサックギルの物語歌を評

してサリ、ワイヤット等の新詩躰の影響を蒙らざる舊格の物語歌とし、且つ、チャーサーとスペンサーとの間に於て英語にて物せられたる最良の詩なり、と稱し、スペンサーの最傑作の幾分は尠くとも此のうちより摸範を得たるならん、と斷言せり。げにや、サッギルの作はスペンサーの作の如くをさく、寓意を旨としたるものなり。サッギルは、右の寓意歌の外に、"Gorboduc"といふ劇をも作りき。

ガスコインの生誕年月は明かならず。假定せられたるによれば、一千五百三十六年に生まれて、一千五百七十七年に四十歳餘りにて逝りしもの、如し。彼れは士爵たりし素封家の子にて、ケムブリッジにて修學し、二たびまでも衆議院の議員となり、外國にも歴遊し、戰場にも臨み、頗る世故人情に通曉せりきと傳へたり。其の作あまたあり、彼れははじめて外國の作を翻案して、喜劇を作し、また悲劇をも作しきと傳へたれど、いかにや。但し、一千五百七十六年に出版せられし「スチールグラス」と題せる諷刺詩は、學者の説によれば、疑ひもなくガスコインの作なるが如し。「スチールグラス」とは鋼鏡の義にて、この作は前代無比の長篇の諷刺詩なり、其の主旨は當代の弊風を諷刺懲戒するにありて、通篇無韻の律語より成れり。さ

て伴の二人の外に二の町に位すべき詩人尙あまたあり、中にもトマス、チャーチャー、ド、(二五二〇—一六〇四)ジュール、ジャーギル(一五三〇—一五九四)などは、多少特質ある詩人にして、彼等が作りし寓意歌、短篇の歌、讃の歌、戀の歌などに見るべきもの尠からず、これらを一編にしたるもの、一千五百七十六年に至りて世にいで、近世までも傳はりてはやされたり。「Paradise of Dainty Devices」と題したるもの、是れなり。

當時は諸名家の作を編纂して出版すること流行したりしなり、上文にいへる「治者の鏡」の如きも、其の實は、同類の歌を雜纂したる一種の詩集なるが、之れより先き一千五百五十七年にも、リチャード、トッテルといふもの「Tottel's Miscellany」と題する當代名家の詩集を世にいだしき。サリ等の小品は伴のトッテルの雜纂によりて後世に傳はれり。按ふに、此等の諸集は、いづれも第二期なる大詩人等に多少の材料を供せしものたるや疑ふべからざるなり。

かく希臘羅馬の古文學が盛に研究せられしと共に、古書の翻譯もまた類に行はれしかば、或はこのころを目して翻譯熱の時代と稱す。そもく古代の著名を

翻譯することは、已にヘンリ八世の朝并びにエドワード六世の御宇にも行はれりしが、此の期におよびては殆ど流行のやうになり、詩人にて翻譯に手を染めざりしものは一もなく、此の業に専從せし名家のみにても十二人以上を數ふるに足れり。其のうちやゝぬきいでたるは、フェール、ターバーギル、ゴールディングなどなり。さればブーシル、オギッド、シセロ、デモスゼニーズなどいふ傑出せる諸家の名作はいふも更なり、院本の如きも、希臘羅馬の名作として知られたるは、一千五百七十九年以前に、已に幾篇もなく翻譯せられき。トマス、フールのブーシルの譯、アーサー、ゴールディングがオギッドの譯などは其の尤なるものにして、二人ともに例の十四行體の詩格を用ひたり。

此の翻譯熱の時代は亦彼の翻譯、狂古學、狂など稱せられたる時代にして、これに従事せし文人の大半はたゞ流行を追うて漫然と筆を驅りしものなるが故に、希臘語、以太利語の特質と英國語の特質とを精比することもなく、語法、句法より綴字に至るまで、一に希臘、以太利の様式を移し、徹頭徹尾、不合理なる直譯の杜撰に陥りしものあまたありき。

さて、これと同時に物語類を愛玩するの念舊日に倍し、此の國の古事譚、傳説等の喜びて讀誦せられしは更にもいはず、當代に起られる政事、社交、宗旨上の種々の珍らしき出來事だに、直に短篇の歌に綴られて、毎週のやうに公にせられ、世人が玩讀の料となりしこと、猶近世の新聞紙、雜誌類のもてはやさるゝが如くなりき。さてかゝる珍事奇説等を綴りたる歌を總稱して「バラッド」といへりき。按ふに、其の多數は我が近古の「讀賣」の巷説、即ち情死の顛末を綴りたる俗謡などにや似たりし。時俗の物語を嗜好する、かくばかり酷しかりしかば、外國の奇話を翻譯することも次第に盛に行はれ、一千五百六十六年にはウィルヤム、メインターといふ者、快樂殿』(The Palace of Pleasure)と表題したる以太利小話の翻譯集を出版し、次いで翻譯家ターバーギルも「哀話集』といふ律語の翻譯を出したり。その他、同類の翻譯物語を舉するに遑わらず。而して其のころ最も多く入り來たりしは西班牙及び以太利の物語にて、彼の有名なる「Amadis de Gaul』の如き、サンナザロの「アルカデヤ物語』の如き又は「エシオピヤ物語』の如きも、皆此の砌に輸入せられき。第二期の名作の一に數へられたる士爵フィリップ、シドニの「アーカデヤ」物語の如きは、明に此等物語を

種本として綴られしものなり。

畢竟翻譯のかく熾なりしは、一は俄に注入せられたりし外國思潮の餘波たりしに外ならねど、一は創才ある作家の未だ世に出でずして、何事も皆試験の境界にありし故なり。換言すれば、當期の諸翻譯は第二期の諸創作の粗材となり、又は素絹となりしものにて、暗に當期の詞人等が如何なる文體をもて、如何なる思想を、如何はかに表白すべきかを試験しつゝありしとを證するもの也。時人が咀嚼研究に熟稔したるし證跡は、上にいへる古文學の翻譯せられしと同時に、過去の英詩人の傑作も拾くもてはやされ、就中、チーサー、ワドグート、ラングランド等の名著の、其の最早模倣せられざりしにも係らず、荷も詩眼あるもの、争ひて研鑽する所となれりしにも見えたり。第三期の大詩宗スベンサーの如きも、此等前代詩人の作に負ふ所鮮少なりきといふべからざるなり。

之れより先き、ヘンリ八世の御宇の頃より、**國史編纂**に従事するもの次第に出でたり、一千五百十二年に卒せしロンドン市の知事ロバート・フレイマンの如き、一千五百四十七年に高齡に達して逝りしロンドン市の判官エドワード・ホイルの如きは

はじめて英吉利國の史紀に着手せし者と稱して當然なるべし。サクソン紀絶はてこのかた正史と稱すべき者無かりしを、彼等つとめて此の缺を補ふべき業に従へり。(爰に英國といふはサクソン、ノーマン和合後の英國を指す)。素より彼等の主なる目的は仔細綿密に見聞の事蹟を叙記するに在りしかば、措辭行文の上には何等の美妙なる所あるにあらず、且つは事實の眞偽を甄別するに必要な史學上の烟眼ありしにもあらねば、彼等の叙事中には、謬妄なる叙説と無稽の記事とが間を眞實事の間^に混雜したれど、越くとも當期の珍しき出來事と風紀習俗の明瞭なる説明とは、單へに彼等に據りてのみ知ることを得べし。フレイマンの著は『The Concidence of Stories』といふ、こは『英國全史』とも稱すべきものにて、治く歴代の事蹟を詳叙したり。さてホイルのはランカスター、ヨーク兩統の紀とヘンリ七世及びヘンリ八世の紀と也。ホイルは流行習俗を記するに最も力めたり、又總じてフレイマンに優る所あり、こは、其の學識の彼れよりも一層高かりしに因るあるべし。此の二人につぎて出でたりしは前にいへるトマス・モアなり、其の著『エドワード五世並びに其の弟及びリチャード三世の紀』は當時の史傳中の最なるもの

なり。かくて、修史嗜好の漸く盛なるに及びては、舊事蹟の探尋に従ふもの大に増加し、エリザベス朝の第一期にはグラフトン、ストー、ホリンシッドなどいふ専門の史家輩出せり。其の中尤も名高きはホリンシッドなれど、其の傳は殆ど知るに由なく、其の著として後世に傳はれるは所謂『ホリンシッドの史紀』あるのみ。傳によれば、ホリンシッドと共に『史紀』の編纂に従事せしもの數人あり、其の中主なるものは僧ウイラム、ハリソンと、ジョン、フッカーと、フランシス、ポード、ギルとなり。又前に擧げたるストー(デジ)の如きも、其の幾分を參助しきといふ。さて此の『史紀』の重要な部分は、ホリンシッドが筆に成れるノオマン政略以前の英國史、リチャード、スタニハートが物せし愛蘭の由來、そを補ひてフッカー、ホリンシッド、スタニハートの三人が別に物せし該國の紀、ベクトル、ボイスが著し、蘇國の史をホリンシッド(或はハリソンか)が譯したるもの、及びホリンシッドが綴りたるノオマン政略以降一千五百七十七年までの英國の歴史等なり。此の書は其の同じ年即ち七十七年に世に出でしが、偶々女皇エリザベスの忌諱に觸るゝ所ありしかば、後に其のうちの幾分かを刪りて、同八十七年に再版を出だしき。さて此等紀傳家の諸著は、概し

て眞偽のたしかならぬ事蹟をいと冗繁に記叙したるなれば、考證稽古の念無くて之れを讀めば、平板蕪雜にして頗る心のたゆまるゝ讀みものなれど、其の當時の國俗の心に多少史的知識の好尚を喚び起こし、且つ間接に愛國の想念を誘致するに興りて効用ありしことは想像するに堪へたり。尠くとも此等諸種の記傳が第二期の脚本家マロー、シークスピア等の好材料となりしことは事實なり、現にシークスピアの傑作の隨一なる『マクベス』の史劇の如きはホリンシッドが譯したるボイスが『蘇國史』に據れること瞭然たり。

かくてまた、翻りて他の方面を觀察すれば、學藝復興して希臘羅馬の古代に關する豊富なる知識の注入せられしと同時に、亞米利加新大陸の發見以來、月に年に頻々たりし洋中の諸發見が媒介となりて、航海通商の道大に開け、隨うて冒險探奇の旅行を千萬里の海外に試ること當時一般の風習となれり。東洋印度會社が政府より特典を得て商權を專にせし頃なり、ホウキンズがブラジル及びギニーに航せしも此のころなり。而して此時冒險者の異郷より歸りしや、前代未聞の奇事怪説を齎し來り、物語を愛玩する時好に投じて、類に驚くべき紀行を綴り、荒唐無

積なる傳奇に見えたる神仙、妖魔、巨魔の外に幾多現實なる怪物を紹介して一世の視聽を駭かしき。例へば北西洋の奇談を詳録したる旅日記は千五百七十九年以前に出で、又千五百八十年にはフロビシャードレークの徒、多年の驚くべき航海をなし果て、恙なく歸り來たり、或は世界周遊の奇談を傳へ、或は西班牙海上の怪異を語りき。而して此等の談の大かたが浮虚謬妄にして信憑すべからざりしにも係らず、大に當代の見聞を啓發し、將に暢發せんとしたりし國俗の精神をますく、奮起するに至らしめき。北海、南洋の驚くべき物語を聽きたる當時の國俗が競うて新聞を渴望せし形跡は第二期の諸著の上に散見せり。シークスピアの作中にも當時の感情を反射したりと思はるゝ所をば、『オセロ』の劇中に見えたるなき、其の一例なり。

第一期エリザベス文學の概況は以上の如し。新著作の誘縁となるべきもの斯く豊富なりし時に方り、他方には新舊兩教の軋轢ますく、甚しく新代の人士は争うて舊教攻撃の著述に従事せり、こゝに於てや、舊教の徒はた之れに答ふるの必要を感せしかば、筆を操りて論辯をものすること、此の時より更に一層の昌盛を致し

小冊子の出版の頻繁なること舊日に倍したり。按ふに、當期以前には、總て上流に位せる者は其の作を出版して世に示すことを恥辱とする習なりき、此の故に身分高き徒は、たとへ傑れたる著述をものし得たるも、概して稿本のまゝに匣底に藏めおきて、只二三の知交にのみ示し、世間に公にせざるをもて見識とする風ありしが、著作熱のかく甚しく成れるにつれて、此の風いつしかに衰へゆき、第二期のはじめに、リ、いで、有名なる『ユーヒーエズ』物語を著はし、滿朝の上臈をめでくつがへらせ、次いで當代の理想の紳士フリッパ、シドニが其の作『アーカデヤ』物語を出版して聲譽を一世に擅にせしが、刺撃となり、人々皆避うて其の作を公にせんとし、俄に案を構ふるもわれれば、急に舊稿を訂正して世に示さんとするもありき。所詮、著作を譽と思ふやうになりしとは、明に第二期に於ける文運隆盛の一線なり。さて、かく著述の頻なるに隨うて、互に勝らんと願ふ心も鋭くなりて、競争いと盛なりければ、著書の批評といふこともはじめて起りき。第二期の章にて説かんとするシドニが『詩辯』の如きは、實に英國に於ける詩文批評の嚆矢なり。

第三章 第二期エリザベス文學

ジョン・リ、——『ユー・ヒー・エズ物語』——フィリップ・シドニー——『アーカデヤ物語』——批評文の嚆矢——『詩辯』——シドニー以後の批評家

第二期のエリザベス文學はジョン・リの『ユー・ヒー・エズ』物語とエドマンド・スペンサーの『牧者十二月記』をもて始まるといふも可なり。此の二書は一千五百七十九年の出版なり。而して其の翌年と翌々年との間には、フィリップ・シドニーが『アーカデヤ物語』と『詩辯』といふ詩論と出でたり。此等四著のうち、スペンサーのを除けば、餘は皆散文の作なれど、今俗に謂ふ散文にはあらで、寧ろ謂ふ所の華文に屬すべきものなり。まづリ、より説き始めてシドニーに及び、さてスペンサー以下を叙すべし。ジョン・リ、は脚本の作家としても當代の名家の一人なれど、其の後の世に知られるは、主に其の奇異なる物語『ユー・ヒー・エズ』の殊なる文致に由りてなり。其の詳かなる傳は知り難し。一千五百五十四年我が後奈良帝の朝、小野通女の生誕に先つと五年に生れて、同六十九年にオックスフォードなるマグダレン大學に入り、同七十三年に學位を得ざりと傳ふ、されど此の事だに多少揣摩の説たるを免れず。但し、其が『ユー・ヒー・エズ物語』の上篇を一千五百七十九年に著し、其の下篇を其の翌年

John Lyly.

に物せしこと、其のこる齡尙二十五六歳なりしとは、はゞ信すべき事實なるが如し。ユー・ヒー・エズは古今有数の奇異なる著作なり。其の物語の筋は、平凡といはんよりは、むしろ平板と云ふべき、心たゆまる、たぐひの事件より成りたれど、其の一種異様な駢儷的文致、即ち過巧なる對照と浮靡綺麗なる直喻とは、恰も當代の好尚に投合して上流社會を振蕩し、僅々六年間に版を重ねること五回におよびき。其の頃朝廷に出入せし風流男女は、此の書を知らざるを耻辱とし、又其の名句を誦したるを譽とし、或は殊更に此の物語の過巧なる文致をまねびて談話し、竟にはユー・ヒー・エズ、言葉、といふ一種の名稱をさへに作り出だすに至りき。

按ふに、リ、の殊なる文致は當時の宮中語の反影たるに外ならざるべし、何となれば華麗過巧の弊の浮靡と矯飾とを喜べりしエリザベス朝の風流男女の舉止風采、談話及び文章に現れしは、此書のいのでし後にあらで、此の書の成りし前にあり。『ユー・ヒー・エズ』物語はリ、が創意に成りきといはんよりも、むしろ當時の殿上の粹人が理想的言文を實現せるものともいふべし。彼のスコットが小説『モナストリ』の中なる一人物、サー・パーシー・シャプトンの如きは頗るよく活けるユー・ヒー・エズの面影

を現はせるものなり。

此の書の上篇は“Euphues, the Anatomy of Wit”と題し下篇は“Euphues and His England”と題したり。ユーヒーエズとは主人公の名なり。上篇にては、此の閑雅風流にして伶俐機慧なるアゼンスの貴公子をば、伊太利なるネーブルスに滞留せる者として叙説し、下篇にては、そが英吉利島に渡航する道行を語りて、航海中の出来事并びに英國の風俗の叙説に及べり。要するに、此の書の名高きは、主として其の異様な文致に由るなれば、他の修身上の教誨を陳述する便宜にとて綴られたる平板單調なる筋立の如きは、こゝに取りいで、言ふべき價值なし。此の作は、一面より觀れば一種の情話なるが如くなれど、他の面より觀れば一種の教訓文の集合なり。『ユーヒーエズ』の文章の特質は三あり、一は過巧なる對照にて、二は繁褥なる比喩、三は頭韻法なり。左に其の文例の一斑を擧ぐべし。

“The merchant that travelleth for gain, the husbandman that toileth for increase, the lawyer that pleadeth for gold, the craftsman that seeketh to live by his labour— all these, after they have fatted themselves with sufficient, either take their ease, or

less pain than they were accustom'd. Hippomans ceased to run when he had gotten the goal. Hercules to labour when he had gotten the victory. Mercury to pipe when he had cast Argus in a slumber. The ant, though she toil in summer, yet in winter she leaveth to travail. The bee, though she delight to suck the fair flower, yet is she at last cloyed with honey. The spider that weaveth the finest thread ceaseth at the last when she has finisheth her web. But in the action and study of the mind (Gentlemen) it is far otherwise, for he that tasteth the sweet of his learning endureth all the sour of labour. He that seeketh the depth of knowledg, is as it were in a Labyrinth, in the which the farther he goeth, the farther he is from the end: or like the bird in the lime-bush, which, the more she striveth to get out, the faster she sticketh in. And certainly it may be said of learning as it was said of Nectar, the drink of the Gods, the which the more it was drunk, the more it would overflow the brim of the cup; neither is it far unlike the stone that groweth in the river of Caria, the which the more it is cut the more it increaseth.

所詮、ユーヒーエズ體の律調は、儼語體のや、自由なるものに外ならず、隨うて、其の長所と短所と將た四六體の得失によりて推測することを得べし。
『ユーヒーエズ』につぎて一世を聳動せしものを、士爵フィリップ・シドニが『アーカデヤ物語』となす。

フィリップ・シドニは、一千五百五十四年、ケント州に生れ、十三歳にして、オックスフォードの大學に入り、學生として夙に高き譽れありき。十八歳の時、大學を退きて大陸漫遊の途に上り、佛、獨、伊の諸國を遍歴し、プレトリー、アリストールの哲學を研究し、デニスにて星學と幾何學とを修め、希臘の悲劇伊太利の短歌を稽查し、さて、二十一歳にして英國に歸り來たりし時には、眞に完全なる當代の理想的紳士なりき。其の身は名族の家に生まれ、容貌は閑雅、風采は俊秀、加ふるに、其の爲人、聰明廉潔、仁義を重じ、禮讓に厚く、而して勇武人に勝れ、學識はた高遠なりしかば、上は女皇の殊寵を蒙り、下は萬人の愛敬を得て、聲譽一世に高く、二十二歳、公使に任せられて大陸に赴き、新教諸國同盟の大會議に周旋し、二十九歳にして妻を娶りぬ。また同じ年士爵に叙せられたり。シドニが三十一歳の時、ポーランド國王の嗣絶にけるが、該國

人はシドニの才徳を慕ふの餘り、之れを推して其の國君たらしめんとを乞ひぬ、されどエリザベス女皇は、當代の寶玉を失はんことを惜しみて許さざりき。其の翌年、今の和蘭地方の新教信者等、西班牙國王の舊教軍に抗して、苦戰す、シドニ傍觀するに忍びずして、義軍の一將となりて赴き、援ひ、一千五百八十六年十月、ストフェンの役、重傷を蒙りて陣没す。上下おしなべて痛歎哀惜せざるはなかりき。(時に我が朝、正親町天皇の天正十四年、小野通女が二十七の齡を迎へし年に當る。)

シドニが名作『アーカデヤ物語』といふは、彼れが清閑なる別墅にありて自家と其の妹とを慰めん爲めに戯に物せし小説なり。この書『The Countess of Pembroke's Arcadia』は即ちシドニの妹と題してシドニが歿後四年にして出版せられしが、程なく八版を重ね、エリザベスの御宇より次の朝へかけて、洽く上下に玩讀せられき。其の脚色の大體は、當時盛に行はれたりし武俠と戀愛とを眼目とせる例の傳奇の趣向に據りたるにて、半ばは伊太利の小説に倣ひて散文と律語とを相混じたる文致に巧を弄しなれば、西班牙ぶりの作を摸して、田野、山川の景物を叙狀することを目としたり。左に其の物語の梗概を掲ぐ。

ひかし、希臘にアーカデヤといふ國あり、國風、國土の妙なること世界に比ひ無し。野には綠草滋々として數萬の牛羊飼はれ、岡には喬木蔚茂して好鳥常へに春を謳ふ。この國の住民は、賤しき牧夫だにも、罪惡といふことを知らず、長き月日はたゞ幸福の連続と見えし。されば近隣の諸邦にては、其の細民は更らにもいはず、侯伯貴紳のうちにも、其の煩擾なる浮華の生涯を棄て、アーカデヤの一農夫となり、花咲く川邊に鳥の聲さく無心の樂みを得てしが、なほ願ふ者も尠からず。「アーカデヤ」といふ名は、無上樂土、安靜和平などいふ意に用ひられて、偏く天下に聞えたり。この國の國王は、バシリ阿斯 Basilius とて、仁君の聞え高く、后ギチンヤ Gynecia また淑女として知られたり。さるはどに或日突然神廟より託宣あり、曰はく、二王女の婚儀より事起りて王と后との身の上にゆゑしき災厄生すべく、且つ國民は兵戰の災禍を蒙るべしと。王乃ち政を部官に授けて、自らは后と二王女とを携へて山林に入り、そこに行宮をたて、まばらしく謹慎の生を送る。斯くて事無くて數年を経たりけるに、或時のことなりけり。

アーカデヤの隣國の或濱邊にて、漁夫どもが網干などせる折から、思ひがけなく荒磯

に漂着せし若人あり、破船の難に遭へりと思しく、板子にすがりて漂ひ來りけるが、濱邊に助け上げられて人心地つくや、急ぎ人々に向ひ、我が友をも救ひくれよと請ふ。卑しからざる人品なり。仔細を訊すに、おのれの名はミーシドラス、今一人はピロクリスといひ、二人とも遠國の貴公子にして、諸國を遍歴して冒險の修行をなさんと企て、本國を出でたる航海の途中、風波の爲めに船を破られ、身は一枚の板子にとりつきて難を免れたれど、斷金の友ピロクリスが生死心もななし、彼れを救ひたまはば身につけたる財寶こそ、く奥へんといふ。漁夫ども心得て、數反ばかり小舟を漕ぎ出だしける時、彼方の沖遠く折れたる大橋にうち乗りて漂ひ來る一人の若人あり、姿の端正にして、服裝の華美なるこそ、海神の如し。ミーシドラス望み見て、あれこそ我が友ピロクリスにまがひなしはやく救ひくれよと聲をかけたなり。其の途端おなじ沖へに顯はれたる一船あり。異様の裝ひは正しく、豈國の賊船にて、この邦の漁民を捕へ歸りて奴隷となさんが爲め、折々近海を密航せるものなり。漁夫ども之れを見るや大に怖れ、ピロクリスをばうち棄て、矢庭に舟を引きもてさりぬ。ミーシドラスはせんすべを知らず、ひたすら友の運命をうち歎くに、漁夫どもこれに慰めて、隣國アーカデヤに行きてカラランダール Kalandar といふ者に助けを請へしをなす。

かくてカラランダールを尋ねて仔細を語る。カラランダールは深切にして、俠骨あるものなれば、心よく引き受け、直ちに船をしつらひて出だしやり、且つ心を盡してミーシ

ドラスをもてなす。ミーシドラスは、カラランダーの家におりて其の消息を待ちける間

ふと其の一室に飾りある國王一家の肖像に目をまわめ「あれはいかなる人々ぞ」と問ふ。カラランダー「あれは國王陛下、皇后陛下及び二王女殿下にまします」とて、今は神託によりて林中に謹慎の由を語る。ミーシドラス且つ驚き且つ嘆じ、いかで一度はいる美王女を見てしかなと思ふ。斯くて四方八方の物語の末、主人カラランダーの子クリトフォンOthlonの當時捕はれてさる遠國にありまきくや、ミーシドラスは心大に動きいで恢復の軍勢を催したまへ、おのれ今度の恩義の報いに身をすて、も御子息をつれ歸らん」といふ。

かくて評議定まりてカラランダーは軍兵數百を集めて、彼の國に押し渡り、ミーシドラスを先鋒として屢々敵勢と戦ひけるが、

「あなたは小勢なるが上に土地不案内にて、動もすれば浮足となり、形勢敗北を見えければ、ミーシドラスは陣頭に躍りいで「あはれ、そなたの軍中にて我れと思はん勇士あれば、それがし一騎打の決戦あれ、勝負によりてクリトフォンを申し受けん」と呼ばりけるに、敵も異存なく、やがて一人の大將馬を進めて近づき来る。直ちに矛を交へ、秘術を盡して戦ふこと數十合、勝敗未だ決せず、尙も烈しく斬り結びしが、ミーシドラスは兜を打ち落され、大重になりて奮闘するうち、敵は速かに馬より飛び下り、めづらし

や見上」と劍を棄て、ミーシドラスが前に跪く。「こは何事ぞ」とよく見ればピロクリスなりけり。修羅の戦闘はこゝに再會の縁となり、兩族は直ちに和睦し、クリトフォンは従され、ミーシドラスはピロクリスを拉して、皆々アーカテヤに歸りぬ。

さる程に二人の公子は、カラランダーの家に止まりて、尙ほ幾日かを過しけるに、或日ピロクリスはミーシドラスへ宛て一封の書を遣して、出で行きたるまゝ歸らず。

件の書には「おのれこのほゞより深き物思ひにかゝり、百方苦慮すれどもせんすべを知らず、姑くアーカテヤの地を去りて雲水に心を慰めんを欲す」とあり。ミーシドラスは人を馳せて追跡すれども得ず。かくて或時林中を逍遙しけるに、思ひがけなくピロクリスを見かけたり。被髪眉を越え、金甲して長劍を帯びたる打扮宛然たる女丈夫なり。ミーシドラス仔細を訊せば、曰はく「我れカラランダーの家にありて王女フィロクリヤ Phloeia の肖像を見て戀々の情禁じがたく、遂に姿をかへ、女勇國の長の破船に遭ひて漂着せるものと稱して王の行宮を訪ひ、今やかしこに逗留申なり。苦しからずば御身も我れと共に行宮に來れ」とて

ミーシドラスを伴ひて行宮に歸り、知己の一牧人なりとて、ミーシドラスを王に介したり。ミーシドラスは王に謁し、やがて王女を見けるに、其の美色想像以上なり、就中、パメラ姫 Pamela の美しさに魂を奪はれたり。

二人は、折を見合せて、フィロクリヤ、パメラの二王女に己れの素性経歴を語りて、切なる

意を通じけるに、二王女はやさしくも同情して、未を契りしかゞ、今は一家謹慎中にあるが故に公けに王に請ひて婚を定むる能はず。

こゝにアーカデヤに程近くアルガス Argus といふ國あり。女王セシロピヤ Cecropia 攝政して國威頗る振へり。セシロピヤはアーカデヤ王の姉なるが、其の太子 Amphion アンファイオラスの爲めに使を送りて王女フィロクリヤを聘せんと請ふ。されども王は神託を守りてこれを許さざりしかば、女王大に憤り、密かに兵を送りてアーカデヤの深林を襲ひ、二女王とピロクリスとを捕へ歸り、大湖の中央に建てたる石室の中に幽閉す。

かくて女王は日毎に石室を訪ひ、二姫に向ひて意に従はしめんとすれども肯かず。さる程にアーカデヤ王は師を出だしてアルガスを攻むること數回に及べども、克つこと能はず。希臘諸邦の勇士聞き傳へて大にアルガスの非行を憎み、アーカデヤの軍に加勢する者日夜相續ぎければ、こゝに再び大激戦となり、勝敗久しく決せざりき。この間女王は或は賤し、或は嚇し、手を盡して二姫に迫まれども、二姫竟にきかず。しかば、女王怒り、面前にて一人づゝ殘殺せんと決心す。然るに太子アンファイオラス、心深く、女王を諫めてこれを縦さんと請ふ。女王はこれを縦さじといふ。かくて母子大に争ひ、相猜忌するに至りし結果、母は遂に城砦の高樓より身を投じて自殺し、太子も自ら劔に伏して斃れけり。かくりしかば大亂にはかに局を結び、三人はアーカ

デヤの軍に迎へられて國に歸り、やがてミニシドラスはバメラ姫と、ピロクリスはフィロクリヤ姫とめでたく婚を結ぶに至る。云々。

此の昔は、已に諸批判家が評したるが如く、當代の面影を映じたるものといはんよりは、むしろ作家が理想と性癖とを反射したるものといふべく、隨うて、人物も、事件も、寫實的といはんよりは、寧ろ理想的といふべきもの多し。彼れは、其の『詩辯』に於て、韻語をば、詩の裝飾たるに過ぎずと貶せしほとありて、自らは散文の異端に陥りたるかの觀あり。されば、其の行文は頗る巧緻流麗にして、間と『ユーヒーニス』風の濃厚淨纖の弊に薰染したれど、流石に斬新なる譬句と秀句とに富みて、宛然一篇の散文詩をなせり、後に出でたりし詩人等が、深く此の書を愛讀して、其の想像の源泉をこゝに求めたりしこと故ありといふべし。シエイクスピヤの如きも、尠くども其の女性に關する想像と概念とは、按ふにシドニより得來たりし所尠からざりしならん、彼れは『アーカデヤ』を精讀したりし一人なりと傳へられたればなり。フィリップ、シドニは、韻語の詩人としても、多少の譽無きにあらねど、かゝる略史の中に特書すべき程にもあらねば、今は略きて、彼れが第二の名著のことに移るべし。

著作の月旦の此の期に萌芽せしことは前にもいひたるが、**詩文の批判**といふことをはじめしものは、實にフリップ、シドニなり。そもくエリザベス朝の第二期は、清淨教徒と稱する一派の宗徒の漸く勢力を逞うせんとしたりし時なり。彼等は社會に混れる浮靡淫逸の弊習に憤を發し、倫理、大道の廢れたるを慨するのあまり、漸く他の極端に走り、總じて虚儀逸樂を惡むこと、蛇蝎の如く、殊に詞客、文人を憎みて弊害の源と做し、天下の遊民と詆り、國家の毛蟲と詈り、罵辱至らざるなし。シドニ斯道の爲に黙止するを得ずして、竟に一篇の解嘲を物しき、有名なる“The Defence of Poetry”と云ふ詩論是れなり。『詩辨』若しくは『論詩辨妄』などいふ義なり。シドニが此の篇に論ずる所は詩と、道義との關係なり。彼れは反覆して、想像的文學(詩歌小説)の讀者に與ふる悅樂は、單に知識を裨益するのみにとゞまらず、道義の念を修鍊するにも大なる効用ありといふことを證せんと力めたり。こゝに其の一節を譯出して當時の論文體の片影を示さん。

夫れ詩歌は諸學藝の最古なるもの、諸學藝の祖なり、あらゆる學藝は皆詩歌を源頭とす。其の普遍なるは、學人賢士も未だこれを棄つる能はず、野蠻蒙昧も曾てこれを缺くことなきを見て知るべし。羅馬人はこれを尊んで、豫言神托を呼び、希臘の人は更

らにあがめて創作神技と稱せりき。按ずるに、創作神技の名こそ、限る其の實に近けれ、何となれば他の學藝は或る事物の中に自家を定着し、事物を源として自家を生ず、然るに特り詩人に至りては、初めより自家の天地を創作するが故に、事物の爲めに思想を作らずして、思想の爲めに事物を設くる觀あり。且つや詩歌の録する所には、些の醜惡なし、其の結果はひさへに善を勧め、意を悦ばしむ。宗教上の本義によるも、詩歌は人智の所作中の上乘にして、其の價值愈かに歴史を凌ぐ、而して其の教化力に至りては、哲學に優ること万々なり。彼の清淨なる聖典の全部は詩的描寫を以て滿されたり、救世主基督すらも詩的英華を利用し給へるにあらずや。詩歌は其の如何なる種類たるを問はず、皆尊重すべく、皆讚美すべし。由是觀之、戰功ある勇將に與ふべき名譽の桂冠は宜しくこれを殊功ある詩人にも捧ぐべきなり。これ予が斷じて誤り無しと信ずる所。云々。

此の書に論じたる、詩の効用に關する説の當否は、兎も角もあれ、此の書いで、後ユ・ヒューエズ風の過巧綺麗なる文體の次第に廢棄せらるゝに至りしとは事實なり。シドニの文體は此の書に於て一段の進境を現じ、流石にいまだ其の華麗の弊を全脱したりとはいふべからざれど、また彼の『アーカデヤ』風の纖巧なる筆にあらざる、明かに前の文致の非なりしことを自認したりしに似たり。總じてシドニの文章は、國語の純正といふ點に於て、十六世紀中他の作家のに優りたり。加ふるに、詞藻豊

富にして變化多く、感興盡くる所なきの概あり。たゞ時としては章句の冗長に流れたるを憾とすべきのみ。

シドニにつぎて批評を物せしはウィルヤム、ウヰップなり、其の著は『英詩論』と題したり。さてまた一千五百八十九年にはジョールジ、ポッテンハム(一五三二?—一五九〇)といふ者、更に一大篇を著して仔細に作詩の法を説けり、『英詩之法』と題したる、是れなり。あかれども、此等の批評は、第二期の大詩人等に直接の効用ありしものは信すべからず、何となれば此等批評家中に最も卓越したりしフィリップ、シドニの詩論すらも、第二期の諸傑作、就中、シークスピア、マロー等の傑作をば獎勵誘致すべき性質のものにはあらで、むしろ妨止すべき性質のものなればなり。例へば、シドニは彼の劇に於ける三同三同とは作劇學上の科語、時々の説を主張し、加之、悲劇と喜劇との混淆を非としたりき。されば若し第二期の脚本家にしてシドニが詩論にあたがひしならば、彼のエリザベス劇の榮光と稱せられたるマローが『フォウスタス』も、シークスピアの『ハムレット』も、乃至ウヰップスターが傑作『マルヒの公爵夫人』も、フォードが名作『ブロークン、ハート』も、到底世に出づるに至らざりしなるべし。

大批評家の聲が眠れる詩の神を喚び醒ますと無きにしもあらぬものから、マロー、シークスピア等の傑作は、詩論の庇によりて生まれざりしことを語るけし。

第四章 エドマンド、スペンサー

其の出世前—『牧羊十二月記』—其の生涯—其の著作—『神女王』の特

第三期のエリザベス朝の詩歌はスペンサーの『牧羊十二月記』(Shepherd's Calender)にはじまる由は、已に上にいへり。『牧羊十二月記』は、實にスペンサーの出世作なり。と共、所謂ミ、リ、ザ、朝、文、學、の、發、端、なり。ゼップレン、チ、ョー、サー、歿してより、こゝに百七十餘年、其の間幾多の詩文人若干の新詞句を聯ねて、おのがじ、詩想を開拓せしが、其の功果未だ見るべきに至らざりしに、スペンサーが『十二月記』この際に出で、大に人意を強うしたりき。眼高き輩は、早くもこれによりて、作者が非凡なる天才を認めたりしならんが、而も僅々二十年間、十二月記出版までの間、に於て、天下を驚倒すべき詩界の新天地が、この作者の手に開かれんとは思ひもかけざりしならん。

エドモンド・スペンサーが實傳はたゞ微かに知られたるのみ。最近の推定を據としていはんに、彼れの生誕は一千五百五十二年(我が後奈良天皇の朝、藤原惺窩が生誕に先つこと九年にして、舊家ながらに頗る零落せる家に生れたりき。而してそのケムブリッジなるベムブローク院カールに給費生となりて入りしは、按ふに、一千五百六十九年なりしならん、但し、其のケムブリッジ大學に在りし間の經歷は、揣摩臆斷の説の外には、知るに由なし。只其の彼處カールにありしこと七年なりしことと、一千五百七十三年に卒業してバチラーの學位を得、更に三年を経てマスターの學位を得しとは、蓋し、正確の事實なるべし。ケムブリッジを退きて後は北方に赴き、其の親友の間に寄居して一二年を過ごし、一佳人に懸戀せし事と、此の際其の處女作『十二月記』の著作に着手せし事とは、はゞ信するに足る由あり。

『十二月記』は作者が抒情の作たること勿論にして、就中心を籠めたるは新舊兩教を比較したるあたり、并びに教師が慈悲善根を描けるあたりなるべく、而して當篇の主人公たる牧羊者コリン、クラウトは作者の影なるべく、又女主人公ロザリン、エドワードは明かに作者が意中の人なるべし。さて『十二月記』は著者をして立て

ざるに一世の名を成さしめければ、彼れは一千五百七十八年の末ごろ、ロンドンロンドンの都門に歸り來り、其の友ガブリエル、ハーエーの紹介にて、シドニ並びにリースターリースターに面會し、一躍して直ちに最上流の文壇と政事界とに出入することを得しなるべし。『十二月記』の公にせられしは一千五百七十九年なり、E、K、と署名したる彼れが友(本名 Edward Kike)は之れを校訂して出版しき。ケムブリッジを去りて後の事蹟は、其のはのかなるだに、ひとりE、K、が記しおきたるに據りてのみ知るとを得。其の傑作『神女王』の考案に着手せしも、按ふに此の時の前後なるべし。

かくて後、一千五百八十年にいたりて、時の權家ウィルトンのグレー卿アイルランドに従ひて愛蘭アイルランドに赴き、まばらしくは其の秘書官たりき。爾後四五年間の履歴は頗る明確ならざるどころあり、されど、抄くとも、ふひ／＼に登用せられて種々の職に就き、竟にコオク州なるキルコルマンといふ莊園を女皇エリザベスより賜はりて、其の城主となりし事などは事實なるが如し。『神女王』のはじめ三卷は此の幽邃閑雅なる山光水色のうちに物せられき、而して著者は之れを、其の心友フォルター、ローターのすゝめにかかせて、一千五百八十九年の十二月に出版し、女皇エリザベスの覽に供へきとい

ふ。我が朝に於ては、此の際スペインサーが著作せしは、尙外にも夥多ありしが、それらは概して短篇の歌なるを、一千五百九十一年、一篇に合綴して世にいだしきと聞えたれど、今は傳はらず。又一千五百九十四年には、妻を迎へきと傳へたれど、其の姓名すらも定かならず。或はエリザベスと呼びきともいふ。翌年、また種々の作あり、其の多數は戀愛及び結婚に關したる歌なり、其のうち最も名高きは、*Alumini, y s'je "Celin Clon? Come Home Again."* となり。同じ年『神女王』の續篇(第四、第五、第六の巻)を出版じき。篇中、エリザベス女皇の徳を頌したるくだり著かりければ、女皇勅じて、年金五十磅を賜ひきといふ、是れスペインサーが再度英國に來遊せし時の事なり。同じころ、別に數篇の短歌を物しき、ウィスター脚の女等が結婚を賀せし『*Brother Samion*』并びに『戀と美との頌』などなり。件の頌のうち、二篇は壯年の作にて、他の二篇は當年の作なり、而して後者は伊のペトラルカが高絶幽玄なる戀愛の旨をば歌ひたるものなり。

スペインサーの晩年はいよいよ末路の一例なり。彼れは一千五百九十八年に起て、再び愛蘭の暴動の爲に其の財寶を掠奪せられ、剩へ其の愛兒の一人を其の邸宅

と共に焼き失ひ、倉皇として亂を避けて英國に逃れけるが、それより不幸ひきつゝ、次第に零落して、其の翌年の一月に空しくなりけり。或は飢ゑて死にきともいへれど、疑ふらくは、さまでの落魄にては非ざりしならん、たゞし、薄運窮困の間に其の生を終へしとは疑ふべからず。この窮迫の末年に、彼れは散文にて、『*View of the Present State of Ireland*』(愛蘭土の現勢)と題せる時勢觀をもつじき、愛蘭土の特質と時勢とに通せずして讀まんはをしきものなりと一學者は評したり。スペインサーが遺骸は、其の遺言によりて、ウェストミンスターなるチャーサーが墓のほとりに埋葬せられて、今も尙四大詩宗の墳墓の一として崇敬せらる。

評家或はスペインサーを稱して詩人の詩人、といふ、さるは曾に詩人中の醇粹なるものといふ意味を含みたるのみにはあらで、其の詩人叢の爲にもてはやさるゝこと、其深なるを稱せりとも見るべし。後の詩人中、アラウンまたはフレッチャーなどは、甘んじて其の末弟子と自稱し、クリューは幼時スペインサーの作を讀みて詩人とならざるを得ざるに至りきと語り、グレントは作詩の前必ずスペインサーを誦するを例とすといひ、ドライデンは彼れを先生と尊稱し、ミルトンは彼れを中古の賢人スコ

「タス、アクイナス等にも優りたる賢者なりと稱しき。其の他、トムソン、ウオーブヲオス、パイロン、シエリ、キーツなど、苟も後の名家として知られたる詩人にして、多少スベ
ンサーが詩脈を傳承せざるものなし。蓋し、其の飄逸にして靈妙、豊富にして稔秀
なる想像が永久に詩思を鼓吹するの力を具へたればなるべし。

高遠なる想像と精巧なる詩法とを以て立地に盛名を博し得たる「十二月記」の靈妙
は更らにもいはし、「Epithamium」の典麗なる「四頌」の幽妙なる、いづれもスベンサ
ーが壯時の傑作として優かに玩賞するの値あり、而もこゝに一々に之れを細説す
る餘地なければ、今はすべてこれを除きて、ひとり最も人口に膾炙したる（但し玩讀
せらるゝことのないと稀なる）「神女王」のみを取りいで、其のあらましの結構を語
り、且つ其の特質を評するをもて足れりとすべし。彼の作は、或方面より見れば「西
遊記」に酷似し、又或意味より見れば「八犬傳」にも似て、我が國の讀者にとりては一種
の興味あるべしと思はるればなり。

『神女王』は所謂譬喩詩（寓意詩）にて、其の着想に表裏の二面あり。其の一面を
見れば、作者みづからも明言せる如く、體式をホーナー、ブーシム、アリオスト、タッ

ソー等の叙事詩に取りて、中古任侠の勳爵士が氣高く、勇ましく、且つ風流なる、伏邪
挫強の功績と太古希臘の鬼神譚とを巧に混和して叙述したる、荒唐奇怪なる叙事
詩たるに外ならぬを、更らに他の一面を見れば、事々物々に悉く隱微なる寓意あり
て、人物も、事件も、所詮は希臘の古哲學と當時の神學の旨とを祖としたる、一種の倫
理説を有形にしたるものに外ならず、具にいへば、人の醜徳と淑徳との目に見えぬ
軋機を傳奇風に寫したるものなり。即ち種々の醜徳と淑徳とに擬したる人物、禽
獸、草木等が此の物語の緯となり、人間の迷妄、顛倒、正覺、成道の事蹟が、戰國武俠の目
ざましき手柄話に作り做されて、一篇の經となれるなり。總體の結構は、はゞ「西遊
記」の趣なり。

或は曰ふ、スベンサーは當時公私の道德の甚しく頹廢せるを慨して、此の雄大なる
譬喩詩を物したり、其の意古賢人の教旨を俗解し、且つ之れを有形の模範的人物に
作り做して、冷く世俗を教化せんと欲せしに在りと。げに、著者の本願の教訓誨導
に在りしは明かなり、何となれば「神女王」の緒言、兼、發端とも見做すべき、其の友ローッ
トへあてたる書面の中に、著者みづからも明言して曰はく、此の書の大體の目的は

温雅貞淑の徳に訓練せる高上の人即ち士君子の風を涵養するにあり。又曰はく予は未だ國王たらざりしころのアーサー公アーサーは英詩人のまばく題目とするは我國の戯作者が義經をもて義烈の士の本體となし且つ彼れをアーサート云ふが説きたる十二の淑徳を圓滿に具足せるものとして描かまくせり是れ上篇十三卷の目的なり若し幸に此の上巻にして世間に好遇せられなば予は更らに進み或は國王となりし後のアーサー公をも寫し以て諸種の公德政治上の美德をも示さんと試ることあらんと。又曰はく予はアーサー公をして特に大度グレートマインドの徳を代表せしめたり蓋し此の徳はアーサー公と并びに其の他の諸家の説によるに衆徳中の完全なるものにて悉く他の徳を具足せるものなればなり。按ずるに、衆徳は最大義の仁に近し衆徳の會人君の徳なり。スベンサーはかくいへれど其の質アーサートは公正といふ徳を最大の徳となせり。かかるが故に、全篇の叙事中には件の淑徳に適ふべきアーサーの事業を叙しさて別に十二人の武俠を作りて十二の淑徳を代表せしめたりとは物語りの筋に變化あらせんが爲なりと。

按ふに、スベンサーが倫理、道德の旨は、重にブレントとアーサートとに由り

たるを明なるものから終始もつばらに彼等の説に據れるにはあらで、當時の神學の旨をも自家が宗教上の觀念をもほしいまゝに加味して、一種の新倫理主義を現せたり。されば所謂十二の淑徳の一つづつを代表せる各武俠は、いづれも有漏の人間界を脱して無漏の天上界に上らんと力むる正眞の人間の當に具ふべき淑徳を、尠くとも一つは必は十分に備へたるものから尙ほそれのみにては幾分の關切を、尠くとも一つは必は他の神聖なる冥助を得たる後に初めて正覺に達し、天上に到るべき者なりと做せり。而して著者は此の冥助の大部分を與ふる者をアーサー公其の人と作りなし尙其の足らざるを補ふ者を信望慈といふ超自然の三姉妹なりとなせり。アーサーは著者の案に依れば神明の靈徳に代表せる神國の女皇グロリアナ榮光の配たるべき明君にて前にも云へる如く人間に於ける無上の偉徳を代表せり。即ち十二人の武俠は毎卷の主人公にてアーサーは全篇の主人公所謂中央主人公なり。譬へば、アーサーは「八犬傳」に於ける理見義實の如く十二の武俠は八犬士の如し。スベンサーの作の曲亭の如く此れのみにはあらず。彼れは自白してアーサートの旨に據ると稱しながら、自家の觀念を加へ

てほしいまゝに十二の美德を分別したる、曲亭が孔孟を祖述せるが如く見えながら、其の實は頗る通俗なる八行の義解を根柢としたると、恰も同工なり。スペンサーは『神女王』の全篇を十二卷に分ちて、篇毎に章を設くること十二、目ざましき勳功を叙せること都合十二回、以て十二の淑徳を彰顯せん、の心組なりけるが、後に其のうち六卷と断篇二章とのみを作して逝りしゆゑ、残れる七箇の淑徳は果して何々を指したるにか、今は明かに知るに由なし。たゞし、第一卷より第六卷迄に見えたるものは、作者みづからも緒言中に説明したるとゆゑ、いよいよ明白なり。即ち第一卷の主人公となれる赤十字の武士セント・ジールは二心無き人心の誠(Holiness)を代表し、第二卷なる士爵ガイオンは過不及無き肉欲の節制即ち宜といふ徳(Temperance)を、第三卷以下なるプリトマーチス、カムベル並びにトリヤモンド、アータガル及びカリドリアは各々清淨(Chastity)友誼(Friendship)公正(Justice)禮義(Courtesy)の徳を代表せり。第七卷は只其の緒言にやと思はるゝ變り易さを歌ひたる断篇二章を留めたるのみなれば、本文の趣意は知る由なけれど、諸批評家の推察したる所によれば、多分貞(Constancy)を描かんとしたるなるべし。

さて、總じて本篇にて神仙國といひ、神女王などいへる神仙の義は、精神又は虚靈の義にて、所謂神仙國は天上の圓滿樂土を表し、神女王は絶對の神徳、無等無邊の榮光を表したり。又此の神女王の奉事せる者としたる十二人の武俠は、上にもいへる如く、此の靈境に到るに必要な諸徳にて、誠は主に人間の靈性に關したり、其の神明に對して忠實無二なる所以也。また宜の徳は主に人の肉體に關したり、其の肉體の樂慾を節制して神の道にかなふ所以なり。清淨と友誼或は信とも譯すべし、この二徳は清淨潔白なる男女間の關係を維持する所以なり。而して清淨はまさしく純清なる戀愛を代表し、友誼信は男と男との堅固なる親睦を代表せり。又其の次なる公正とは大義公道を重ずるの徳なり。按ふに、愛の能く裁斷せざることろ公道能く之れを裁斷すべしとなせるにやあらん。清淨と友誼とは愛の變相なり。公正は按ふに最も廣き意に用ふる義の意に近かるべし。以上五箇の美德は人と人との交際に缺くべからざるものなり。さて、第六の禮讓は、重に外客即ち初見の人に對して懇切篤實なるを旨とする徳なるが如し、時としては、俗に謂ふ深切の義に外ならぬものと見ゆることもあり。第七の貞は節又は操の義に通へり、

志の變換せざるをいふ。要するに、我が曲亭の『八犬傳』に物したる八徳も非科學的
 分類なれど、スベンサーのも頗る粗糲なる分けかたなり、倫理を説きたるものとし
 ては、二者共に精到明確とはいひがたけれど、とは固より其の作の眞價には關せざ
 ることなり、曲亭の妙も、スベンサーの妙も、寓意の外にあればなり。而してスベン
 サーは、寓意の周到に貫徹して、譬喩のうるさきまでに精細綿密なると、想像の飄逸
 なるど、風調の靈妙なるどによりて、實に曲亭に勝り、曲亭は、其の叙事の結構貫透し
 て而も複雑豊富なると、性情を描くことの巧なるどによりて、や、スベンサーの上
 にいでたり。但し、三家の作は、其の實氷炭の如く相異なりたれば、かく比較するは
 なかりしに失當の沙汰なるべし。

『神女王』の第一卷第一章は、突如として赤十字の武士が馬にまたがり、佳人を従へ冒
 険の旅途に上れる光景を描寫して端を發きたり。されど此の物語の發端は、別に
 彼のロウリウへの書面中に物したり。其の大要左の如し。

神仙國にカローリヤナ榮光を呼ばれたまふ神仙女王おはして、年毎に一たび十二日
 間の盛大なる祝祭を執行し、諸司百官を以てなしたまふと例なりき。全國の精神男
 女こぞこぞ風國にまかりあつたりて、歌舞宴遊しき。或年祝祭の將に開かれんこ

遊樂すまや、いさ歸びたる服裝せる男、輝る色もなく、突然と女皇の御前に來て、敬禮し願は
 せり。此は此の祝典中に要求せらるべき冒險の事案あらば、某におほせつけられたし
 せむをひけり。百官はいふも更なり、女皇も此の男の姿かたちをいさ暇しげなるを
 見
 て一たびは驚き怪しまれければ、かゝる請願をゆるすこと此の大典の恒例なりけれ
 ば、假に其が乞をうけびきて、遊かなる末座に着かしめられき。

程もなきて、濃き皂色の裏服被て、乳白の襪にのれる美しき乙女、片手には鎧を提げ、片
 手には神明より傳はれる貴き甲冑を荷ひたる一頭、駿馬を牽ける矮國の奴を
 此の席に入り來りぬ。此の乙女は、或王國の公主にて、其の名を登姫(トミ)と呼べり。
 (按ずるに、トミナとは單一の義、眞を代表す、眞實は唯一にして不二なればなり。姫が

故國にはおそるじき惡龍住みて、全國を荒らし、剩へ、姫が父母なる國王と皇后とをこ
 らへて、黃銅の塔のうちにおしこめ、加之、魔術もて繋ぎとめければ、姫は悲しき遊
 びたなく、木國をわけいで、此の災厄を救はん義烈の士には、姫と王國のなれば、さ
 らせんといふ、父王の吩咐を齎らして、諸國をさまよひし末、今この風國に來たりし
 なりけり。(案するに、惡龍は惡魔を代表し、國王夫婦は人間の血統の祖を代表せるな
 り、即ち、アダムとイブとに比したり)。

さるほどに、姫が其のこじかたを語りて、神仙女王に哀訴せるを、以前の郎じげなる男
 打開きて、席を進み、願はくは某をして其の厄を救ふ大任に當たらしめたまへと乞ひ
 けり。神女も、神女王も、あまりのことにおぼつかがりて、願にはえも答へず、やがて

靈類は馬に書はせてもて來し甲冑を示していふ此の貴き甲冑のいさよ其の身に
 遺はぬ人は決して此のたびの大勳を奏し得じとなん、御身よく此の物の具を若し得
 るか。即しき男、おめたる色もなく立寄りて、件の甲冑を被けるに、さながら此の人
 の爲に製られけるよと思ふほどに適ひけり。さて裝成りて立ちたる姿を見れば威
 儀凛然といかめしく、殆ど別人を見るが如くなりき。されば神女王は即座に士の辭
 を賜ひぬ。此の武士は其が胸甲と銀の橋とに赤き十字の紋章を著けたりければ、赤
 十字の武士とこそは呼ばれけれ、セント、ジョールジといふ尊き武士は是れなり。

と。これ「神女王」全傳の發端なり。案ずるに、赤十字の武士に、上にいへる如く、誠心
 といふ徳を代表させて、眞壹姫に事ふる者としたるは根本の趣向なれど、此の「神女
 王」の寓意はひとり此の根本の譬喩にのみとゞまらず、往々二重にも三重にもなり
 たらば、毎に他の寓意あることを忘るべからず。そもくセント、ジョールジといふは
 英吉利國の守護尊者なり、かるが故に彼れはスベンサーの時代に於ける英國の國
 教信徒(新教)をも代表せり。此の方面より觀れば、壹姫もまた眞を代表すると同時
 に眞正の宗教を代表せり。要するに「神女王」の根本の結構は(就中、第一卷の脚色は)
 迷悟の大争闘を有形にしたる精神的譬喩詩たるに外ならぬものから、其の寓意は

動もすれば複雑多様になりて、多少狹義に謂ふ嘲世諷俗の旨味をも帯び、當時現存
 の人物をも捉らへ來て篇中の人物に擬したる處もあり、又は宗旨上、政治上の事件
 を取りて隱顯の間にそをはのめかしたる處もあり。即ち、比喻は往々二重、三重と
 なることあり、個人的、政治兼、宗、旨、的、倫、理、的、是れなり。個人的とは、神仙女王グ
 ーリヤナを時の英國女皇エリザベスに比したるが如き、使魔道人を西班牙王フィリッ
 プ二世に比したるが如き、傲慢を法皇の暴力に比したるが如き、公の徳の武士アーテ
 ガルを著者が恩人グレイ卿に比したるが如き、又は貳姫(妖婦)を蘇國女皇メリに比
 じたるがとどきをいひ、政治兼、宗、旨、的、倫、理、的、とは赤十字の武士の行爲をもて暗に英國教
 會の經歷を叙したるが如きをいひ、倫、理、的、とは根本の哲理的結構をいふ。作者が
 此の雜駁錯交せる譬喩を如意周細に料理したる技倆は、眞に駭くに堪へたりとい
 へども、其の譬喩の彌が上に重疊して讀者をして取舍分別に困せしめたるは、諸家
 の已に難じたるが如く、なかくに厭ふべきなり。加ふるに、此の牽強なる譬喩の
 爲に、物語の筋は動もすれば離れん、になり、中央主人公たるアーサーの事蹟は殆
 ど忘れんばかりになりて、各卷の聯絡いとおぼつかなきのみにあらず、女丈

夫プリム、マシーノのいづるに及びては、多少の波瀾はありながら尙全體の上よりいへば、恰も『西遊記』を讀める時にひとしく、妖怪、魔術家、鬼魅、魍魎、戰鬥、驚傷、怪異、靈驗、冒險、災厄などの同七やうなる筋のみ重なりて、心おのづからたゆまるゝに、最後には主人公が必ず勝つと定まりたる『西遊記』『八犬傳』の例におなじければ、ひとへに筋を主として讀む者にだにをがしからず。かるが故に事件を主眼としたる叙事詩のいでは、上乘の作と稱すべからざるを、勿論なり、脈絡貫透といふ點よりいふも、此の書『八犬傳』などに劣るべし。而もなほボトブをして、スペインサトが作にはおと少年を誘ふ偉力あると共にまた老人を誘ふ魔力ありといはしめ、且つアトのボトブをして、一たび此の書を手にすれば、巻を終るまで捨つる能はずといはしめしものは何ぞや、換言すれば、スペインサトの特長は那邊に在るぞ。

按ふに『神女王』の價值は、事件の結構にもあらず、教訓の趣向にもあらず、人物の性情を剖析して徹に入り、眞に逼れるところにもあらず、はた其の譬喩の渾然として周到なるところにもあざざるべし。それらは寧ろ、一步を誤らば、無味乾燥なる寓意諷を作ら、若し諷は荒唐奇怪なる傳奇類を作るの縁たらん。スペインサトの卓然と

凡詩人の上に傑出する所以は、其の悠然として俗に超絶し、其の物語の皮膚の上こそは間々當世の人物と事件とを諷刺したれ、一たび其の靈機の熟し、興の來たるや、颯然として幽玄なる理想を父母とし、實を脱し、虚に遊び、無を有とし、幽を明とし、宛然として出世間の妙境に達したる處にある也。彼れは語をもて抽象を畫くに妙を得たり、古人が彼れを評して詩人中のルーベンズといへるは、適評なり。ドーンデン氏論じて曰はく、スペインサトが教訓を旨としながら尙はよく好詩篇を成すを得たりしは、彼れが天才に二特質あるに因る。曰はく、無形之美を享樂するの力、曰はく、可憐高雅なる性の美を悦ぶの心也。げにや、スペインサトにして此の二特質なく、ひとへに教訓を重ずること古今の俗作家の如くなりせば、『神女王』は一種の勸懲諷たるにとゞまり、詩として殆ど見るに足るの價值なきものとなりしならん、彼れが嚴格に過ぎたる道念は美感を滅却して餘あるべければなり。然るに、スペインサトの熱愛せし善は、ブレトローよりなる靈想界の善にして、本來美と同體のものなりしが故に、その教訓の旨趣もおのづから乾燥ならざるを得たり。換言すれば、彼れはブレトローの靈想を默會して、そを具象的に畫きいだしきとも評すべし。所

證、スペインサーは高遠なる夢を語る者なり、彼れは自家の理想を父母として一の夢幻國を生みいだしき。彼れの想像力の幽にして玄なるや、日進月化して膨脹擴充せるエリザベス英國の目ざましき現象にすらもあきたる能はで、別に理想の新天地を製り、飄逸として夢幻の境に遊びたりき。若し専ら理想の世界に逍遙するを詩人の本領とせば、スペインサーの如きは或は詩人の表極に近き者ならん。クレイ少許てスペインサーを評して曰はく

「よし彼れを稱して詩人の最大なるものといはざるも、吾人は尙彼れの作を稱して諸の詩歌中の最も詩歌的なるものといふを得べし。他の詩人は、總じて詩人たるの資格の外に他の性格をも兼れ具へて、或は考察し、或は推論し、或は諷刺を事とし、或は韻才を弄するに止り、殆ど其が本領たる想像力の正産物を物するの度に相ひこし。ひゞり「神女王」に於けるスペインサーの曲調のみは、詩歌なり、悉く詩歌なり、曲として詩歌ならざるはなし。彼れの作は變化窮極無き音樂の妙音につれて綿々々々開展せられ來たるまぼろしの連綴なり」

と。又曰はく

「一方に於ては、其の妙想を創起し、又は受胎するに於ける工夫と意匠と、他方に於ては、いみじく美妙を感得して活ける如く、且つ音樂の如くに、諸の言葉を表白する目

「右の技術、是れ實にスペインサーの詩の他の諸作に異なる大なる特質なり」

と。ゆげにや、スペインサーの詩の如きは譯すれば、其の靈妙を毀損するを定則とせる東西古今の詩歌中に於て、最も譯すべからざるものなるべし、彼れの作の靈妙はをさく、詞調の間に存すればなり。但し、スペインサーが詞致はエリザベス朝に於てだに已に古雅を以て聞えたるはどなれば、今日之れを玩味せんとすれば、殆どサーの作を讀むときと同等の困難を感すべし。彼れの詞の古雅なるは、一は其の主題の古史譚なるが爲なりと雖も、一は其の理想及び好尙の兎角に保守的なりし爲也。彼れは後のラルター、スコットにひこしく、過去を追慕するの情の深かりし人なり、其の平常の生活も、思想も、むしろ中古的、貴族的にして、政治上、文學上に於ける意見も、總じて保守的なりしこと明かなり。スペインサーはエリザベス文學の前驅にして、其の全盛の太氣は、其の呼吸する能はざりし所なり。彼のベーコンの論文は「神女王」第六篇の發兌と同年にいでたり、シェイクスピアの傑作の如きは、スペインサーの見るに及ばざりしものなり。要するに、理想及び好尙の上よりいへば、スペインサーは王政期の詩人にして、種々の要點に於て、後の平民期、即ち十九世紀の詩人

とは甚しく致を殊にせる者なり。

『神女王』の第一巻を開きて、こゝにその物語の大要と譬喩のあらましとを説かんに、

赤十字の武士セント、ジョールジが登姫と姦奴とをぬて冒険の旅路にたちいでけるはじめは、行手の道々に、清き小川流れ、美しき花ども咲き満ちて、樂しきこと限なしと見えければ、我れも人も、天が下は到る處皆此のごとく常にうつくしがるべしと思ひけり。さるほどに、天氣いつしか冥闇と黒雲だちて、花どもは俄にうなだれ、風はおそろしく吹きすさみ、姫も、武士も、行き懼みつゝ、ゆくりなき暴風雨を避けんとて、こゝある森のうちに潜みけり。此の森のうちの景色、得もいはずめでたく、蒼々繁れる木々、滋々生へる艸ども、樂しげに囀る鳥、面白く蛛手なせる小徑、物として行人の心を樂かざるはなかりければ、人々そらるに深入りして、八重溼のやうなる林間の路に迷ひ、進退きはまるにおよびてやうく、心附き、元來しかたへ戻らまくすれど、ゆけごとく深入りするばかりにて、元のみちすぢにいづること叶はず。

此の怪しの森の迷路は、明かに人生の行路難に擬したり。林樹は、悉く種々の人間生活を代表せり、老櫛を國王に擬し、月桂樹を勝利并びに詩人に擬し、垂從垂柳を愁に沈める情人に擬したるなど、管々しきままでに周細なり。

其のうちに、來るとしなしに、登だに小骨き森陸の洞(迷妄の洞)の前に來にけり。さてセント、ジョールジは勇を鼓して作の洞のうちに進み入りけるに、四下暗うして、文目を分きがたし。されど其が被たる背の光にて向かいひを見れば、女の面たるおそろしき妖怪其の奥に臥して居り、今ジョールジが來たれるを見て、猛然とかけいで、只一くちにくはんとしつ。はじめは武士が身危うげに見えけり。

此の怪物は迷妄の洞の精にておそろしき毒蛇なり。ジョールジの被れる甲冑は、義若しくは正を代表す。即ち、人の誠心を守る物の具なり。

“God helps the man so wrapt in Error's endless train!”

登姫がたはらより茶をかけたいでや、今まことのますらなをさなりたまへ、勇氣に添ふるに信仰をもして、勇ましく戦ひたまへ。御身毒蛇をえ殺さずば、毒蛇つひに御身を殺さんと呼びひける。武士此の言葉に力を得て、奮闘し、幸うじて怪物を斃しけり。

案ずるに、此の段は發心の第一着として迷妄の障碍を除かざるを得ざる由を諷したり、又顯然たる謬妄の認め易く、また滅し易きを諷したり。以下くさくの厄難は一層陰險なる諸の煩惱と誠心の争闘なり。

かくて迷惑の森を逃れいで、再び旅路に上るほどに、いつしか日は全く暮れたり。折から隠者の姿したる尊げなる翁、いづこよりこもなく來て、宿をかさん、さいひて、人

々なそが谷かげの庵に誘ひゆきぬ。此の翁、外面はいさ殊勝げに見えけれど、まごは正を忌み邪をよるこべる卑怯陋劣なる魔術家にて、其の名を使魔道人(偽善者)といふものなりけり。彼れは日ごろ壹姫の無邪純正なるを憎み嫌へりしかば、まづ其の守護者たる赤十字の武士を除きて彼の姫に憂き目を見せんと欲し、其の夜シヨールジがく眠れりし時、睡魔を使ひて怪しの夢を見させ、彼れが心を惑はせ、竟に壹姫にみだらなる行あるやうに疑はせければ、武士は淺はかにも耻ぢ怒りて、其のあした、急に矮奴をぬて、例のあら馬の走るにまかせて、姫をふりすて、去りけり。壹姫かくと知りて打なげき、其の後をたひて魔術家の宿をいでけれど、荒れたる馬のあがき早くて、其の主の影をさへに追はんに由なし。

此の段、偽善のおそるべきを諷せり、誠も之れが爲にはくらまされ、眞も之れが爲には惑はさるゝことを示す。矮奴は人の肉體を代表し、又時としては常識を代表し、又本篇の寓意が政治的となれる時には、下等社會の民衆を代表せることあり。乗馬は動もすれば理性の制御を蔑知せんとする煩悩、邪慾を代表す。こゝの壹姫は偽に對する眞ども見るべく、邪教異端に對する眞正の宗教ども見るべし。

さるほごに赤十字の武士は、姫に分かれゆく途にて、端無くも一個のサラセンの武士と一人の佳人とにいであひぬ。武士は其の名を無信(不信者)といひ、女はフィテッサ(眞實)

と呼べり。シヨールジ(誠心)はサンフォイ(無信)と格闘して難なく彼れを斃しければ、フィテッサ(眞實)の名のめでたきと其の面の菩薩のやうなるこにあざむかれて、得も殺さず、へ彼れが語る偽の履歴をまここし、思ひて介抱し、このこは我れ將てゆかん、といひければ、フィテッサはひたすら媚を献じ、シヨールジが心をさらかさんとつとめけり。

誠の眞に離るゝや、邪見と偽と忽ち來たり襲ふ。フィテッサは假名なり、實名をデニエツサといふ。デニエツサは貳の義、唯一不二なる眞に對する偽を代表す、又羅馬舊教を代表す。而してサンフォイは邪見を代表す。誠は邪見を破る力あれども、偽を退くる明無し、眞に離れたれば也。されば此の段は、一方よりいへば英國を人が眞正の教を抛擲して、まばらしく不信(邪見)におちいりしを諷せり。

さてシヨールジはフィテッサを伴ひて往くうちに、眞實の居る堪へ難かりければ、或大樹の下に休らひて陸を求め、フィテッサの爲に其の木の一枝を手折りて、懸なつくらんとしけるに、怪しや、折れたる木口より鮮血流れいて、怪しき聲を發し、疾くこゝを逃れ去りぬと叫びけり。シヨールジの驚き怪むを、怪樹はおしなだめて、おのが不幸のこしかたを語るらく、我れ元はフラジビオ(懷疑)といふ者にて、フレリッサといふ美人を妻したりしが、或時デニエツサといふ一人の美しき妖婦にあうてよりはじめの程こそはフレリッサと彼れとの間に美醜の優劣を定めかねつれ、遂には妖婦の魔術にあざむかれてフレリッサを見すて、ひたすら件の妖婦にのみしたしみぬ。しかるに、其の後ゆく

りなくも、醜く又おそろしき妖魔の正體を垣間見てければ、我れいたく悔い悲しみ、いかで彼れに離別せんすべしと念するうち、彼れ斯くも知りて太く怒り、我れと我が元の妻をば妖術して浸ましき木と化せしめにき。御身もようせずば同じ妖魔の禍にかゝるべきぞといふ。

案ずるに、ブローリッサ女は主にブレトリーの哲理を代表せるならん、即ち懷疑が偽基督教(デューサ)と純良なる異端(ブレトリー)の哲理との間に取捨を決しかねたるを表したり。此の時ジョールシが「汝等を元の身に復する法無きか」といへるに答へて「活泉に浴するにあらざれば能はず」といへるは、ブレトリーの哲理の、もはや基督教の旨と合體して新活力を得來たらざる限は、世道人心に効能無きを諷したるにや。

されどもジョールシは、ブラジビオの所謂妖婦をば、我が伴へるフェイスは夢にだに知らざれば、彼れが偽りて間絶したるをさままぐにいたはり、其が胸にのらせて、又もそこを立出でけり。さればさて、おき、壹姫はジョールシに見すてられても怒める色もなく、いつて今へたびめぐりあは、やと、あちこちをめぐり、さまよひあるき、其の二日目には、心も身もつゞれて、或森のうちにいこひたる、其の姿いみじうけたかし。

“Her dainty limbs did lay

In secret shadow, far from all men's sight;

From her layre head her fillet she undight,

And layd her stole aside. Her angel's face,

As the great eye of heaven, shyned bright,

And made a sunshine in the shady place;

Did never mortal eye behold such heavenly grace.”

折から一頭の猛獅あり、突然と姫をかまんきてをびかりけるが、姫の清淨無垢なる貴さと美しさに撲たれて、忽然とおとなしくなりて、さながら飼犬のやうに、この時より念々姫が身邊に陪従して、其の非常の護ごとなりける。

猛獅は人間の理性を代表せり、即ち下に叙する所は、一面に於ては、宗教革新以前の英國教會史をほのめかしたり。理性が真正の教旨に一味して無知謬妄を破らんと試みたる趣なり。

壹姫が獅子を將て立寄りし暇が家に、母と女と住めりけり、母は盲にて、其の名をコオシラと呼び、子をアベッサ女と呼べり。

コオシラは盲信を代表し、アベッサは無知を代表すると同時に、中古の墮落僧院を表したり。英語女僧をアベッサといふ。

アベッサは、豈に物いひかけられても、聞くことも、言ふことも、得せざれど、獅子のすま
まじき姿を認めれば、おそろしがりて案の中に逃げ入る。母もまた驚きうるたへ
けるを、豈にやうくささしなだめて、その夜はそこに宿りけり。ふかると小夜中に
なりて、寺院堂宇に入りて寶物を盗むことをなりはひさせ、カルクラピンといふ
漢の入り来て、盗み物の寶も取りいで、アベッサに與へ、まきりに其の心を取る。
カルクは會堂の義、ラピンは剽奪強掠の義、即ち貪婪なる墮落僧を代表す。

此のあたり、寓意こみ入りたれど、一面には、人間の理性の殘賊の所業を惡むことを
あらはし、一面には、ヘンリ八世が諸寺院の財産を沒收せし事を諷せるならん、とい
ふ説あり。後の寓意は、俗にいふ、ハッケなれば、後世の讀者には興無し。さて、スベ
ンサーが倫理説によれば、人間の道を成ずるは理性の力のみにはよらず、むしろ神
明の冥助によれり、かるが故に、著者は第三章の末にいたりて、獅子(理性)の落命を
描けり、左の如し。

豈に少女の家をたぢいで、尙もシールツを尋ねめぐらうちに、闘らすも其の人の
彼方より来るにあひければ、よるこぶこも眼無し。こはまここの赤十字の武士には
あらで、前に見えたる使徒、道人の巧に假裝したるなれど、姫は未だ心附かず。さる程

に、さきに眞の赤十字の武士に殺されしサンロイ(無信)の弟サンロイ(無法)といふ者見
の敵を討たんとて、處々を經めぐり、今しもアキマエーが胸甲を帶ぎに赤十字の紋
草を着けたるを認めて走り近づき、戦を挑みけり。アキマエーは卑怯の本性なれ
ば、大におそれ恐ひけれど、今更逃れんすべなく、戦ひけれど、立ちどころに痛手を負
はされて倒れき。サンロイが立ちかゝり息の根をさめんとするとき、假裝のはがれ
落ちたるによりて、其の人たがへなりしを知り、姫も今まであざむかれたりしを覺り、
驚くこと甚し。サンロイは姫の美しきを見て、ひきたて行かまくす。獅子(理性)は
くま見て大にたけり、躍りかゝりてサンロイをかまんとしけれど、彼れが暴勇に敵し
得ずして、却りて其の命をおとしけり。

此の段、偽善の眞を保護するが如く見えて、竟に保護する能はざるを諷し、且つ道理
(理性)もまた無法には敵し得ざるを諷す。

あはれ、姫はサンロイ(無法)にさらへられて、深林のうちに伴はれ、辱れを受けなんまじ
たる時しも、姫が哭き叫ぶ聲を聞きつけて、四方の林、山、河等より怪しの精も群りつ
いかけて来て、まづサンロイをおひのけて、姫を救ひ、やがてそが腹しき宿に伴ひゆきて、
いたはりかしづくことねんごるなり。姫はまばしそこに足をまゝめて、此のむくつ
けきやからにくさくさの雅びたる手わざを教へ、彼等がいやしき風俗を化せんま力
めき。

由精、林精のむくつけきは、蒙昧野蠻の民を表せり。此の段は人の固有の性の眞教

の美を認識するも、其の美なる所以を覺悟する能はざるを示せるならん。

一四八

“During which time her gentle wit she pines

It teach them truth, which worship her in vain,

And made her th' Image of Idolatryes.”

之れより先き、まことの赤十字の武士セント、ジョールジはファイテッサの妖術にまよはされ
て、ゆく／＼邪道に陥入り、竟に彼れがすゝめに任せて、崩れ易き沙丘のほとりに建て
られたる、いとさら／＼しき宮殿に立寄りける。此の宮殿は邪神女ルシフウラといふ
が、みづからほしきまゝに女皇を稱して、もろ／＼の悪しき神どもを従はせ、驕奢暴慢
に耽りて、年ごろすまへる自なりき。ジョールジとファイテッサが此の宮殿に宿れる間に、
サンロイの三人兄弟の一人なるサンヤノイ無悦といふ者、こゝに來たり、赤十字の紋章
によりて兄の敵を知り、決闘せんと迫り、竟にジョールジとサンヤノイとめざましき格闘
をす。ジョールジは此の戦にて重傷を蒙りけるが、奮戦して敵手をも倒し、殆ど彼れを
殺さんとしけるに、妖婦雲を起こしてサンヤノイをかくしければ、果さゞりき。其のう
ちに、矮奴常識が其の本能の力にて其の主の身の危きを窺ひ知り、さく此のさころを
落ちたまへとすゝめければ、ジョールジもやうやく心附き、手疵の痛を忍びて、駈者の館
を逃れいでき。されどファイテッサが早くもかくと知りてしたひ來たり、またも巧言令色
なもてジョールジが心をさらかしければ、武士は身も心もやう／＼たゆみ、現世に在る

限り、決して脱すべからざる正義の甲冑をもぬぎすて、或木の下に休らひける。此
の油断の折しも、オルゴリア(傲慢)といふ巨人進み近づき、只一撃にジョールジをうち倒
し、妖婦のすゝめにまかせて、或土牢のうらにおしこめけり。かゝりしかば、愚直なる
矮奴はジョールジがぬき棄ておきし甲冑を荷ひて、ひこりまことの姫を尋ね、あらこち
ささまよひぬ。此の時しも、壹姫は精等が宿をたらいで、またも赤十字の武士を尋
ねめぐりつゝありければ、竟に端なくも矮奴にいであひけり。

矮奴は赤十字の武士が災厄を語り、姫と共に不幸薄命を打歎きけるが、たま／＼大
英傑アーサーが靈夢に感じて神女皇にあひ見んと志して、神仙國にゆかんとて、こ
のあたりをよぎれるに遭ひて、一伍一什のこしかたを語り、其の宏大なる助力を得
んことを乞ふ。これより、アーサーが其の請を納れて巨人が居を襲ひ、難戦して竟
に巨人とデュエッサが騎りたる神變不思議なる怪獸とを殺し、赤十字の武士を救ふこ
と、デュエッサが竟に醜惡なる本相をあらはすこと、壹姫の言葉にまたがひて彼れを放
免すること、それより赤十字の武士が大に懺悔し、やがて自暴自棄の病におちいら
んとせしを、壹姫が深切なる介抱と意見とによりて蘇生し、さて懺悔の功德にて前
日の重傷を療治すること、並びに信、望、慈といふ三姉妹が事、ジョールジが更に勇を鼓

して壹姫の故國に趣き、數日の間毒龍と苦闘して、竟に神明の加護によりて彼れ(悪魔王)を滅する事及び眞と誠とのめでたき結婚に至るまでを第一卷のあらましの筋とす。

第二卷にはガイオン(宜)の徳といふ武士が神女王の命をうけて懶惰湖の一島に棲る魔女を退治することを叙し

第三卷にはウェールス國の女王アトリトマーチス(淨)の徳といふ女丈夫が未來の所天を尋ねて諸國を武者修行し、遂にアーテガル(公正)の徳、第五卷の主人公にめぐりあふことを述べ

第四、第五、第六の卷にては、ブリトマーチス、アーテガルの傳を續ぎて友誼、公正、禮讓などいふ諸徳を稱揚せり。

『神女王』は各卷十二章より成り、各章平均五六十解を有し、一解は九句より成れり、かゝるが故に全篇を通計すれば無慮四萬句に及ぶ。作者は初めの三卷に十年の日子を費し、終りの三卷に六年を費し、さきと傳へたれば、豫定の通り十二卷を終へんには、尙ほ十年以上の日月を要すべく、隨うて繪爛を極めたる詞句と複雑を盡したる結

構とは到底末までも持たせんとかたかりしなるべし。そは兎も角も、現存七篇について見れば、第一卷最もめでたく、第二卷これに次ぎ、第三卷以下はやゝ前の二卷に劣りたるは争ふべからず。然れども、一節々々には遺却すべからざる巧妙なる佳作も乏しからずとす。例へば、第四卷なるギーナスの殿堂并びにテムズ河の結婚に百川の集へるを歌ひたる節、又は第六篇なる牧羊者とカレドンの上を叙したる節、及び女神の踏舞、并びに變り易さを歌へるうちの第二章に見えたる四季の行列の如き、是れなり。而して叙景の妙と律調の美とに至りては、各卷いづれも優劣なし。

『神女王』に用ひたる律格は、彼のボッカチオの創始しきといふ *Onia = mine* の八行體より脱化したる九行體(所謂スペインセリヤン)にして、後のトムソン、シヰリ、テニンソン等が物語歌の律格の上に尠からざる影響を與へたるものなり。

第五章 スペンサーと同代の詩人及び散文家

エリザベス時代の詩歌——第一小期(戀愛の詩)——ソネット體及びソネット體——第二小期(愛國及び國史の詩)——諷刺詩——第三小期(哲學的詩歌)——散文家——フッカー及びローリー

エドマンド、スペンサーが諸作は、頗るよく英國に於ける文藝復興期の傳奇的精神を反映したれども、未だ以て當代の全相を現じたりといふべからず。エリザベス時代の英國生活の全相は、他の諸家の作を通覽し、さて後にはじめて窺ふを得べきなり。姑く劇詩(即ち脚本)を除きて、尋常の詩歌のみを檢するも、一千五百八十年以後の詩歌は、おのづから四種に分かれて、明かに國民生活の進化變遷を代表せり。假に此の四段の進化を個人の一生に譬ふれば、第一は年少血氣の期にして、戀歌、傳奇の歌、空想の歌などの最も盛に行はれたりし時なり、第二は國民がやう／＼大人びたりし時、即ち放縱なりし情熱が次第に冷却し、定まれる目的もなくして實行又は思索に狂奔したりし意氣の漸く沈み、一意國家を重んじ、國家の爲に行爲し、國家の爲に思索し、國家の爲に謳歌せんとする愛國心を抱くに至りし時、すなはち彼の史劇家の輩出し、愛國の詩歌の行はれたりし時なり。さて其の次なる第三期は、眞に老成時代と名くべき時なり、國民の熱心と才力とが、もはや事物の外相の上に向かはずして深く諸相の内面に入れりし時、即ち國民の心や、眞摯慎嚴となり、其の分別思量する所もまた頗る深刻となりし時なり。これ詩歌の方面に於ては、頭に哲

學的著作のいてたりし時にて、シェイクスピアが最傑作と稱せられたる悲劇は總じて此の際に物せられき。さて第四期はや／＼上の三時期とは趣を異にせり。上の三期は、之れを青年、壯年、強年に喩へ、若しくは春期、夏期、秋期に喩ふるも不可無きものなれど、第四期に至りては、之れを老年若しくは冬期に喩へんことや、穩當ならぬ所あり。蓋し此の第四期は、前に擧げたる三期の正當なる引續きたるよりは、むしろ宗旨上に關する、軋轢といふ一新原素を加へたる新變遷の端緒なれば、こはエリザベス時代の末年といはんよりはむしろ次なる内亂時代の發端といはんかた穩なるものなり、換言すれば、舊信仰と新信仰との軋轢がまさに關ならんとせし時なり。かの宗旨に關したる詩歌の多く出でたりしは此の際なり。此の畧史に於ては、以上四期中に出でたりし夥多の作家を悉く紹介する能はざるが故に、其のうち最も有名なるもののみ若干を取りいで、略叙し、マロー、シェイクスピア、ベンチンソンなどは別に章を改めて説き、所謂第四期の諸作家の如きは次の内亂時代の篇に於て語るべし。

第一小期の歌、即ち戀愛歌の秀逸なるものは、バルクレーザが編纂せる『黄金

『庫』の第一巻中にあり、よりて此の種の一斑を窺ふことを得べし。其の主題の大概は青年の戀愛若しくは空想に關す、而して其の體式はあしなべて抒情歌の簡短なるもの、即ちソングの體、ソネットの體なり。ソネット即ち十四行體は一千五百八十年より一千六百年に至るまでを極盛なりし期とす、詩集の刊行せられしこと十數篇皆後世に傳はれり。作者はシークスピアを第一とし、スペンサーを第二とし、シドニを第三とし、これに次ぐものを下の諸家となす。

フルク、グレギル Fulke Greville、(一五五四——一六二八)は後年ブルック卿となりし人、ソネット集一卷を著し、"Calice"と題せり。トマス、ワットソン Thomas Watson、(一五九三?)——一六八三)はロンドンに生れ、オックスフォードにて教育を受けたりし人、詩オシドニに次ぐ詩集、"Heatonpathia" (又の名 "Passionate Century")、"Tears of Fancy" 等を著しぬ。ヘンリ、コンスタマン Henry Constable、(一五五五——一六一五?)はシドニの親友、詩風また相似たり。"Diana" は其の傑作なり。其他、ミッター、ドレイトン (一五六三——一六三二)は短歌集 "Idea" を著し、サミュエル、ダンヘル (一五六二

——一六一九)は詩集 "Delia" を公にし、グリフ、フィン Griffin (??) ——一六〇二)は "Fidessa" を、リンチ Lynch (??) ——一六〇二)は "Diella" を、スミス Smith、(一五四六?) ——一六一八?)は "Chloris" を、刊行しき。

以上の諸作は、いづれも當代には相應に名ありし作なれども、其の價值に至りては一々論ずべき程にわらず。まして、こゝに掲げざる歌人の作に至りては、更らに平凡なりしこと推して知るべし。蓋し當代の狀態たる、衣食足りて浮きたる快樂多く、世俗の欲望も、青年詩人の感興も、往々にして戀愛の一邊にのみ集らんとせし、有様なりき。而して作者の大概はスペンサー、シドニ等の淺露なる模倣者たるに過ぎざりしなり。

ソング體の價值もまたソネットと大差なし。詩集に "English Garner"、"Elizabethan Lyrics" 等あり。詩人に、ウォル、ショール、エドワード、ダイヤ、ウォルター、ローリーなどあれど、今は總べて評するに及ばず。

第二小期の歌、即ち愛國の歌は、概して英國の史乘に關したるものなり。かの『治者の鏡』の如きは此の種の詩の萌芽なりきといふべく、シークスピアの史劇の

如きは其の成熟せる果實とも稱すべし。所詮愛國の詩歌は國家昌盛の餘光にして俗にいふ國自慢の意氣感情が煥發して一風の詩歌となれるなり。按ふに此の氣脈を代表したる者は前にも見えたるサミエル、ダン、エル、並びにミッケール、ドレイ、トン、ウイリヤム、ウァーナーの三人なるべし。其の中最も傑出したるをミッケール、ドレイ、トンとす。其の作に長篇の史詩二あり、一を『エドワード二世と諸侯伯との軋轢』と題し、一を『England's Heroical Epistles』と題す。なほ別に『Polyolion』と題せる長篇の作あり、こは韻語もて英國の名勝舊跡を叙狀し、兼ねて種々の奇話逸事を語りたるものにて、卷の數三十、韻語の行數無慮十方なりといふ。短篇にては『The Baron's War』、『The Miseries of Queen Margaret』、『Four Legends』など、つれも名高し。ウイリヤム、ウァーナー（一五五八——一六〇九）の作には史詩『Albion's England』あり。當時の批評家はホーマーの作に比して稱美せしほとなりき。さてまたサミエル、ダン、エルの作には『The Complaint of Rosamond』、『Cleopatra』、『The History of the Civil Wars』、『Hymen's Triumph』などあり。以上皆史詩としてとりくの長所あれど、詩題に入るべからざる史蹟までも強ひて取り入れて吟詠せんと試しは

其の通弊なり。

戀、愛、詩、史、詩の期を貫透し、兼ねて次の哲學的、詩歌の期にまでも亘りて行はれたるは諷刺體の詩なり。或は以て戀愛歌、愛國歌の反面を窺ふの料ともなすべし。作者の重なるものは、『A Flig for the World』を作せしトマス、ロジャ、Thomas Lodge. (一六一五)、『Anatomy of the World』を作せしジョン、ドゥン、John Donne. (一五七三——一六二六)、『Virgideniarum』を作せしジョセフ、ホール、Joseph Hall. (一六五六)、『Pigmalion's Image』、『The Scourge of Villany』を作せしジョン、マーston、John Marston. (一六三四)、『Skialethra』を作せしエドワード、ギルピン、Edward Gilpin. (一六三九)、『Transformed Metamorphosis』を作せしシリル、ソルナー、Cyril Tourneur (一六三九)なり。按ずるに、詩歌に諷刺の脈の入りはじめたるは、遠くスケルトンが勸誨の作を試し頃によりしかば、正當に諷刺詩とも稱すべきもの、世に行はるゝに至りしは、彼のシールジ、ガスコインが作『スチールグラス』に始まりきといはざるべからず。而して『スチールグラス』の世に出でしは、ホールが作『Virgideniarum』に先づこと僅かに二十年に過ぎざれば、諷刺詩は其の發生と發達とを殆ど同時にしきともいふべき。

なり。さるは時勢の然らしめし所なるべし。

第三小期の歌、即ち哲學的詩歌の興りしは、國家の隆運の漸く窮極せんとして所謂企業的熱心の鎮定したるに職由す。すなはち、一方より觀れば、民衆の心に靜坐し思索する餘裕を生せしに因る。されど、また一方より觀れば、當時の國民が漸く人生の大謎語に衝突し、沈思尋究の必要を感じたるに基くなり。さて此の種の詩脈を代表するものは、**ジョン・デーギーズ**(二五六〇? — 一六一八)と**フルク・グレギル**(一五五四 — 一六二八)との二家なりとす。

デーギーズが壯時の作“Orchestra”は全世界を一舞踏と解釋せるものなるが、其の晩年の作に至りては、理窟又は概念に流るゝことますます甚しく、詩趣に遠かることいよく甚し。『自己を知れ』といふを其の長篇の表題としたるを見ても、其の詩の如何なるかを察するに足りぬべし。シェークスピアの如きも、多少此の氣脈に感染したりし證據、其の喜劇より悲劇に移る過渡にはの見えたり、すなはち一千六百〇一年のこの作是れなり。さて、**フルク・グレギル**は、上に擧げたる“Chancellor”の作者にして、“Poems of monarchy” “Treatise on Religion”等の諸作あり。詩人と

John Davies.

Fulke Greville.

Richard Hooker.

しては或はデーギーズの上にあるべし。

要するに、民心上に於ける此の哲學的傾向は、後に空想を擺脫するに及びて、**ホツアズ**、**パーリントン**、**ロツク**なさいふ純乎たる大思索家を出だす前兆なりき。**リ、シドニ**等が華文につぎて**エリザベス**朝に於ける散文の名家として傳ふべきは、宗教文學にては**リチャード・フッカー**、史家にては**フルタル**、**ローリー**、哲學上の論說にては**フランシス・ベーコン**、此の三家とす。フッカーとローリーとは第二期の**エリザベス**文學中に攝すべきものたるよりはむしろ第一期中に屬せしむべきものなれど、便宜の爲にこゝに附叙す。

リチャード・フッカーは温厚篤實なる神學家にして、實際家即ち活動の人としては大に傳ふべきもの鮮なれども、文壇の俊豪としての聲譽は長く其の名著“A Treatise on the Lawes of Ecclesiastical Polity”と共に傳はりたり。一千五百五十三年に生まれしが、家甚だ貧なりしかば、**オックスフォード**なる**コオパス**、**クリスチ**、**コレツヂ**といふ大學の筆生となりて苦學すること十五年あまり、遂に校友に擧げられ、つゞいて講師となりぬ。かくて千五百八十四年、同州の教會長となり、説教に従事する

こと七年にして、退きてウルトンヤ及びケンントに閑居し、「Ecclesiastical Policy」八巻を著し、が、一千六百年にみまかりき。此の書の初四巻は一千五百九十四年に、第五巻は同九十七年に印行せられ、六、七、八の三巻は其の没後に出版せられき。此の著の當面の目的は教會員に對する英國基督教會の権理の基礎を考定し、該教會の根本大法を講明し、且つ各會員が常に教會に對して遵守せざるべからざる義務の本領等を論定するにありき。たゞし、そはたゞ直接の文義にして、更に深く含味するときは、フッカーの所論は其の關係する所頗る深遠なり、此の書は常に英國教會の権理義務を論定して羅馬教徒並びにカルギン教徒の妄を破せんと試みたるものといはんよりは、寧ろ一切の政治及び宗教上に於ける法規權利義務等を講明せんと試みたるものともいふべし。其の文辭は明暢雄勁にして、そのころ神學上の著述の常弊たりし虚飾術學の失に陥りたる點いと尠し、而もおのづから修辭の則に合ひて典雅醇正なる好辭妙文に乏しからず。たゞ多く羅句語格を應用せんと力めたる折ふしには、強ひて英語を曲折せしめたる嫌ひもあれど、全體の上よりいへば、辭意双つながら此の著の如きはいと稀なり。其の爲人本來忍容の雅量に富め

Walter Raleigh.

りしが故に、其の論旨もまた頗る中正にして穩當なり。

「チャルター、ローリー」(一五五二—一六一八)は當代第一流の俊傑なり。壯にして秀才の譽高く、文武の功績尠からざりしかば、女皇エリザベスの殊寵を蒙り、遠く亞米利加の新土に航してブリージニヤの植民及びギヤナの政略によりて更に盛名を博し、且つはじめて馬鈴薯と煙草とを英國に輸入せり。身を終ふるまでに、政治、航海、金鑛等に關する著述凡そ三拾餘種に及びきといふ。後世には、重に歴史家として知られたれど、其の世にありしや、廷臣としても、武將としても、航海家としても、政治家としても、ばた詩人兼散文家としても、録々の譽高かりき。エリザベス崩じ、ジェームズ一世皇位を繼ぐに及びて、ローリーは故無くして王の忌諱に觸れ、罪ならぬ國事犯の罪を得て、獄に繋がる、こと十餘年なりしが、新に王家の爲に南米に渡航せんことを獻議して一旦其の罪を赦されしかど、企業其の功を奏せざりしかば、又もや王の不興を醸し、一千六百十八年更に前罪によりて死刑に處せられき。之れより先き、十二年間獄に在りし折から、をさく、理學、文學などの研究に従へりしが、幸ひに博學多識なる友人等の助ありしかば、竟に獄中にて、彼の有名なる『世界史』を卒

業するに至りき。ローリーが散文の名家として後世に知られたるは重に此の大著述に因りてなり。此の『世界史』は筆を世界の創造に起して、宿命の説、豫知の事、自由意志、樂園、大洪水等に關する基督教の古傳説を採録し、次にアソリヤ、ペルシヤ、希臘、羅馬の史を語りて、筆をマセドニヤ帝國の瓦解に至りて止めたり。行文平明にして氣格高雅なり。

さて、上に擧げたる二家の外に、更に特筆すべき一大散文家あり、他なし、有名なるフランシス・ベーコン是れなり。ベーコンは實にエリザベス朝に於ける散文々學の極頂を代表せると同時に當時の學問界をも代表せる者なり。嘗て英國最大の哲學家と稱せられし溢美なる名譽は今漸く衰へたれども、其の學問上に於ける功績は尙優かに大書特筆すべき價値あり、所謂歸納的、論理法は全くベーコンが力によりて學壇に弘布せられしなり。

第六章 フランシス・ベーコン

當時の學界——學風の革新——ベーコンの經歷——著述——學風刷新
論——其の學說——『短論文集』——其の文章

ベーコンが略傳を叙する前に、少しく十七世紀の起頭に於ける英國學問界の**景況**を説かんに、其のこゝろ哲學と呼び、科學と名けたりしものは、頗る近代の趣を異にせり。彼のオックスフォード及びケムブリヂの大學の如きは、當時已に學問の中心たりしが、そこに於て教授せし哲學、科學は、所謂スコラ哲學派の餘弊を傳へて、煩瑣なる講究に流れ、甚しきに至りては、偏に名目の末に拘泥し、迂腐爛熟の生氣なきを例としたりき。最も重せられたりしは論理學と倫理學となりしが、これはた古希臘の預學アリストートルが學說の枝葉に泥みて、所謂演繹論理法の濫用に流れたりき。按ふに、アリストートルは古代哲學の泰斗にして、其の學說の宏博なるや、物理、政理、倫理の各部門に涉り、加ふるに、其の比類なき綜合力と判別力とは、よく彼れをして古今有數の大智者、大哲學者たるの位置を領せしめたりしが、其の哲學の器械的部門たる（エリザベス王朝に尤も盛に行はれし）所謂演繹論理法は、觀察精要、用意周到なるアリストートル其人にして始めてよく善用すべき利器なるも、俗學之れを用ふれば弊の生ずるをまぬかる、能はざるものなり。英國十七世紀の起頭は、恰も此の弊の顯然たりし時にて**學風革新**の必要は日々に學界に逼り

たりき。

之れより先き、中世紀のころより、哲學と宗教と互に相接近し來りて、遂には羅馬舊教派の神學説と古代希臘の哲學とはいつしか相密關する者となりき、然るに所謂神學説は本來保守の性質を有し、哲學はもと進歩を第一となせるがゆゑに、二者は動もすれば相矛盾し、教理は之れが爲に其の礎を危うし、哲學は之れが爲に其の眞を毀へりき。且やアリストートルの學説も、其の末流に墨守せらるゝに及びては、甚しき保守の學風となり、只管抽象の眞理を講究することをのみ目的として、殆ど人世と相關せざるもの、如く、實際に隔たること日に遠く、ベーコンの時に至りては、此の弊殆ど其の極に達し、學風一新の必要はますます著くなり來たり。活眼達識の士は、之れより先きにも、屢々スコラ學派の羈絆を脱して刷新を行はんとを企てたりしが、教會の威力盛なるが爲に、いづれも其の功を奏せざりしに、ベーコンいづるに及びて、學風革新の端は開かれたり。要するに、ベーコンは反動の兒なり、空理的學風に反動して起りたる新學説の祖師なり。其の實利的應用に偏局せしは勢の止む能はざりし所ならん。其の學説の大要を語るに先ちて、

Francis Bacon.

其の傳のあらましを叙すべし。

フランシス、ベーコンは一千五百六十一年一月廿二日英京ロンドンに生まれき。(我が朝正親町天皇の永祿四年にして藤原惺窩の生誕と同年に當る)。其の父は時の掌璽官士爵ニコラス、ベーコンなり。フランシスは十三歳にしてケムブリッジ大學に入り、夙に穎悟の譽ありしが、其のころ己にアリストートルの學説を批議し、ひそかに思へらく、アリストートルの哲學は徒らに空論を教ふるに過ぎず、人生に裨益する無所しと。大學にありしと三年、やがて駐劄公使の隨行員となりて佛蘭西に遊びぬ。當時の佛京は豪華蕩逸の府にして、かして遊ぶ者殆ど其の弊に薰染せざるはなし、彼れひとり超然、滯留三年の間、曾て講學を怠らざりきといふ。たまたま其の父の訃に接し、勿々として國に歸る、此の時『歐洲現狀論』の著あり、是れ其の最初の作なり。其の尙いと稚かりしや、女皇エリザベスは屢、其の父ニコラスの邸に臨み、フランシスが聰慧なるを愛し、其の齡にまして大人びたるを稱へて小掌璽官と呼びしことありしのみか、時の宰相シ、ル氏バレー卿は其の伯父に當り、官縁ははじめより淺からざりしかと、故ありて伯父に忌まれ、仕官を求めて得

ざりしかば、まばらしく志を官に断ち、はじめ法律學を修めたりしを傳手に、狀師をもて職とせりき。されど本來の嗜好は哲理の講究にありしかば、暇ある毎に哲學を研鑽し、夙く其の大著『學風刷新論』又の名『真正哲學の大創設』の稿を起しぬ。一千五百八十二年はじめて法庭に出づ、同八十五年、ノルコム選出の國會議員となりて多少の名聲ありき。然るに其の性華美驕奢を好み、衣食住なべて其の分に過ぎたりしかば、負債山の如く、進退殆ど谷まらんとせり。幸ひにも時の權門エッセックス伯に知られたるより、伯の幹旋にすがりて大狀師グランド・バネーターの榮位を得んと試るに至りしが、又バレー卿の爲に妨げられて、其の志を果たさざりき。伯はベーコンが失望を慰めんとてトキケンハムといふ園囿を讓與せり、其の價凡そ一千八百磅に當たれりきといふ。ベーコンが伯に負ふ所は尙かばかりにはどゞまらざりしに、交誼はいくばくもなく破れたり。蓋し、ベーコンの炯眼は早くもエッセックスの異圖あるを看破して之れに附隨するとの危きを覺りしかば、二つには數回諫争を試みしも聽かれざりしが故に、交を絶ちけるなり。かくてエリサベス女皇の晩年に至りては、漸く用ひられてミッドルセックス選出の國會議員となり、つゞいて女皇の願

問に擧げられたり。時にエッセックスが國事犯事件起りぬ。ベーコンは舊恩人の爲に多少幹旋する所ありしかど、女皇の怒釋けずして、伯は竟に死刑に處せられにき。伯が悖逆を公告せし公文は女皇の命を受けてベーコンがみづから起訴せしものなりといふ。

此の頃小品の論説文をつゞり、積みて十篇となれるをば一冊子となし、一千五百九十七年に發刊しき。是れ今尙もてはやさるゝ『エッセイス』の一部なり。一千六百後又更に増補修正する所ありき。一千六百六年、ベーコン四十五歳の時、デーブサイドの豪商が女アリス、バーンハムといふを娶る。之れより先き、女皇崩じ、デームス二世位に即く。ベーコン王に寵用せられ、まづ士爵ナイトを授けられ、ついでソリシトアとなり、アットルチーとなり、掌櫃官となり、大司法官チャンセルとなり、一千六百十八年、更に進みてエルーラムの男爵に叙せられ、翌三年、またセント、アルバンスの子爵となりぬ。そが畢世の大著『新機關』ニュー・メカニクスは一千六百廿年に上梓せられき。稿を更へしと十
二回に及びきといふをもても、經營慘憺の著述たるを知るべし。此の時に當たりてベーコンが名譽威權を嫉むの徒、仔細に彼れが陰匿を摘發して上訴す、收賄に關

する罪凡そ二十三ヶ條なりき。ペーコンは貴族院の彈劾を受けしが、其の一をも辯疏する能はずして罪に伏しぬ。すなはち一千六百廿一年にシークスピヤの死後五年其の官職を褫はれ、四万ポンドの科料を課せられ、剩へ獄に下されけるが、王デュームス其の前功をおもうて其の科料を免じ、在獄二日の後、釋放せり。

爾後ペーコンはゴルハムベリの村莊に退隱して、専ら讀書著述、乃至科學の實驗等に從事せりき。舊稿に屬する論文の添削、『ヘンリ七世紀』の編述、『新アトランチス』と題せる哲學的架空談の著作、及び其の大著『學風刷新論』中の自然史に關する部分を物したりしは正に此の間なりきといふ。一千六百二十六年にみまかりぬ。(藤原惺窩に後ること七年なり)。

ペーコンが大著『學風刷新論』“Instauratio Magna” or “Great Institution of True Philosophy”は六篇にて完結の筈なりしが、四、五、六の三篇は斷篇、零章をといめたるのみ。第一篇の正題は“Partiones Scientiarum”にて、専ら當時の學問の狀況を概論し、其の衰頹の原因を説明せる者にて、二千六百〇五年『學問の發達』(“The Proficiency and Advancement of Learning”)と題して英文にて出版せしが、其の後多く訂正増補して、一

千六百八十三年あらためて出版しき、此の時はすべて羅甸文をもて物し、書名も“De Augmentis Scientiarum”と改めたり。第二篇はすなはち『新機關論』“Novum Organum”にして、こは専ら演繹論法の謬妄を説破し、歸納論法の必要なる所以を論じ、且つ其の原理を説明せる者也。曰はく人間は自然の臣僕兼解釋者なり、彼れは自然界の法則及び秩序に關しては、自ら作爲若しくは冥想して、觀察し得たることの外を知る能はず、又行ふ能はずと。謂ふ意は、凡て談理は實驗を礎とせざるべからずといふなり。又曰はく從來人間は自家の觀念によりて宇宙を作らんと欲し、且つ自家の心中に其の一切の素材を見出さんと試みたりしなれど、若しえかせずして、専ら經驗と觀察とを基礎となし、ならば、空論、空説のかはりに、事實を收むるを得たりしなるべく、且つ竟には物質界を左右するの大法を知るに至りしならんにと。是れ將た粗鹵なる演繹論法の弊を刺れるなり。

按ふに、ペーコンが歸納論法は英國實驗科學の礎となりしものにて、『新機關論』の如きは其が大著中の最要部たるや明かなり。彼れは、此の篇に於て、歸納法の諸則を規定せしのみならず、論者の動もすれば、陷り易き諸種の過誤の根原を論じ、且

つ其を矯治すべき方法をも説けり。彼のアリストートルは夙に論理式を規定し、三段論法の準則を設け、かくして似て非なる推論を豫防せしが、ペーコンは更に一步を進め、論理的誤謬の原因の單に用語上にのみ存せずして、論者の心内に在るを看破し、仔細に僻見の因縁を説けり、是れ有名なる四偶像論なり。其の要に曰はく、或一族又は或一門の舊慣、舊習を崇尊し、荒唐奇怪なる傳説を推重し、其の他を顧る能はざるが故に、謬見生ず、是れ一なり。若しくは或政黨、宗旨、時尚、時習等に執着し、又はおのが得意の書に拘泥し、何事を觀察、批判するにも其の準繩を棄つる能はず、此の故に謬見生ず、是れ二。若しくは、其の境遇、又は其の公職とする所の事業、即ち自家の専門にのみ着して其の以外の美を認むる能はざるの謬見、是れ三。若しくは或學說に執着するよりして生ずる謬見、此れ四と。

さて、第三篇は“Phænomena Universi”にして、これは事實と經驗とを蒐集し、且つ之れを分類、整理する方法を教へたるものなり。蓋し、事實と經驗とは歸納法の精髓なり。此の篇中風の由來、生死の由來は、羅句文にて物し、自然史の部は“Civica Syntaxis”と題して英文にて物せり。さて、第四篇“Scala Intellectus”、第五篇“Protonia”第

六篇“Philosophia Secunda”は、つづれも斷篇たるにとゞまれり、就中最後の篇は全く筆を下さざりしなり。これらは今細説するの要なければ省きつ。

ペーコンは、はじめて歸納論法を規定せしと、學風の革新を唱道せしとの爲の故に、一代に盛譽を博し、且つ若干の裨益をも興へたれど、其の實彼れが説はあまりに實用に偏したるものなり。彼れはあくまでも厚生利用をもて諸の學問の目的なりとせり。「智識は實力なり」といへる彼れが訓言は、最も露はに其の持論を表示せる者といふべし。彼れは以爲へらく「自然即ち造化の理を知るは、そを利用するの力を得る謂也」と。テーヌはペーコンを評して曰はく

ペーコンは最大の度に於て常識コンモンセンスを有したり、彼れは極めて實際的なり、又實利的なり。彼れがアリストートルを大才と稱しながら、其の學說を非難せしは、アリストートルが哲學の人間の利福を並抄するに益なきが爲に外ならず。要するに、ペーコンは思索其の物を受する人にあらずして、實地應用を受する人なり。其の目は天に向はずして地に向ひ、浮虛なる事物に向はずして堅實なる事物にのみ向へり。彼れ已に其の哲學を名けて「新機關」といふ、彼れが眼中より見いだし來たれば、學問は悉く人間改造の器具たるに外ならざりしなり。

ど。げにや、嚴密に評せば、彼れば大なる思索家にはあらずして、むしろ大なる應用家また大なる修辭家なるべし。彼れが論說の大かたは、絶妙の巧辭もて表白せられたる大常識の集會ともいひつべきなり。されど、其の學識の該博にして、精根衆に超え、一代の卓見家たりしことは争ふべからず。尠くとも英國、經驗學派の率先者たるの名譽は、何人も否む能はざる所ならん。

ペーコンは羅甸の古文學を崇敬するのあまり、近世國語を卑しむこと甚しかりき。謂へらく、總じて此等近世語は、早晚書籍と共に亡滅すべきものなりと。彼れの書を著すや、たゞ英國語をもて綴ることあるも、多くは別に羅甸文をもて其の譯をなすを例としたりき。さるは、英語亡滅の後を慮りてなるべし。かく自國語を卑みし應報は、靦面なりき。そが羅甸文の著作は甚だ多けれども、『新機關』を除くの外は、今殆ど讀まるゝものなし。然るに其の英文にて物せる『エッセー』及び『The Advancement of Learning』、『學問の發達』は我が國人にすらも愛讀せらる。其の外『ヘンリ七世紀』、『The New Atlantis』、及び『The Sylvania』もまた英文もて綴られたれど、此等は今殆ど讀まれず、但し、こは其の内質の陳腐なるが爲のみ。

要するに、ペーコンが後世の俗間に知らるゝは、重に其の『エッセー』即ち『短論文集』によりてなり、而して其の文章家としての眞價値は、専ら之れによりて見るを得べし。件の論文は、總體にて五十八篇、いづれも『文章軌範』、『唐宋八大家文集』などにありふれたる如き短篇にて、近世に謂ふエッセー(論文)とは趣き異なり。もとエッセーといふ語は、試筆、又は試文などいはんは、その義にて、思ひよれるまゝを咄嗟の筆に物したるを指せるなりき。さればペーコンのエッセーも、大抵は隨筆めく論文にて、近世に謂ふ物々しき論文にはあらず。さりとして、我が國の隨筆物のやうに、秩序もなく感ずるまゝを筆に言はせたるにはあらず、句々洗鍊にして、言々圓熟、條理はた井然たり、處々散文の詩ともいふべきほどの詞藻うつくしく、比喻巧みなれど、而も一字の冗なく、簡淨の致を極めたり。或は稱してペーコンの句々は皆格言なり、其の一句を敷衍せば、一大論文を成すに足らんとはいふ、詢に然り。

ペーコンの文は、當朝に於ける華なる散文の極致を代表す。彼れの冷靜と圓熟とを以てして、尙幾分か華文めく病ひあるを免れず、詩的時勢の影響の大なるを見るべし。